岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 265

矢　知　遺　跡
岡山城内堀跡ほか
津 山 城 外 堀 跡

２０２３

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

本書は、昭和63年度から平成２年度にかけて発掘調査を実施した、矢知遺跡、岡山城内堀跡ほか、津山城外堀跡の発掘調査報告書です。矢知遺跡は県道矢知赤坂線建設に伴い、岡山城内堀跡ほかは岡山市城下地下駐車場建設に伴い、津山城外堀跡は都市計画道路新錦橋押入線建設に伴い、記録保存調査を実施しました。

矢知遺跡は、岡山市北区御津矢知の中山間部に位置する中世の集落遺跡です。調査では建物を区画する溝が確認でき、出土品には瀬戸産四耳壺や青白磁合子が含まれていることから、地域の有力者の居館の可能性が考えられ、近隣に所在する矢知城跡や地頭山城跡といった中世山城跡との関係が注目されます。

岡山城内堀跡ほかと津山城外堀跡は、緊急かつ小規模の発掘調査でしたが、岡山城跡では、中堀跡の位置と規模が初めて発掘調査によって確認できたほか、三之曲輪跡東辺において内堀の埋没石垣を検出しました。津山城跡では、北門と城外を結ぶ土橋と外堀の規模を確認し、北門の位置を想定することができました。この二つの発掘調査は、岡山県における近世城郭跡発掘調査の嚆矢であり、その後の記録保存発掘調査へとつなげることができました。

諸事情により報告書刊行が遅れておりましたが、ようやくここに刊行の運びとなりました。本書が、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、地域の歴史に対する理解を深めるための資料として広く役立つことを願います。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、岡山県土木部をはじめとする関係機関や多くの地元地区の皆様から御理解と御協力いただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和５年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　大　橋　雅　也

例　　言

1　本書は、昭和63年度から平成２年度にかけて実施した、県道矢知赤坂線建設に伴う矢知遺跡、城下地下駐車場建設に伴う岡山城内堀跡ほか、県道新錦橋押入線建設に伴う津山城外堀跡の発掘調査報告書である。各発掘調査は、都市計画道路新錦橋押入線建設・県道矢知赤坂線建設が岡山県土木部から、城下地下駐車場建設が岡山県道路公社（平成18年３月31日解散）から岡山県教育委員会が依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

2　岡山城内堀跡ほかは岡山市北区表町１丁目５－１他、津山城外堀跡は津山市北町131他、矢知遺跡は岡山市北区御津矢知1271他に所在する。

3　調査の期間は、岡山城中堀跡の立会調査を昭和63年８月～10月にかけて、同内堀跡の発掘調査は平成元年２月８日～２月21日にかけて実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員 井上弘・宇垣匡雅・平井泰男が担当した。津山城外堀跡の発掘調査は、平成２年１月23日～１月31日にかけて実施し、同センター職員 柳瀬昭彦・小松原基弘が担当した。矢知遺跡の発掘調査は、平成元年４月25日～６月27日にかけて実施し、同センター職員 内藤善史が担当した。

4　調査面積は、岡山城内堀跡が250㎡、津山城外堀跡が450㎡、矢知遺跡は600㎡である。

5　本書の作成は、令和４年度に実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員 弘田和司が担当した。

6　本書の編集・執筆は弘田が行ったが、調査経緯及び調査概要については、宇垣匡雅「岡山城中堀ほか」『岡山県埋蔵文化財報告19』1989、宇垣匡雅「岡山城内堀」『岡山県埋蔵文化財報告20』1990、内藤善史「矢知遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告20』1990、柳瀬昭彦「津山城外堀」『岡山県埋蔵文化財報告20』1990、小松原基弘「津山城外堀跡」『岡山県埋蔵文化財報告21』1991を参考にした。

7　本書の遺構写真は、調査担当者の撮影である。遺物の写真撮影については、江尻泰幸の援助と協力を得た。

8　本発掘調査に係る出土遺物・図面・写真は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325－３）において保管している。

9　本報告書作成にあたっては、赤坂健太郎、重根弘和（岡山県立博物館）、富岡直人（岡山理科大学）、乗岡　実（丸亀市教育委員会）、樋口英行（高梁市教育委員会）、平岡正宏（津山市観光文化部）、間野大丞（島根県教育庁文化財課世界遺産室）、岡山県立記録資料館、岡山大学附属図書館の各氏・各機関から、資料提供及び資料調査の協力並びに有益な御教示を得た。記してお礼申し上げる。

凡　　例

1　本書に用いた高度は海抜高である。

2　本書に用いた北方位は磁北である。

3　本書に用いた遺跡名称・遺構名称は、岡山城跡、津山城跡、岡山城内堀跡、津山城外堀跡とし、歴史的記述では跡を略した。

4　全体図、個別遺構図、遺物実測図には、それぞれ縮尺を明記している。土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。

5　本書に収載した遺物実測図のうち土器以外は、瓦類：Ｒ、土製品：Ｃ、石製品：Ｓ、のとおり遺物番号の前に記号を付した。

6　遺物の観察表に記載した色調は、「新版標準土色帖」による。

7　本報告に使用した地図類については、矢知遺跡周辺の遺跡（第２図）は、国土地理院発行の1:50,000 地形図「岡山北部」・「和気」・「福渡」・「周匝」に「おかやま全県統合型ＧＩＳ」の遺跡分布図を合成して作成した。岡山城跡と調査位置（1/9,000）（第 23 図）は、岡山市市域図（縮尺２千５百分の 1)、調査範囲（第 24 図）・遺構配置（第 25 図）は「おかやま全県統合型ＧＩＳ」の案内地図､津山城跡と調査位置（1/9,000）（第 36 図）は津山市編「津山城外濠跡」『新修津山市史』を使用し、一部加筆した。上記以外は、事業者である備前地方振興局・美作地方振興局・岡山県道路公社から提供を受けた工事図面を製図し、一部加筆して使用した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過
第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２節　発掘調査と報告書作成の体制 …… 2
第２章　矢知遺跡 …… 5
第１節　遺跡を取り巻く環境 …… 5
第２節　調査概要 …… 8
第３節　小結 …… 22
第３章　岡山城内堀跡ほか …… 23
第１節　遺跡を取り巻く環境 …… 23
第２節　調査概要 …… 27
第３節　小結 …… 36
第４章　津山城外堀跡 …… 37
第１節　遺跡を取り巻く環境 …… 37
第２節　調査概要 …… 40
第３節　小結 …… 49
第５章　津山城搦手側城郭構造 …… 51
遺物一覧表
図　版
抄　録

図目次

＜矢知遺跡＞
第１図　矢知遺跡の位置（1/2,000,000）…… 5
第２図　矢知遺跡周辺の遺跡（1/50,000）…… 7
第３図　調査範囲（1/1,500）…… 8
第４図　調査区土層断面（1/80）…… 9
第５図　遺構配置（1/200）…… 10
第６図　竪穴１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 11
第７図　１区柱穴出土遺物（1/4）…… 12
第８図　Ｐ 27（1/30）…… 12
第９図　掘立柱建物１（1/60）…… 12
第 10 図　掘立柱建物２（1/60）…… 13
第 11 図　２区柱穴出土遺物（1/4）…… 13
第 12 図　土坑１～４（1/30）、土坑３・４
出土遺物（1/4）…… 14
第 13 図　土坑５（1/30）・出土遺物（1/4）…… 15
第 14 図　土坑６（1/30）…… 15
第 15 図　土坑７（1/30）・出土遺物（1/4）…… 16
第 16 図　溝１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 16
第 17 図　溝２（1/30）・出土遺物（1/4）…… 17
第 18 図　１区包含層上層出土遺物（1/4）…… 18
第 19 図　１区包含層下層出土遺物（1/4）…… 19
第 20 図　１区包含層他出土遺物（1/4）…… 20
第 21 図　２区包含層出土遺物（1/4）…… 21
第 22 図　矢知城跡縄張図（1/3,000）…… 22
＜岡山城内堀跡ほか＞
第 23 図　岡山城跡の位置（1/2,000,000）…… 23
第 24 図　岡山城跡と調査位置（1/9,000）…… 25
第 25 図　調査範囲（1/2,500）…… 26
第 26 図　調査区の基本層序（1/80）…… 27
第 27 図　遺構配置（1/1,000）…… 28
第 28 図　内堀跡１～３区（1/60）…… 29
第 29 図　内堀跡４～６区（1/60）…… 30
第 30 図　中堀跡断面（1/80）…… 31
第 31 図　出土遺物１（1/4）…… 32
第 32 図　出土遺物２（1/4）…… 33
第 33 図　出土遺物３（1/4）…… 34
第 34 図　『備前岡山地理家宅一枚図』…… 36
＜津山城外堀跡＞
第 35 図　津山城跡の位置（1/2,000,000）…… 37
第 36 図　津山城跡と調査位置（1/5,000）…… 39
第 37 図　調査範囲（1/1,000）…… 41
第 38 図　調査区配置（1/200）…… 42
第 39 図　１区遺構配置（1/100）、石垣立面・
土層断面（1/60）…… 43
第 40 図　２区遺構配置（1/100）、土層断面（1/60）…… 44
第 41 図　Ｔ１断面（1/60）…… 45
第 42 図　Ｔ２断面（1/60）…… 45
第 43 図　Ｔ３断面（1/60）…… 46
第 44 図　土橋・Ｔ４・５断面（1/60）…… 46
第 45 図　出土遺物（1/4）…… 48
第 46 図　北門跡の位置（1/250）…… 50
第 47 図　津山城搦手の城郭構造（1/1,500）…… 52
第 48 図　『美作国津山城絵図』にみる北門 …… 53

表目次

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧 …… ３・４
遺物一覧表 …… 56

図版目次

矢知遺跡

図版１

１　１区全景（南から）

２　土坑１（南から）

３　Ｐ 27（南から）

図版２

１　１・２区間土層断面（西から）

２　２区柱穴群（南から）

３　竪穴１（南西から）

図版３

出土遺物１

図版４

出土遺物２

岡山城内堀跡ほか

図版５

出土遺物３

津山城外堀跡

図版６

１　１区石積（西から）

２　２区石段（北西から）

図版７

１　２区全景（南から）

２　Ｔ１断面（北から）

３　Ｔ２断面（北から）

図版８

出土遺物４

本文写真目次

写真１　岡山城内堀跡作業風景 …… 4

写真２　岡山城内堀跡石垣の検出 …… 4

写真３　岡山城内堀跡石垣 …… 4

写真４　「岡山城内堀石垣」の碑 …… 4

写真５　岡山城内堀跡出土貝類 …… 35

写真６　岡山城内堀跡ほか出土獣骨・人骨 …… 35

写真７　津山城外堀跡調査前風景 …… 50

写真８　津山城外堀跡調査後工事風景 …… 50

写真９　津山城外堀跡調査地西の切岸断面 …… 50

写真 10　津山城北東の竪堀と切岸 …… 50

写真 11　津山城を北から望む（岡山県立記録資料館蔵：昭和 38 年撮影）…… 54

第１章　発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

１　矢知遺跡

矢知遺跡は、岡山市北区御津矢知（旧御津郡御津町矢知）に所在する。県道矢知赤坂線は、当該地の岡山県道 255 号仁堀中御津線との交点から岡山県赤磐市多賀の岡山県道 27 号岡山吉井線との交点にかけての総延長、約 3.5km の一般県道である。この建設工事の最中に遺物が発見されたことから工事を管轄する岡山県岡山地方振興局 (当時) 建部建設事務所長より、矢知散布地として遺跡発見届が提出された。この矢知散布地の取り扱いについて、県土木部道路課 (当時) と県教育委員会文化課 (当時：以下、同) との間で協議を行った結果、工事を一時中断して、遺跡の遺存している 60 m ほどの区間について発掘調査を実施することとなった。調査期間は、４月 25 日から６月 27 日までである。

なお、調査対象地のほぼ中央部が、圃場整備事業の排水工事により分断されていたため、その部分を境に西側を１(西) 区、東側を２(東) 区として調査を実施した。

２　岡山城中堀跡・外堀跡

岡山駅から柳川筋を通り城下筋を結ぶ県道（愛称「桃太郎通り」）は、周辺に岡山城天守や商業の中心地である表町筋などが控えているため大規模な駐車場の確保が急務であった。そこで岡山県土木部により城下交差点付近の路面下に地下駐車場及び地下広場の建設が計画された。その用地は、岡山城西の丸跡から西へ約 100m の位置である。城下絵図等の検討の結果、その部分には明治以降に埋め立てられた岡山城内堀跡及び中堀跡が想定でき、現地表下には遺構が存在していることが考えられた。しかしながらその位置は明確ではなく、かつこの付近の交通量は極めて多いことから発掘調査を実施することが困難であることが予想された。そこで、事業主体である県道路公社と協議を行いつつ文化課（当時）職員が工事に際して立会や試掘を実施し、記録保存の措置をとることとした。昭和 63 年８月から 10 月にかけて立会調査を実施し、地下駐車場出入口部において想定された中堀跡を確認した。さらに、立会調査の過程で、仮設路面の設営工事のための掘削面よりも下方に内堀西側の石垣が遺存していることが明らかとなり、その部分については平成元年２月に発掘調査を実施した。調査期間は、平成元年２月８日から 21 日までで、調査地点は城下交差点西側で、岡山市北区表町１丁目・天神町にあたる。なお、並行して行われた柳川筋における共同溝の掘削工事についても、外堀跡推定地に当たることから、文化課職員による立会調査を行っている。

３　津山城外堀跡

県土木部によって、津山城の北辺をほぼ東西に横切る形で都市計画道路（新錦橋押入線）が路線決定された。この路線計画線内は宅地化が進んでいたが、かつての津山城外堀推定ラインと重なること

から、その取り扱いについて県土木部と県教育委員会文化課との間で協議を重ねた。その結果、工事に先立って城の外堀及び土橋の想定される部分について、確認調査を実施することとした。期間は、平成元年 11 月 15・16 日である。調査は、鶴山公園から北側の市街地に降りる市道に隣接する地点に１か所（Ｔ１）、市道の東側に２か所（Ｔ２・３）のトレンチを設定して重機で掘り下げ、遺構の残存状況を確認する方法をとった。

平成２年度には、鶴山公園から北に下る市道部分のコンクリート舗装面・造成土を除去し、市道に直交して２か所（Ｔ１・３）、市道東の城側（南側）斜面に１か所（Ｔ２）のトレンチを設定した。土橋東側肩部の検出と土橋の横断面を確認すること、市道下に予想される北門の有無を確認することを目的に発掘調査を実施した。期間は、平成２年１月 23 日から１月 31 日にかけてである。

４　報告書の作成

報告書作成作業は令和４年度に行った。収載した３遺跡とも、発掘調査から30余年が経過しており、図面や写真の整理に時間を要した。遺物については、一部を調査終了後に実施していたものの、改めて全遺物の点検を行い、新たに約 100 点の実測を実施し、遺構・遺物のトレースを７月中に終えた。これと併行して遺物写真撮影と編集・文章執筆を行い、10 月末には概ね終了した。

第２節　発掘調査と報告書作成の体制

発掘調査

昭和 63 年度

岡山県教育委員会

教 育 長　竹内　康夫

岡山県教育庁

教育次長　石井　雄信・前　亮治

文化課

課　　長　吉尾　啓介
課長代理　河野　　衛
参　　事　浅野間朗雄
課長補佐（埋蔵文化財係長）
　　伊藤　　晃
主　　査　藤川　洋二
文化財保護主事　宇垣　匡雅

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　水田　　稔

〈総　務　課〉

課　　長　佐々木　清
総務主幹　藤本　信康
主　　任　花本　静夫・岡田　祥司

〈調査第一課〉

課　　長　河本　　清
課長補佐（第一係長）
　　井上　　弘
文化財保護主事　宇垣　匡雅
　　（岡山城中堀跡調査担当）

平成元年度

岡山県教育委員会

教 育 長　竹内　康夫

岡山県教育庁

教育次長　石井　雄信・竹本　博明

文化課

課　　長　吉尾　啓介
課長代理　河野　　衛
参　　事　浅野間朗雄
課長補佐（埋蔵文化財係長）
　　伊藤　　晃
主　　査　藤川　洋二
文化財保護主事　宇垣　匡雅

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　長瀬日出明
次長（調査第一課長事務取扱）
　　河本　　清

〈総　務　課〉

課　　長　竹原　成信

課長補佐（総務係長）
藤本　信康
主　　任　　岡田　祥司・平松　郁男
片山　淳司
〈調査第一課〉
課長補佐（第一係長）
柳瀬　昭彦
（津山城外堀跡調査担当）
文化財保護主任　内藤　善史
（矢知遺跡調査担当）
文化財保護主事　宇垣　匡雅
（岡山城内堀跡調査担当）

平成２年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　竹内　康夫

岡山県教育庁
教育次長　　竹本　博明・杉井　道夫

文化課
課　　長　　鬼澤　佳弘
課長代理　　光吉　勝彦
参　　事　　浅野間朗雄
課長補佐（埋蔵文化財係長）
伊藤　　晃
主　　査　　藤川　洋二
文化財保護主事　宇垣　匡雅

岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　長瀬日出明
次　　長（調査第一課長事務取扱）
河本　　清

〈総　務　課〉
課　　長　　竹原　成信
課長補佐（総務係長）
藤本　信康
主　　任　　平松　郁男・坂本　英幸

〈調査第一課〉
課長補佐（第一係長）
柳瀬　昭彦
（津山城外堀跡調査担当）
文化財保護主事
小松原基弘
（津山城外堀跡調査担当）

報告書作成

令和４年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　鍵本　芳明

岡山県教育庁
教育次長　　浮田信太郎

文化財課
課　　長　　江草　大作
副 課 長（文化財保存・活用担当）
尾上　元規
総括副参事（埋蔵文化財班長）
河合　　忍
副 参 事　　松尾　佳子
主　　事　　金田　　涼

岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　大橋　雅也
次　　長（総務課長事務取扱）
浅野　勝弘
参　　事（文化財保護担当）
柴田　英樹

〈総　務　課〉
総括副参事（総務班長）
福池　光修
主　　幹　　井上　裕子

〈調査第二課〉
課　　長　　弘田　和司（整理担当）

表１　文化財保護法に基づく提出書類一覧

遺跡発見の通知（第 57 条の６）

	岡山県文書 番号　日付	種類及び 名称	所在地	発見年月日	発見の事情	発見者	出土遺物	処理の内容・理由
1	教文埋第 5091 号 S64.1.5	矢知散布地	御津郡御津町矢知 1271 外	S63.12.1	土木工事中に発見	岡山県岡山地方振興局建部建設事務所長	土器	発掘調査

埋蔵文化財発掘の通知（57 条の２・３）

	岡山県文書 番号　日付	種類及び 名称	所在地	面積	目的	主体者	期間	措置
1	教文埋第 4751 号 S63.12.5	城館跡 岡山城関連遺跡	岡山市表町、中山下、天神町、丸の内、石関町	10,521	地下駐車場建設	岡山県道路公社理事長	S63.11.2 ～ 64.2.20	工事立会、重要な遺構が発見された場合は別途協議
2	教文埋第 5569 号 H1.2.7	城館跡 津山城	津山市山下 70-1、69-58、49-1 他	300	道路改良工事	岡山県津山地方振興局長	S 64.1.15 ～ 3.20	発掘調査
3	教文埋第 3490 号 H 1.9.13	城館跡 津山城	津山市北町 131 他	2,500	都市計画道路改良工事	岡山県津山地方振興局	日付不詳 ～ H2.3.31	発掘調査
4	教文埋第 6207 号 H2.3.23	城館跡 津山城外堀跡・北門跡	津山市北町 131 他	2,500	都市計画道路改良工事	岡山県津山地方振興局長	S64.6.10 ～日付不詳	発掘調査
5	教文埋第 421 号 H2.4.16	散布地 矢知遺跡	御津郡御津町矢知	2,000	県道建設工事	岡山地方振興局建部建設事務所長	H2.4.20 ～ 8.31	工事立会、重要な遺構が発見された場合は別途協議

埋蔵文化財発掘調査の通知（第 98 条の２）

	文書番号　日付	種類及び 名称	所在地	面積	原因	通知者	担当者	期間
1	教文埋第 515 号 H1.4.24	散布地 矢知遺跡	御津郡御津町矢知 1271 他	600	道路建設に伴う発掘調査	岡山県教育委員会 教育長　竹内康夫	内藤善史	H1.4.24 ～ 1.6.30
2	教文埋第 5825 号 H1.2.27	城館跡 岡山城内堀跡	岡山市表町・天神町	250	地下駐車場建設に伴う発掘調査	岡山県教育委員会 教育長　竹内康夫	井上弘・平井泰男・宇垣匡雅	H1.2.8 ～ 1.2.21
3	教文埋第 4173 号 H1.10.27	城館跡 津山城北門及び土橋跡	津山市山北	45	都市計画道路建設に伴う発掘調査	岡山県教育委員会 教育長　竹内康夫	柳瀬昭彦	H1.11.9 ～ 1.11.10
4	教文埋第 3681 号 H2.9.18	城館跡 津山城北門及び土橋跡	津山市山北	450	都市計画道路建設に伴う発掘調査	岡山県教育委員会 教育長　竹内康夫	柳瀬昭彦	H2.10.16 ～ 2.11.16

写真１　岡山城内堀跡作業風景

写真２　岡山城内堀跡石垣の検出

写真３　岡山城内堀跡石垣

写真４　「岡山城内堀石垣」の碑

第２章　矢知遺跡

第１節　遺跡を取り巻く環境

矢知遺跡は、御津郡御津町矢知（現在、岡山市北区御津矢知）に所在する。

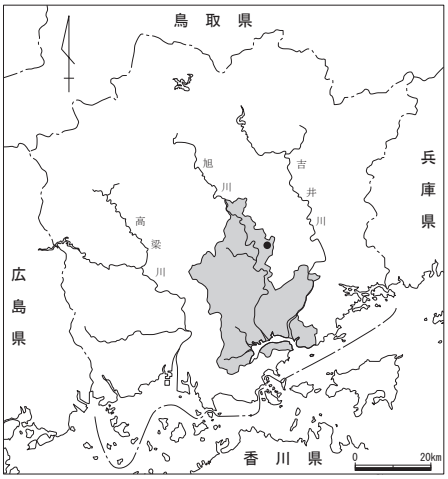
御津町は、吉備高原の南部に位置し、岡山県の中央を南北に流れる旭川の中流域を占める。町域の約八割は丘陵と山林で占めるが、町の中心である金川地区は、旭川に宇甘川と新庄川が合流して比較的広い平野になっている。

矢知遺跡は旭川の東岸に合流する新庄川の流域にあたり、新庄川の支流である矢知川が新庄川に合流する手前の南側山麓に位置する。この新庄川流域は、旭川右岸側の支流宇甘川流域に比べると遺跡数は格段に多い。矢知地区は、御津金川から赤磐郡吉井町（現在、赤磐市）仁堀と赤磐郡赤坂町（現在、赤磐市）多賀を結ぶ県道の分岐点となっているが、古くから旭川流域と吉井川流域を結ぶ交通路として利用されていた可能性が強い。また、新庄川は、建部町（現在、岡山市北区建部町）との境に端を発して緩やかに南流して旭川に合流するが、途中の平岡西・新庄・伊田はやや幅広の谷底平野をなし、可耕地が拡がっている。そして、その平野やそれに接する丘陵上には、遺跡・古墳・山城跡が数多く存在している。

新庄川流域の遺跡（第２図）を瞥見してみると、旧石器時代の遺跡は確認できていないものの、縄文時代草創期の有茎尖頭器が、鍛冶屋谷遺跡から出土しており、続く縄文時代早期の土器片も平岡西遺跡で出土している。後晩期においても、遺構は確認できないものの酒屋谷遺跡、寺部遺跡、鍛冶屋谷遺跡、伊田沖遺跡において土器の出土が知られる。

弥生時代の遺跡は、前期こそ確認できないものの、中期には酒屋谷遺跡、平岡西遺跡、新庄尾上遺跡、岩井山古墳群の下層などにおいて、竪穴住居などの遺構や遺物が確認されている。新庄尾上遺跡では、竪穴建物、掘立柱建物のほかに袋状土坑（貯蔵穴）が確認されている。中期後半の竪穴建物の埋土から出土した壺の破片には、人間にクチバシとトサカ状の装飾が描かれており、鳥に扮した人（司祭者）を表現しているとされる。同一個体と思われる別破片には高床建物（神殿）も描かれており、「祭り」の様子を描いた可能性が指摘されている。

後期には、本遺跡のほか、酒屋谷遺跡、上伊田遺跡、鍛冶屋谷遺跡、新庄尾上遺跡、平岡西遺跡、など遺跡数の増加が著しく、かつ注目すべき遺構･遺物が確認されている。平岡西遺跡では、竪穴住居とともに墓ないしは祭場と考えられる溝に囲われた方形区画が確認されている。その方形区画は一辺が削平を受けており、墳丘や埋葬施設は確認しえなかったものの、残存する辺長は約９ｍであった。



第１図　矢知遺跡の位置（1/2,000,000）

溝からは、スタンプ文や突帯で加飾された特殊な壺形土器や器台形土器、穿孔のみられる壺や高杯も出土している。

古墳時代の集落は、伊田沖遺跡で中期の竪穴住居が、平岡西遺跡において６世紀代の竪穴住居が検出されていものの、弥生時代後期と比べて遺跡数と出土遺物の量は激減といった状況である。本遺跡においては、遺構は確認できていないが、古墳時代前期・後期の遺物が確認できている。新庄川の氾濫といった自然的な要因による集落立地の変化が考えられよう。

古墳では、天神鼻古墳（全長 20.5 m）・八塚古墳（全長 33 m）の２基の小形前方後円墳を含む天神鼻古墳群、八塚古墳群や総数 22 基からなる岩井山古墳群、４基からなる殿谷古墳群などがある。岩井山古墳群は、円墳もみられるが方墳が主体で、内部施設は箱式石棺ないしは石蓋土坑が主である。それらの古墳は古墳時代前～中期に属するが、12 号墳や 13 号墳は横穴式石室を主体とする後～終末期古墳であった。12 号墳は大きく破損した横穴式石室が残存し、規模は残存石室長 2.5 m、同幅 0.9 mであり、土師質亀甲形陶棺１、須恵器数点、耳環が出土している。13 号墳からは、須恵質四注式家形陶棺や須恵器が出土したと伝わる。また、鍛冶屋谷遺跡では、円筒埴輪や形象埴輪片の出土が報告され、近隣に古墳が存在したことが推定されている。

古代では、平岡西遺跡において緑釉陶器、寺部遺跡では円面硯が出土しているほか、赤鉢遺跡では奈良時代の須恵器が出土している。遺構自体は不明確であるが、字「寺部」から寺の存在を想定することも可能であろう。新庄川上流部の赤磐市石上に所在する妙光寺は、奈良時代の建立とされ、江戸時代後期の建築とみられる本堂と山門が存在する。

中世においても本遺跡以外に、平岡西遺跡、寺部遺跡、上伊田遺跡、鍛冶屋遺跡、新庄尾上遺跡などにおいて、遺構・遺物が確認されており、それら集落を見下ろす丘陵部には、地頭城跡・矢知城跡西谷城跡などの山城跡が確認されている。集落は、これらの遺跡において掘立柱建物や土器類が出土するものの遺跡の全体像や性格については現在のところ不明な点が多い。

山城跡は、小規模で単郭ないし数段の郭を重ねたのみの場合が多く、城郭構造が不明瞭な城もある。その中において、殿谷城跡や矢知城跡は、１～２条の堀切で尾根を遮断する。これらの山城跡はいずれも、故事来歴は詳らかではない。一方、新庄川と宇甘川が旭川が合流する金川の地に所在する金川城は、戦国時代に備前西部を支配した松田氏の居城として知られる。標高 225 mの臥龍山山頂とそこから派生した尾根に曲輪を配した連郭式山城で、500 × 500 mにも及ぶその城域は備前でも最大級の広さである。永禄 11（1568）年７月、宇喜多勢に金川城を攻撃され松田氏は滅亡するものの、城はその後も宇喜多氏や池田氏によって整備・利用されたと考えられ、慶長 20（1615）年の一国一城令までは存続していたようである。

矢知遺跡のあたりは律令期には赤坂郡の内である。明治初年時点では、赤坂郡全域が備前岡山藩領であり、「旧高旧領取調帳」にによると矢知村であった。明治 11（1878）年、行政区画としての赤坂郡が発足し、矢知地区は明治 22（1889）年の町村制施行により周辺の村と併せて五城村となった。赤坂郡は明治 33（1900）年郡制の施行により南に接する磐梨郡と合併し、赤磐郡となった。その後、五城村は昭和 28(1953)年の合併によって、御津郡金川町ほかと合併して消滅し、御津郡御津町となり、さらに平成の合併によって岡山市北区に編入されて現在に至っている。

なお、旧御津町の遺跡とその出土品については、岡山市御津郷土歴史資料館において公開・展示されている。

1	矢知遺跡	9	伊田沖遺跡	a	宮内城跡	j	小屋谷城跡
2	赤鉢遺跡	10	酒屋谷遺跡	b	石上古城跡	k	八左城跡
3	平岡西遺跡	11	名称未定	c	中畑城跡	l	殿谷城跡
4	寺部遺跡	A	天神鼻古墳群	d	矢知城跡	m	西谷城跡
5	新庄尾上遺跡	B	八つ塚古墳群	e	地頭城跡	n	熊谷城跡
6	鍛冶屋谷遺跡	C	岩井山遺跡・岩井山古墳群	f	松撫城跡	o	寺山城跡
7	新庄原遺跡	D	殿谷古墳群	g	宇那山城跡	p	金川城跡
8	上伊田遺跡	E	一本松古墳群	h	木山城跡	q	土師方城跡
				i	金比羅城跡		

第２図　矢知遺跡周辺の遺跡（1/50,000）

第２節　調査概要

１　調査区の設定と基本層序

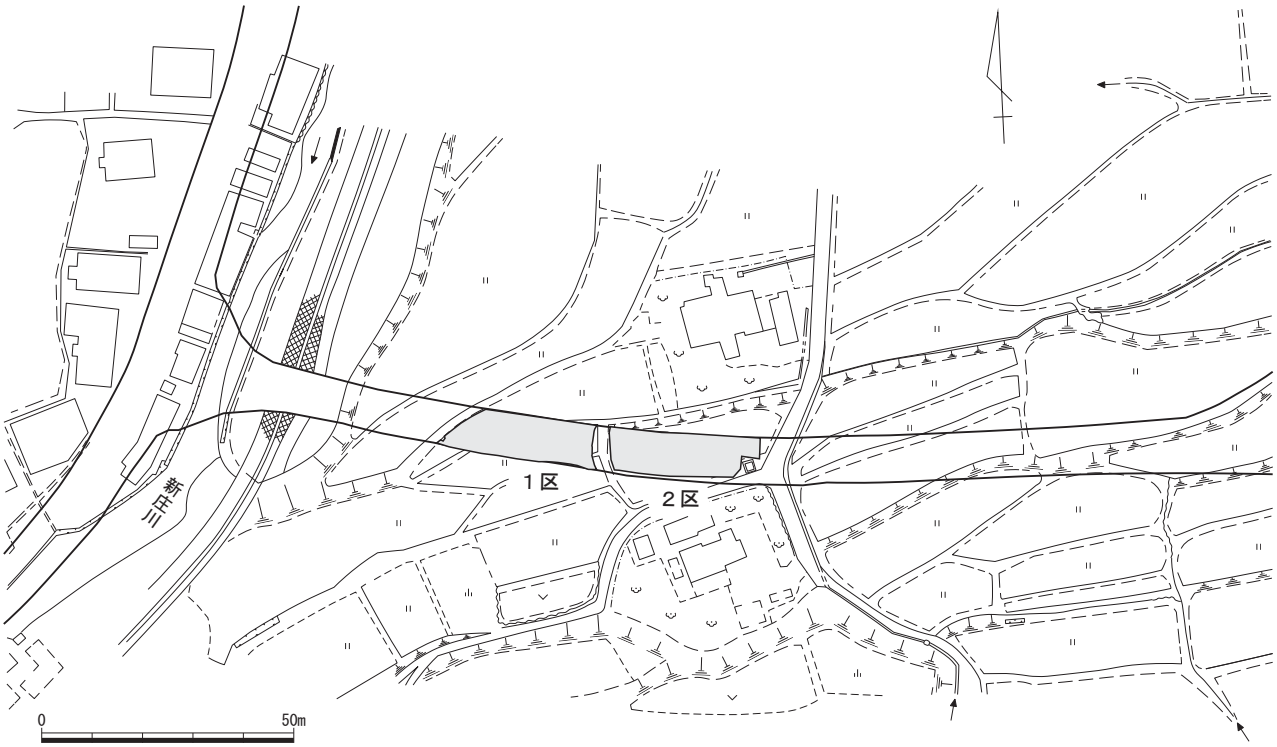
調査地は現況が水田域であった。御津町矢知地区では県道改良工事前に圃場整備が完了しており、調査対象地のほぼ中央部が圃場整備事業の排水工事により遺構面が掘削を受け分断されていたため、その部分を境に西側を１区（調査時は西区)、東側を２区（調査時は東区）として調査を実施した（第３図)。調査地の北側を矢知川は西流して新庄川へと流れ込み、地形は東(２区)から西(１区)に向かって緩やかに下がっている。また、遺跡は、斜面上方となる調査区の南側に拡がると推定できる。

１・２区中間の土層断面Ａ－Ｂ（第４図）では、４層が近世の遺物を含む。この層を切り込む４’層中からは煙管や木片が出土しており、近世の桶棺が存在したとみられる。９～11層は中世の土器を含む層でそれらを切って中世の柱穴や溝が掘られている。

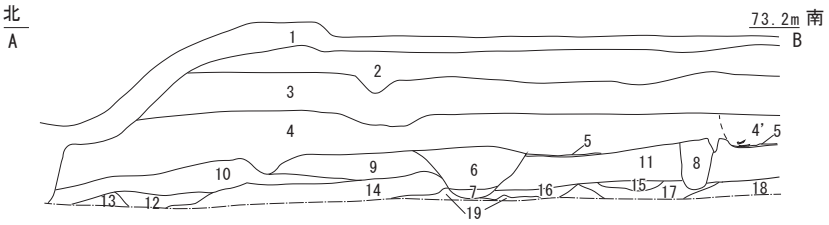
１区南壁（Ｃ－Ｄ断面）では、耕土・床土下に中世の包含層（３・４層）が存在し、それぞれの層から掘り込んだ柱穴がみられる。その下層では、間層を挟んで薄いながらも弥生時代後期の包含層(６層）が存在するものの、遺構は存在しなかった。さらに下層は黄褐色粗砂の基盤層となる。なお、中世の包含層中に古代や古墳時代の遺物が含まれるがその時期の遺構は確認できていない。

２区（Ｅ－Ｆ断面）は、水田造成によって中世包含層（３層）は薄く、東側は完全に削平されていた。３層を切って近世の河道（９層）があり、中世溝（８層）の上下で柱穴などの遺構を確認している。

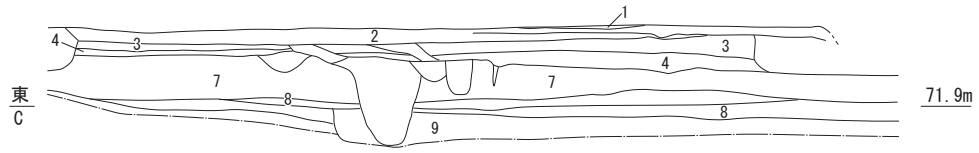
１区では、調査区の東半を中心として溝状遺構２条、土坑６基のほか柱穴90本程度を検出してい

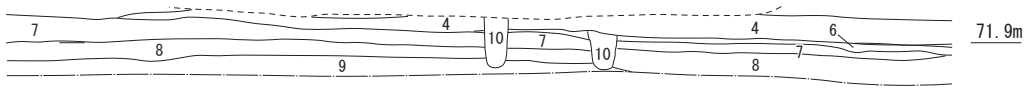


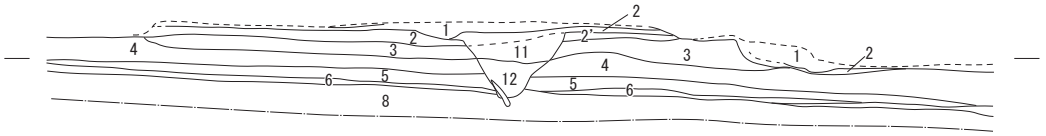
第３図　調査範囲（１/1,500）

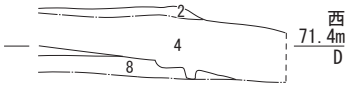


1　耕土
2　淡茶灰色粗砂混微砂
3　灰黄色粗砂混微砂
4　茶灰色粗砂混微砂
4’近世墓(煙管・木片)
5　青灰色粘質微砂
6　灰茶褐色粗混微砂
7　淡灰色微砂
8　灰茶色粗砂混微砂
9　灰茶色微砂
10　暗灰茶色微砂
11　灰黄色粗砂混粘質微砂
12　暗茶灰色粗砂混微砂
13　暗黄灰色粗砂
14　灰黄色粗砂混細砂
15　淡茶灰色粗砂
16　茶灰色粗砂混微砂
17　茶灰色粗砂
18　茶褐色粘質微砂(地山)
19　淡黄灰色微砂

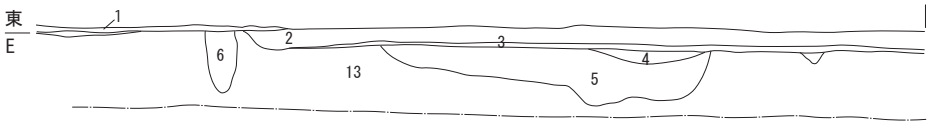


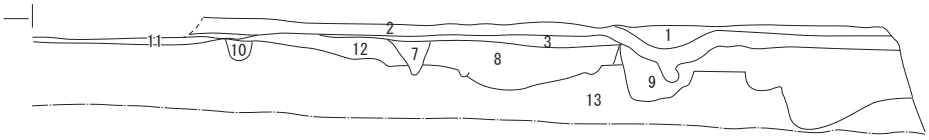






1　耕土
2　床土
2’黄灰色粗砂混微砂
3　淡灰粗砂混微砂(炭・土器含)
4　茶灰色粗砂混微砂(中世)
5　灰黄褐色粗砂混微砂
6　茶灰色粗砂混微砂(弥生)
7　黄褐色粗砂混微砂(地山)
8　鈍灰黄褐色微砂
9　黄褐色微砂
10　灰茶色粗砂混微砂
11　茶灰色微砂
12　灰茶色微砂





1　灰色土（耕作土）
2　黄灰色土（床土）
3　明茶褐色土
4　暗茶褐色土
5　混礫層
6　不明
7　不明
8　暗灰茶褐色土
9　不明
10　不明
11　不明
12　暗灰茶褐色粘質土
13　黄褐色粗砂

第４図　調査区土層断面(1/80)

るが、建物としてまとまるものは見つかっていない。北西部は遺構が希薄であった。時期は出土遺物などから中世を中心としたものである。２区では、調査区の東部は遺構面が高く、後世の開墾によりほとんど削平を受けている。また、西端部では南から北に向かって近世の河道状遺構の右岸肩部が認められたが、左岸肩部は壊された部分に当たり規模などは明らかでない。調査区の西部で 10 × 8 m の範囲に中世の柱穴約 250 本が集中し、掘立柱建物が複数存在したと考えられ、中世の溝２条とともに屋敷地を構成したと考えられる。排水溝を伴う竪穴遺構１基も存在する。

２　竪穴遺構

竪穴１（第５・６図）

調査区の南西部において検出した。平面形は１辺 215 × 210cm のほぼ正方形で、南西隅に幅 25㎝

第５図　遺構配置（1/200）

程の排水溝を伴う。竪穴住居状の遺構で、深さは 19 ～ 15㎝、床面の規模は 200 × 185㎝であるが、中央穴、壁帯溝、主柱穴は確認できず、かわって竪穴の４角と南北辺の壁に沿いのほぼ中央に直径９～６㎝、深さ 10㎝ほどの小ピット７本が存在した。竪穴の壁面に板材を立てて杭を打ち込んだとみられる。このうち南西角の２本は位置が近接しており、１回の立替えないしは補強があったとみられる。

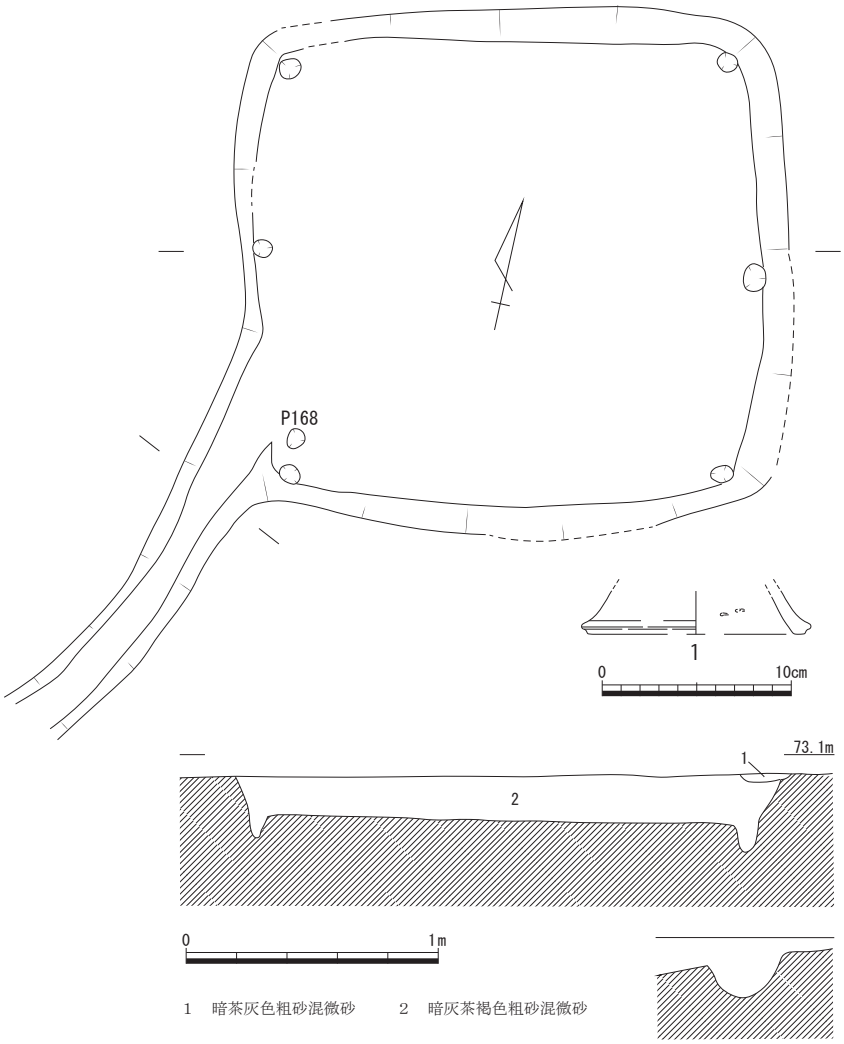
覆土、床面からは、図示しうる遺物は出土していない。Ｐ 168 から弥生土器高杯片１が１点出土しており、この遺構の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

３　掘立柱建物・柱穴

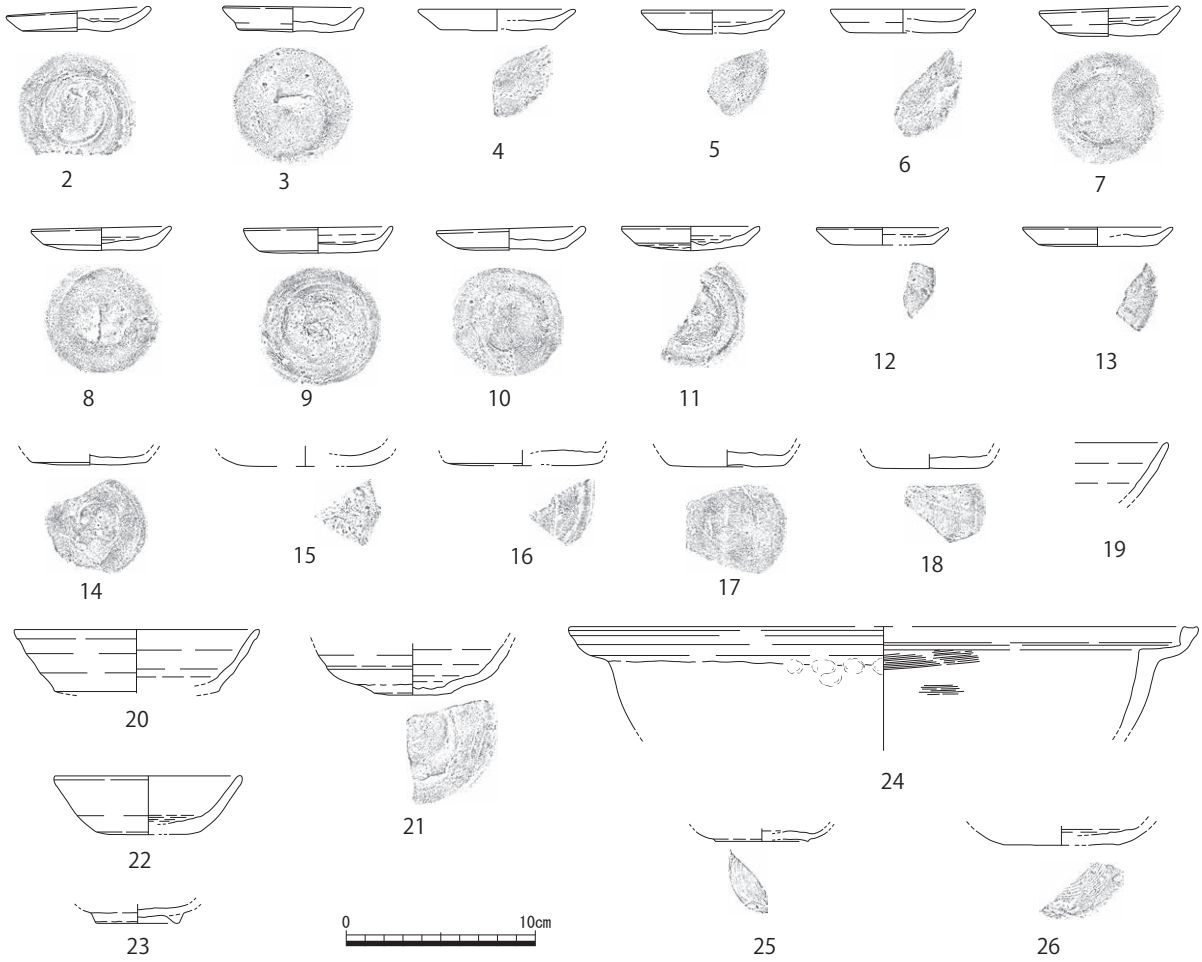
１区の柱穴からは、土師器皿２～ 14・杯 15 ～ 22、椀 23、瓦質土器鍋 24、須恵器椀皿 25・26（第７図）が出土した。Ｐ 27（第８図）は、直径が 51 × 45㎝で深さが 44㎝で、直径 15 × 10㎝の柱痕がみられた。柱穴の上部は柱の抜き取りにより椀状に窪み、そこから土師質土器皿７～ 11、瓦質土器鍋 24 が出土した。本来は、建物を構成する柱と思われ、柱抜き取り時に祭祀が行われたと考える。

掘立柱建物１・２（第５・９・10 図）

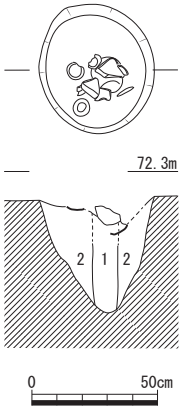
２区西半部で検出した。ともに掘立柱建物の構成する柱穴と思われるが、建物全体の復元には至ら



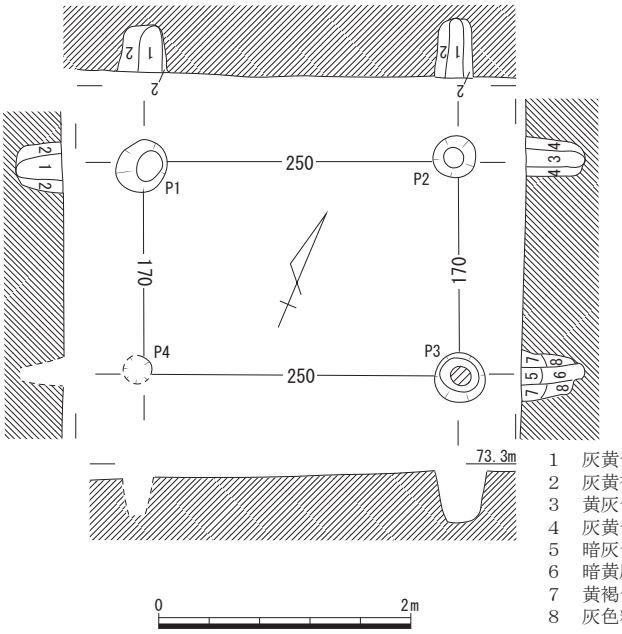
第６図　竪穴１(1/30)・出土遺物(1/4)



第７図　１区柱穴出土遺物 (1/4)



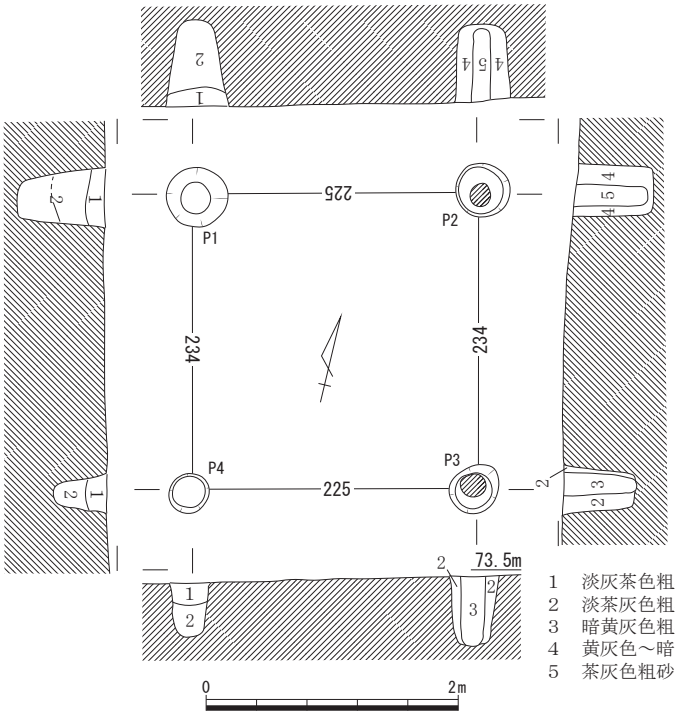
第８図　P27(1/30)



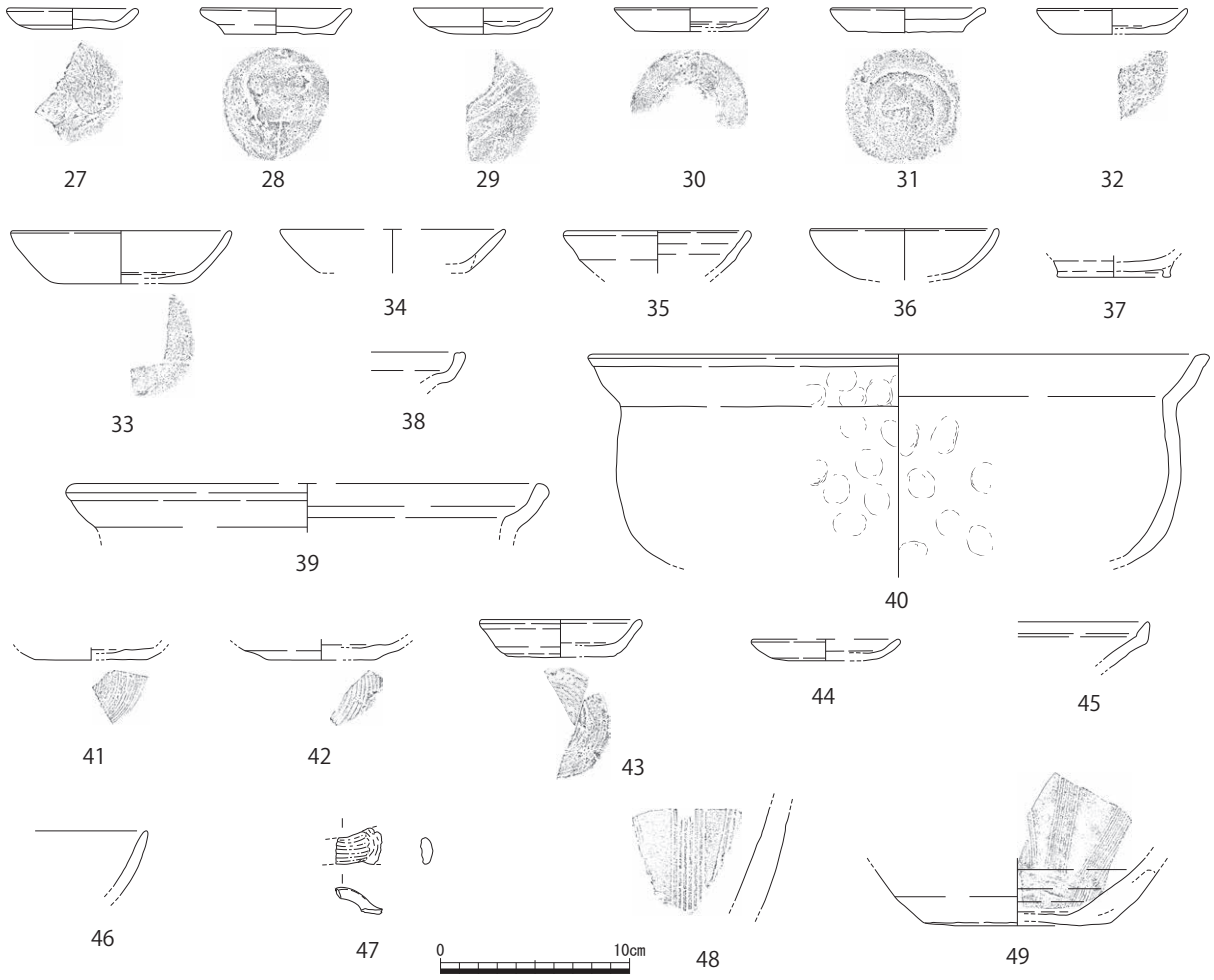
1　灰黄色粗砂
2　灰黄褐色粗砂混微砂
3　黄灰色粗砂混微砂
4　灰黄色粗砂混微砂
5　暗灰色粗砂混微砂
6　暗黄灰色粗砂
7　黄褐色粗砂混微砂
8　灰色粗砂混微砂

第９図　掘立柱建物１(1/60)

ず１×１間部分のみを図示した。建物１の各柱穴及び建物２のＰ２・３には、柱痕跡が明瞭に観察できる。建物１のＰ２からは土師器椀 35 が出土しており、中世前半期の建物で、建物１・２を含むその周辺に母屋が存在したと考えられる。２区のピット（第 11 図）からは、中世前半期に属する土師器皿 27 ～ 32・杯 33 ～ 35、椀 36・37、瓦質土器鍋 38 ～ 40、須恵器椀・皿 41 ～ 44、東播系須恵器捏鉢 45、瀬戸美濃椀 46・四耳壺耳片 47、須恵器擂鉢 48・49 が出土している。



第10図　掘立柱建物２（1/60）



第 11 図　２区柱穴出土遺物（1/4）

４　土坑

土坑１（第５・12図）

１区のほぼ中央で検出した。平面形はほぼ円形で長軸が70㎝、短軸は64㎝である。断面形は、椀状をなして深さは25㎝である。出土遺物はみられないが、周辺の遺構からみて中世の土坑と考える。

土坑２（第５・12図）

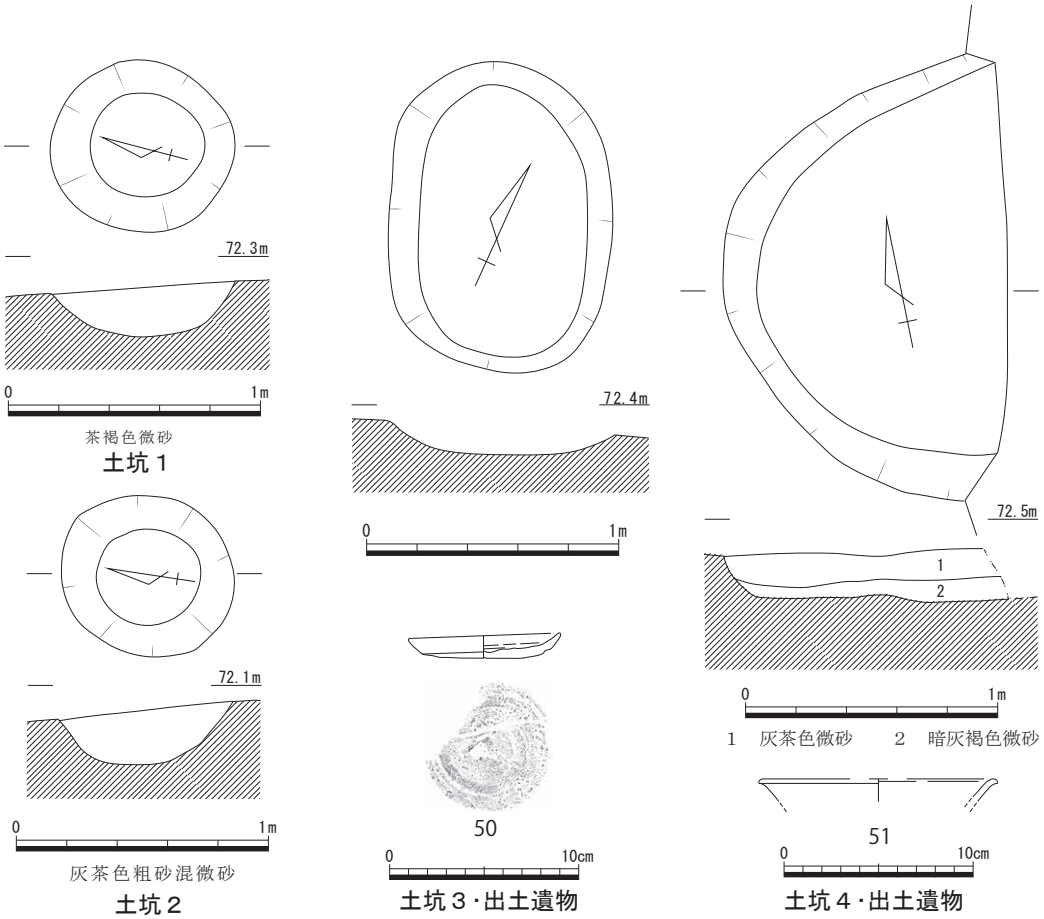
１区北東部で検出した。平面形がほぼ正円形で、断面形が椀状を呈する。規模は、長軸が70㎝、短軸は63㎝で、深さが22㎝である。出土遺物はみられないものの、周辺の遺構からみて中世の土坑と考える。

土坑３（第５・12図）

１区のほぼ中央で検出した。平面形が楕円形で、断面形が逆台形を呈し、底面はほぼ平坦となる。規模は長軸122㎝、短軸88㎝で、深さが12㎝である。土師器皿50が出土しており、中世の土坑と考えている。

土坑４（第５・12図）

１区の東端で検出した円形ないしは隅丸方形の土坑で、東側は調査区外となる。規模は、南北方向が177㎝、東西方向では残存長が113㎝で、深さが20㎝である。後述する溝１を切り、内部からは、白磁口禿げ皿51が出土した。中世の土坑と考えられる。



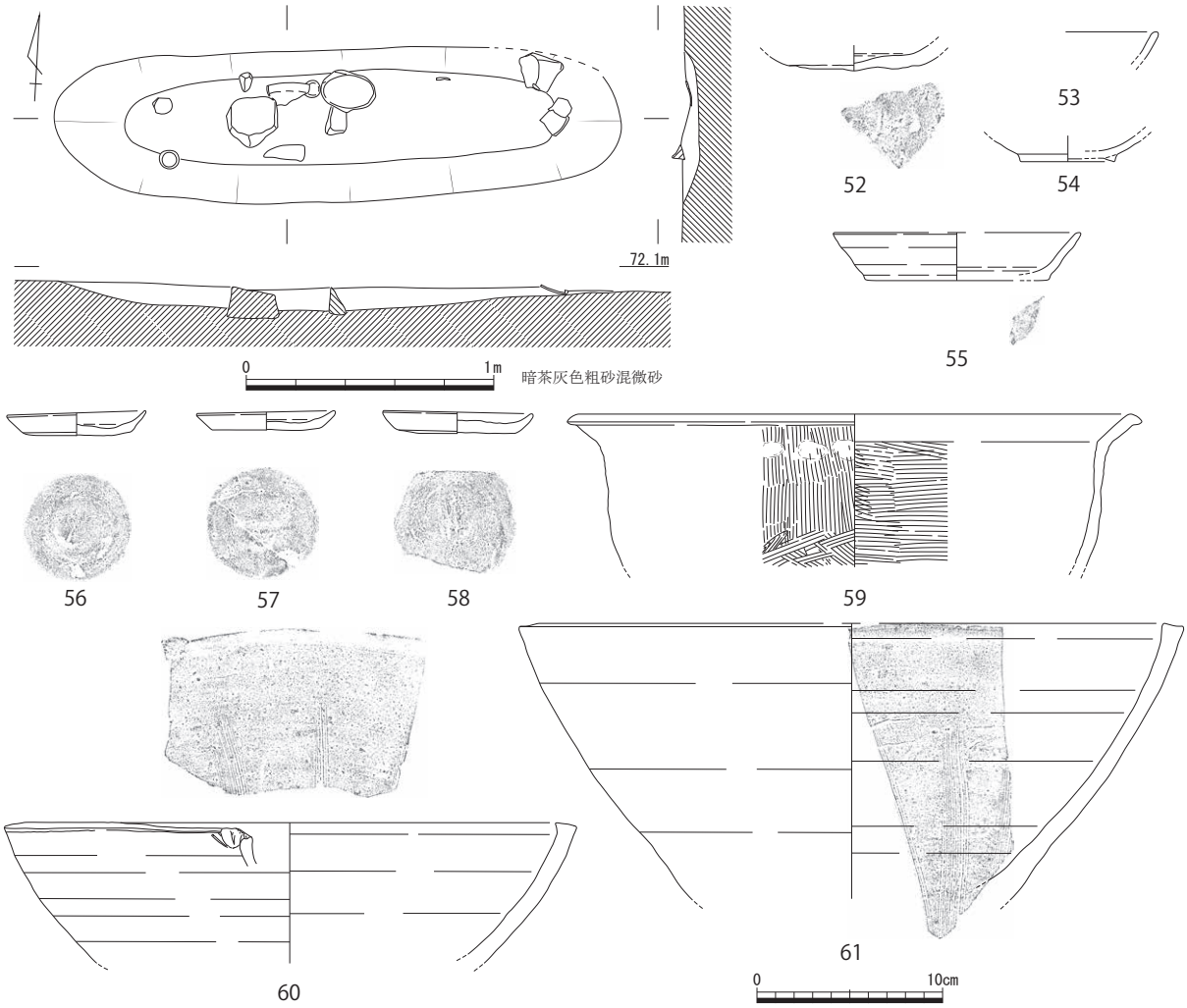
第12図　土坑１～４(1/30)、土坑３・４出土遺物(1/4)

土坑５（第５・13図）

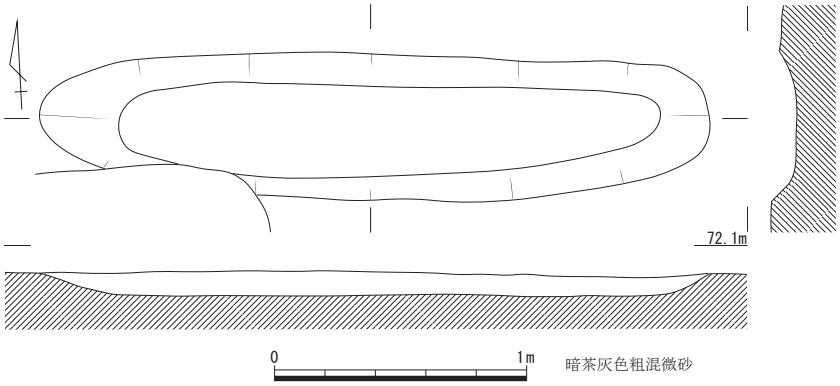
１区北東部で検出した土坑である。平面形が長円形を呈し、底面はほぼ平坦な面となる。規模は、検出面で長軸228㎝、短軸61㎝、深さは13㎝で、底面は直軸180㎝、短軸40㎝である。須恵器60～61、土師器56～58から、中世前半期の土坑と考える。土師器52～55もこの土坑出土と思われる。

土坑６（第５・14図）

１区北東部で検出した土坑で土坑５に切られる。規模は、長軸265㎝、短軸58㎝で、深さは10㎝



第13図　土坑５(1/30)・出土遺物(1/4)



第14図　土坑６(1/30)

である。出土遺物はないが規模、形態が土坑５に近く、時期は中世と考える。

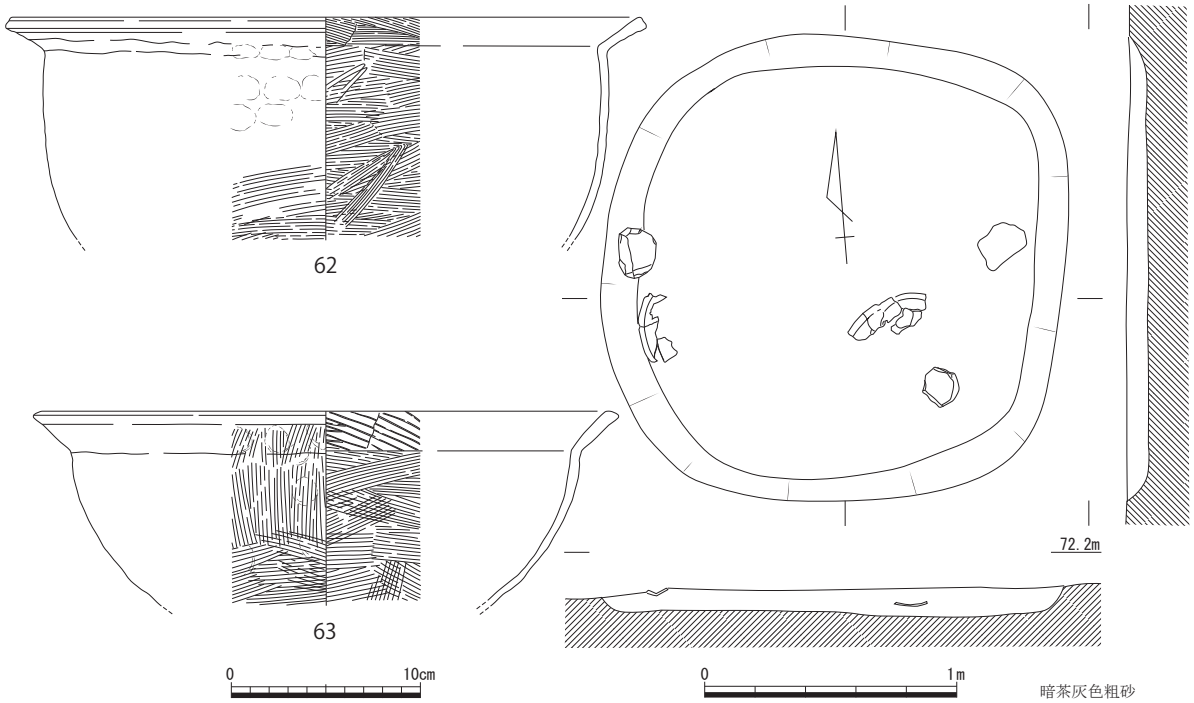
土坑７（第５・15図）

１区の北西端で検出した、平面形が隅丸方形の土坑である。規模は、平面が184 × 182㎝、深さが10㎝である。底面は平坦であるが、焼土面や柱穴などは存在しない。底面よりやや上で土師質土器鍋62・63が出土している。土坑の時期は中世前半期と考えている。

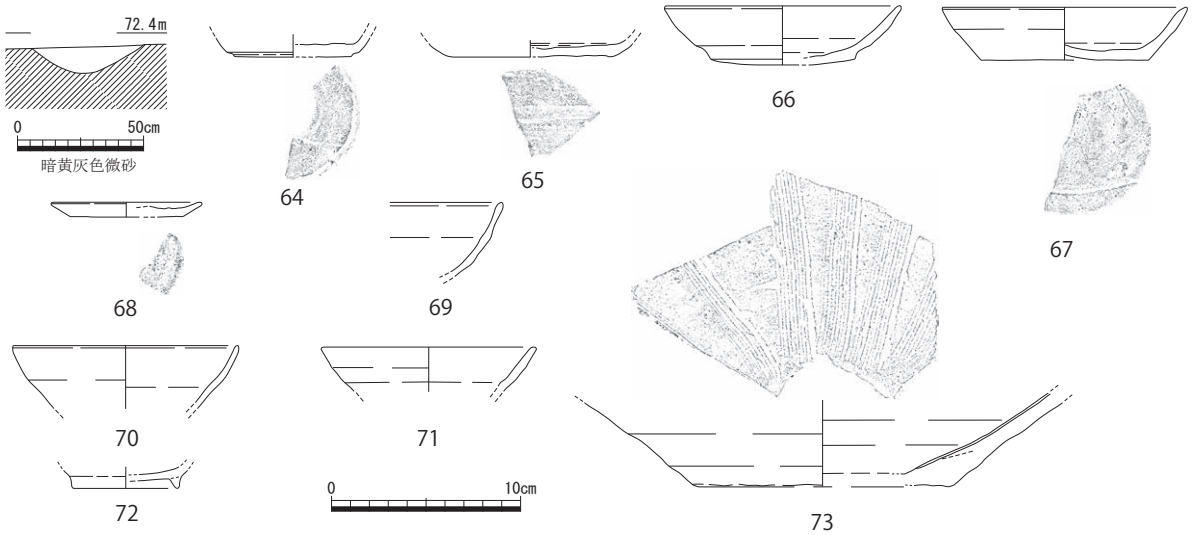
5　溝

溝１（第５・16図）

１区東南部で東西方向に８ｍにわたって検出した溝で、土坑７に切られている。中間部での幅は、



第15図　土坑７(1/30)・出土遺物(1/4)

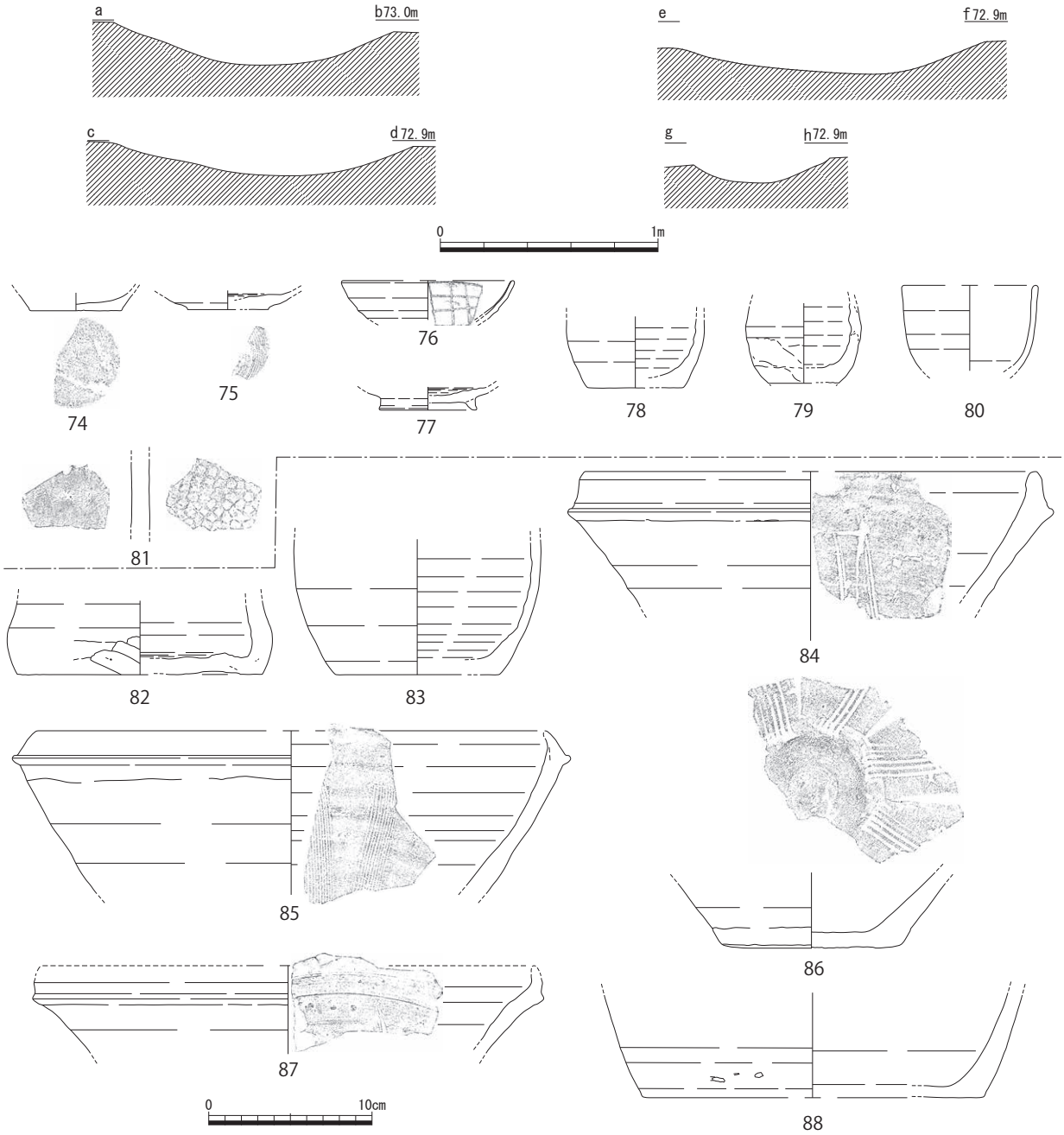


第16図　溝１(1/30)・出土遺物(1/4)

43㎝、深さが11㎝である。土師器皿 64 ～ 67・椀 69 ～ 72、須恵器擂鉢 73 が出土しており、溝の時期は 13 世紀後半頃と考える。

溝２（第５・17 図）

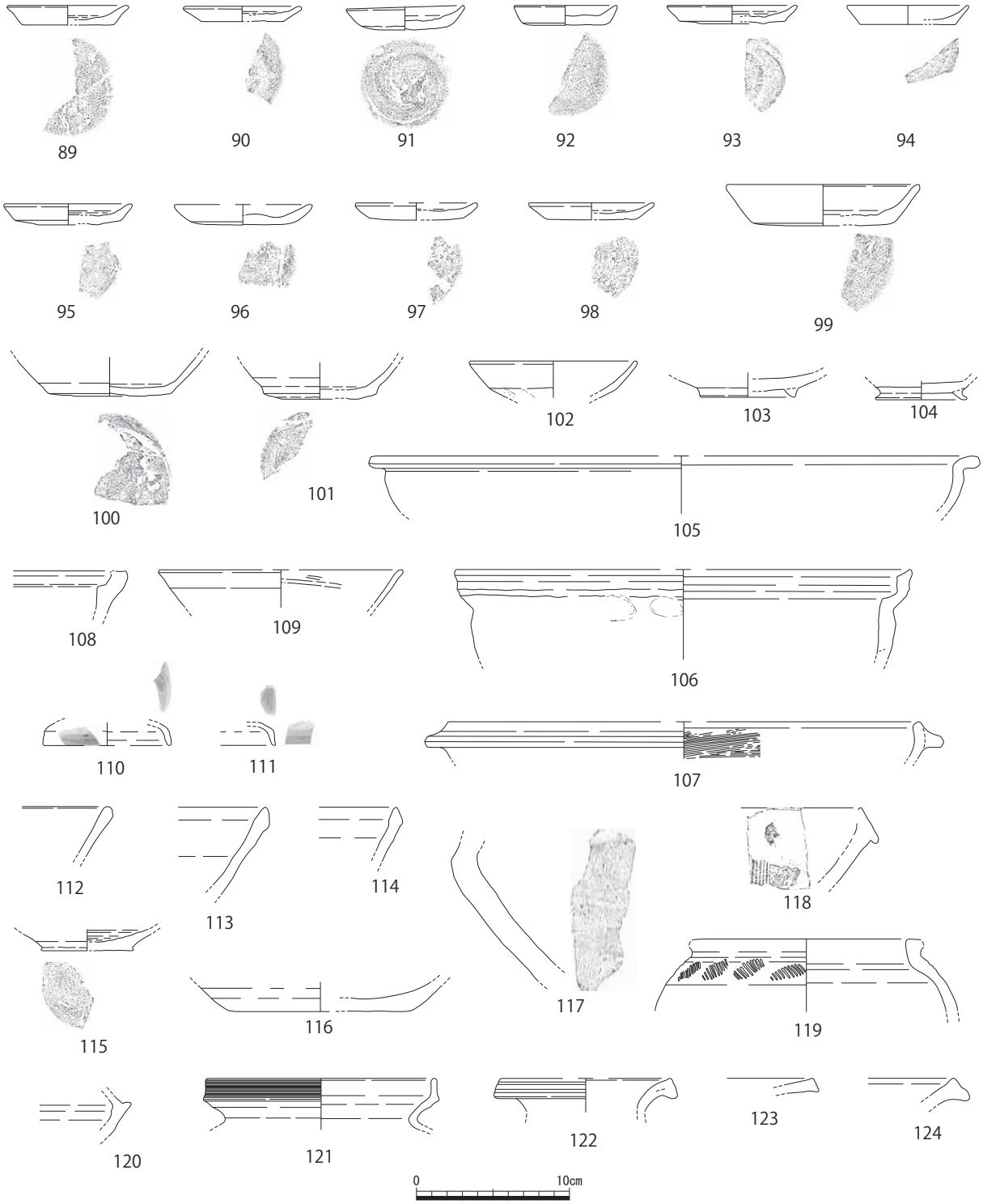
２区の西端近くで検出した。鍵形に折れ曲がる溝である。南北方向に直線的に延びる溝は検出面、溝底とも北に向かって低くなる。規模は、検出面での幅が 140 ～ 130㎝で、断面は皿状をなして浅く、深さは 18 ～ 12㎝程である。東西方向での規模は、幅 68 ～ 63㎝、断面は浅い皿状を呈し、深さが 11㎝である。南北溝より５㎝ほど浅い。この溝の北側は柱穴がほとんど存在しないことから屋敷地を区画する溝の可能性を考えたい。調査時点で 74 ～ 81 は西端溝、82 ～ 86 は近世溝として取り上げている。ともに溝２出土か、どちらかが溝２西側の旧河道から出土した可能性がある。



第17図　溝２(1/30)・出土遺物(1/4)

6　包含層他の遺物（第 18 ～ 21 図）

１区では、中世の包含層（上・下層）、弥生時代の包含層、２区では中世の包含層が存在し、そこから弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、中世の土師器、須恵器、瀬戸美濃、備前焼、近世の備前焼、肥前陶磁などが出土した。２区においては中世後半期から近世の遺物が顕著であるものの、１区は上



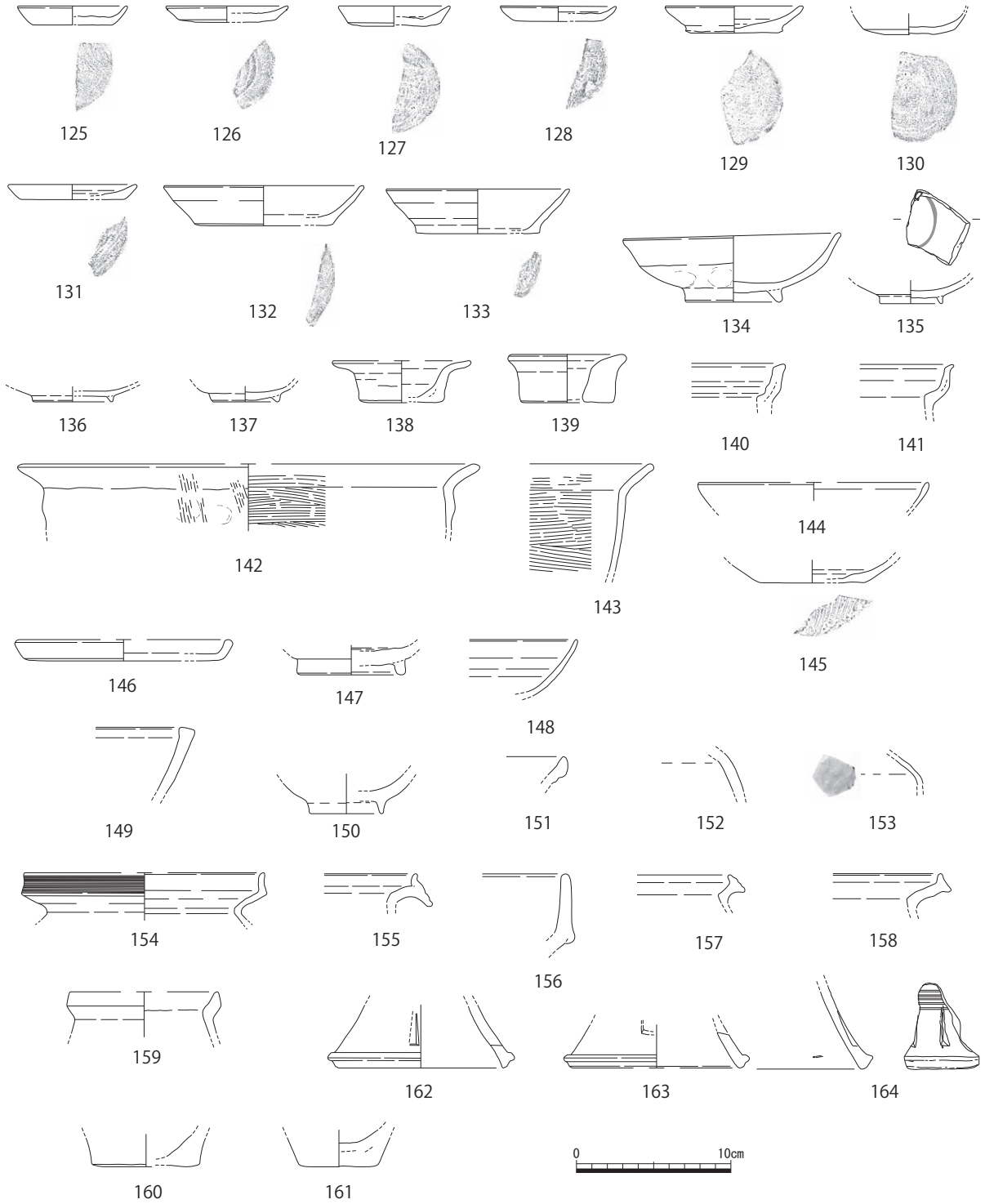
第 18 図　１区包含層上層出土遺物 (1/4)

下層の遺物は時期的に混在し、時期的に分離・検討することが不可能であるため、遺物の時代・種別ごとに記述する。

弥生時代の遺物には、弥生土器壺 122・155・156、甕 123・124、157 ～ 159、高杯 162 ～ 164、底部片 160・161、石鏃Ｓ１がある。これらの時期は、中期後葉から後期前葉が中心である。

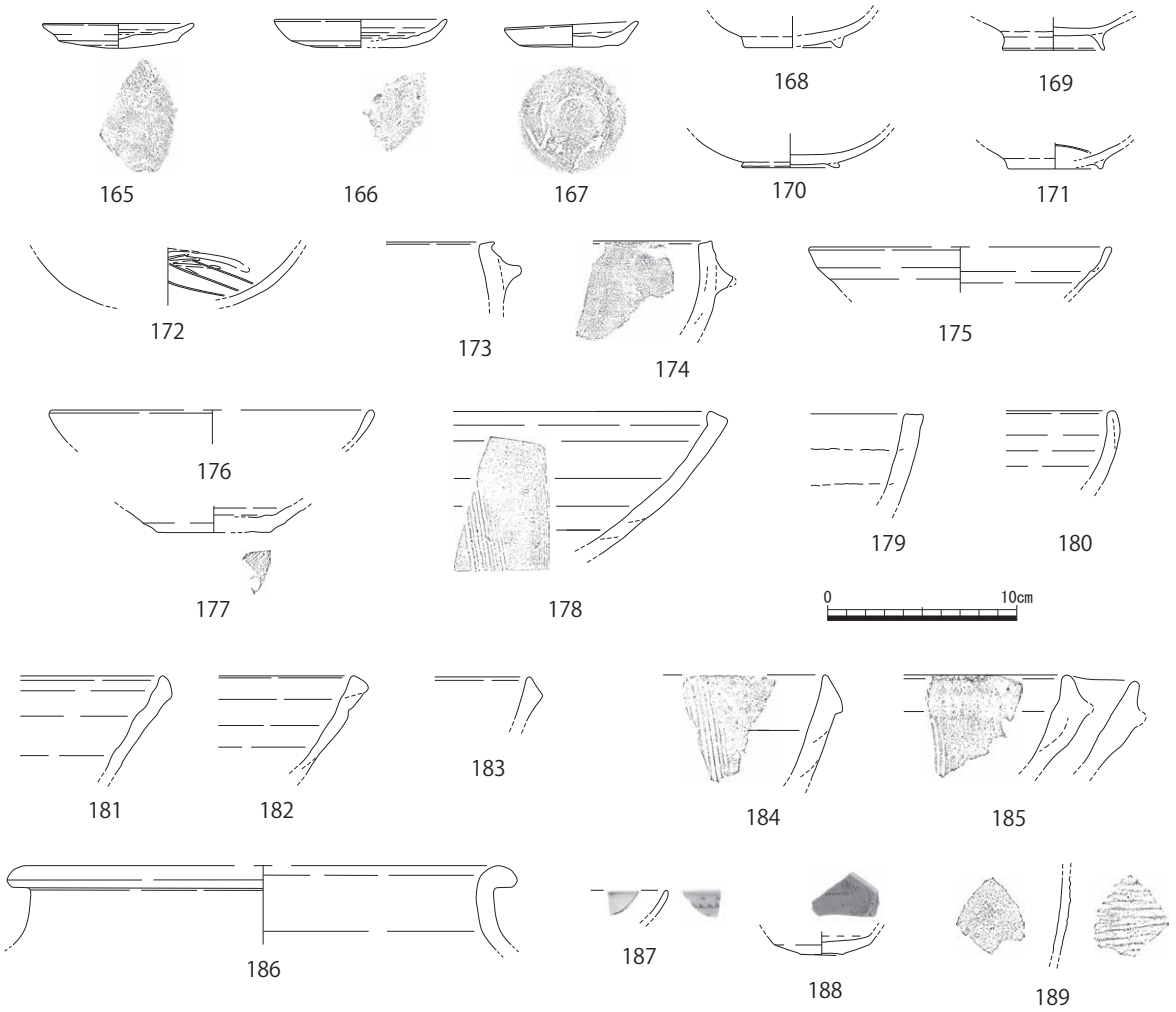
古墳時代の遺物には、古式土師器甕 121・154、６世紀代の須恵器杯身 120、製塩土器 189 がある。

古代の遺物には、須恵器皿 146、杯 147 がある。

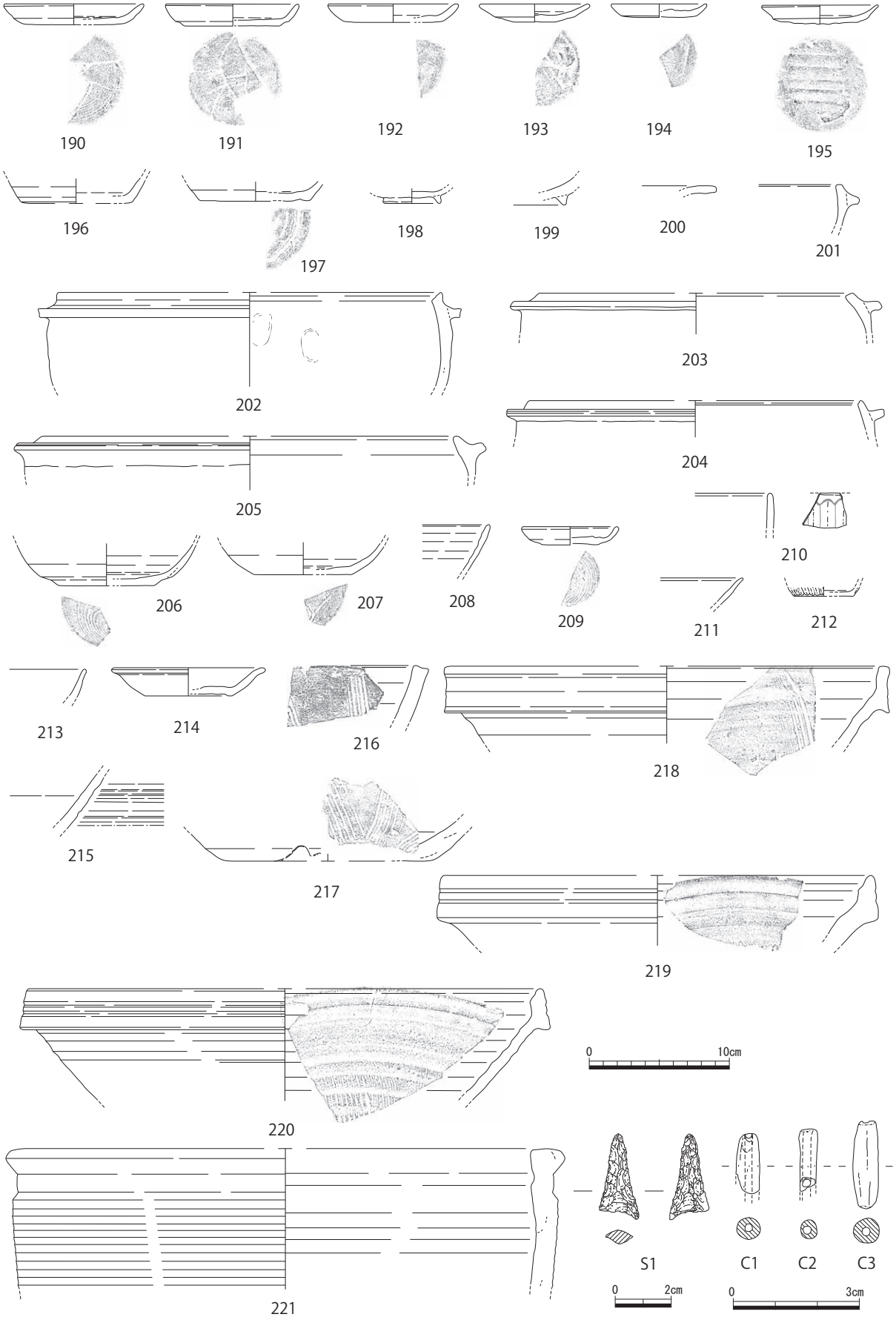


第 19 図　１区包含層下層出土遺物 (1/4)

中世土師器には、鍋 142・143・200、焙烙 105、杯 100・101・196・197、皿 89 ～ 99・125 ～ 133・165 ～ 167・190 ～ 195、高台付椀 102 ～ 104・134 ～ 137・168 ～ 170・198・199、托 138・139 がある。皿類の底部外面はいずれもヘラキリ調整である。中世須恵器では、東播系捏鉢 112 ～ 114・181 ～ 183 のほか、椀 115・144・145・148・175 ～ 177・206 ～ 208、鉢 149・178 ～ 180、皿 209 がある。擂鉢 178 は、土坑５出土の 60・61、溝１出土 73 に類似し、色調が青灰色、胎土に白色粒を多く含む。備前焼には、甕 117・186、擂鉢 184・218 ～ 220、水屋甕 221 がある。このうち 220 は、塗土を施し、火襷がみられる。備前焼に類する一群 118・178・185・216・217 を備前焼系とするが、いずれも擂鉢である。瓦器碗 109・171・172 は、いずれも細片で径や傾きがやや不正確と思われるが、13 世紀代の和泉型と考えられる。瓦質土器には、鍋 106・108・140・141、羽釜 106・173・174・201 ～ 205 がある。貿易陶磁器では、青磁碗 150・210、青磁皿 188、青白磁合子 110・111・212、白磁碗 151・白磁皿 211、青花碗 187 がある。これら以外にも、図示し得なかった小片の青磁、青花がある。瀬戸美濃には、袋物と思われる 152、椀 213、端反皿 214、鉢 215 がある。214 は大窯前半期と考える。瀬戸美濃は、柱穴出土の 46・47 を含め一定量の出土がみられた。119 は、産地不明の焼締陶器壺である。これ以外にも中世の遺物として、土錘Ｃ１～３がある。包含層の土器からみて、鎌倉時代から江戸時代初めにかけての間、屋敷地が継続していたことがみてとれる。



第 20 図　１区包含層他出土遺物 (1/4)



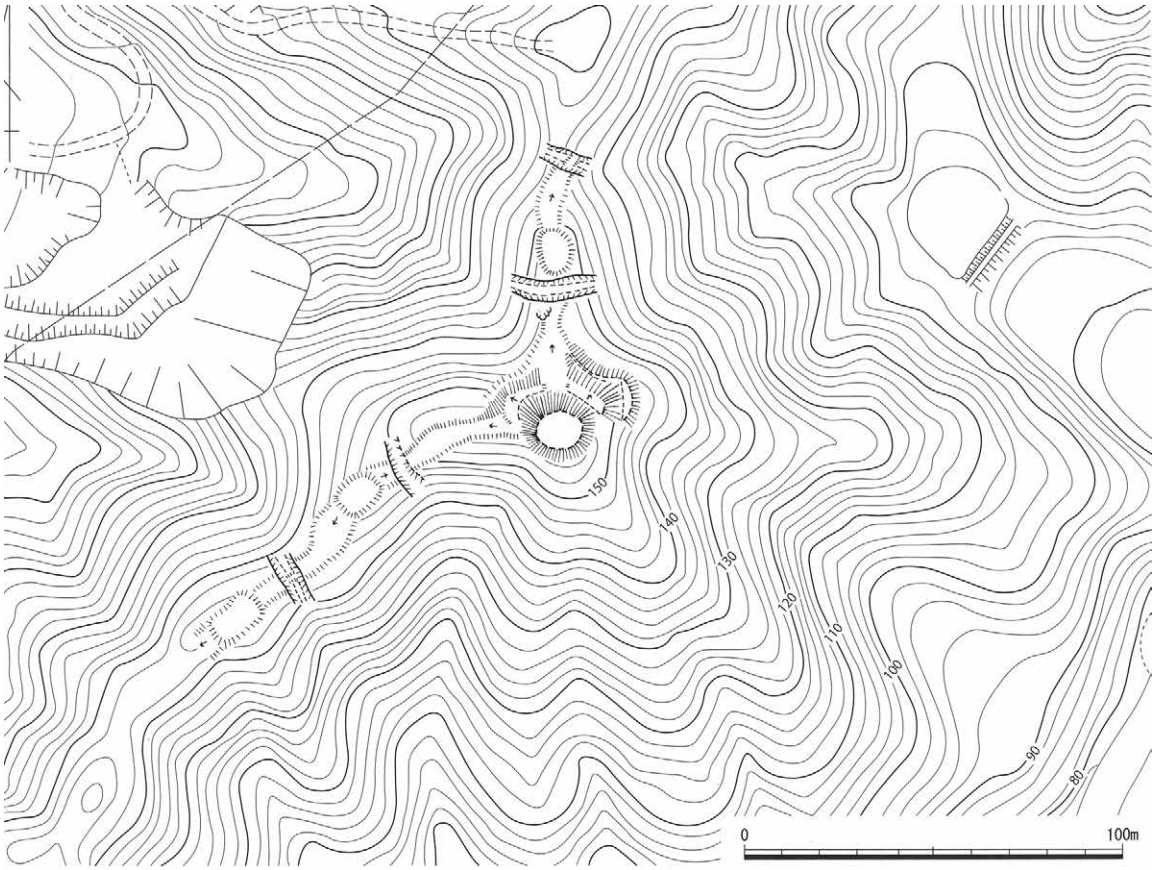
第 21 図　２区包含層出土遺物 (1/4)

第３節　小結

本遺跡は、弥生時代中期後葉～近世初頭にかけての集落遺跡である。弥生時代中～後期、古墳時代前・後期、古代、中世、近世初頭までの遺物が出土したが、その中心は鎌倉時代（13 世紀後半）から江戸時代初頭（17 世紀前半）にある。在地産と思われる土師器に加え、備前焼、勝間田焼、東播系須恵器といった近隣の窯業生産地の炻器・須恵器に加え、細片とはいえ青磁、白磁、青白磁合子や青花、瀬戸美濃産四耳壺の出土があり、屋敷地が富裕農民もしくは在地小領主層の居宅であった可能性がある。

時期が判明した遺構として、弥生時代の竪穴１基がある以外は、中世から近世にかけての土坑、溝が中心である。約 350 本ある柱穴も、一部に弥生～古代に含まれる可能性があるものも存在するが、大半は中世～近世初頭とみられる。柱穴は２区の西部で、２区北西で鍵形に折れ曲がる溝２に囲われた南北約８m、東西約 10 mの範囲に集中するが、屋敷地はまだ調査区の南に続く可能性がある。建物の復元は十分ではなかったが、母屋が想定でき、柱穴とその周辺における遺物の検討から、鎌倉時代中期から江戸時代前期にかけて数回の建て替えが行われたとみる。

矢知遺跡の位置は、旧御津町金川から矢知を通り旧赤坂郡の仁堀や軽部に至る往還の分岐点にあたる。矢知遺跡の主はその分岐点に館をかまえ、遺跡から 400 m北の丘陵上に矢知城を築いて自らの領域の防御をなしたと思われるのである。



第 22 図　矢知城跡縄張図（1/3,000）　岡山県教育委員会『岡山県中世城館跡総合調査報告書第１冊－備前編－』2020 より

第３章　岡山城内堀跡ほか

第１節　遺跡を取り巻く環境

１　岡山城跡の位置

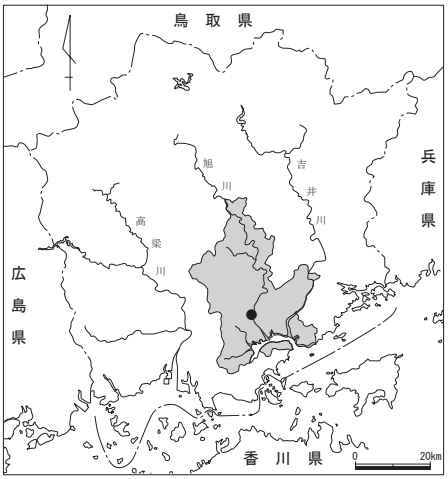
岡山城跡が所在する岡山市は、岡山県の県庁所在地であり、総人口約 71.8 万人（令和４（2022）年４月現在）を数える政令指定都市でもある。市域は岡山県南部のほぼ中央を占め、南は瀬戸内海に面した温暖な気候であり桃やブドウといったフルーツの栽培で全国的に知られるとともに、山陰や四国を結ぶ結節点として物流や交通に果たす役割は大きい。

市のほぼ中心を流れる岡山三大河川の一つである旭川は古くは幾重にも分流し、その沖積作用によって肥沃な平野を形成してきた。その中には縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が数多く存在しており、津島遺跡や百間川の遺跡群は全国的にも著名である。岡山城は旭川を天然の堀として利用し、「天神山」、「石山」、「岡山」と呼ばれる小丘陵を城域に取り込んだ平城である。

現在の岡山城跡は、本丸を囲う内堀内が昭和 62（1987）年に国の史跡に指定されており、復元天守を中心とした本丸部分は、旭川を隔てその東に接する後楽園とともに岡山県の重要な観光スポットとなっている。 一方、本丸の外側は西手櫓、櫓門や曲輪の石垣が一部に残るものの、広大な城域の大半は完全に市街地化されて街路にその名残を残すのみとなっている。

２　岡山城史

岡山城が歴史上に登場するのは、金光氏が城主としてみえる室町時代後期以降からである。戦国時代後期、備前国西部に覇権を確立しつつあった宇喜多直家は、岡山城主金光宗高を謀略によって滅ぼし、城を奪い取った。そして直家は城地の拡張を行い、天正元（1573）年には岡山城に入城する。直家期の岡山城は「石山」に本丸をおき、曲輪群と城下町の整備、社寺の移転や山陽道ほか主要道の城下への取り込みを進めた。土居、堀、櫓、塀は存在したが、天守、石垣は無かった。天正 10（1582）年に直家が没すると、次男の秀家が跡目を継いだ。秀家は備中高松城の合戦、豊臣秀吉の天下統一事業に従い、播磨国の一部・備前・美作・備中半国からなる 57 万石の所領を認められた。天正 19（1591）年、秀家は岡山城の本格的な城郭建築に乗り出し、慶長２（1597）年には天守が完成した。その城郭整備は、先に述べた標高十数メートル程の３つの小丘陵を城域に取り込み、そのうちの一つ「岡山」に本丸を築



第 23 図　岡山城跡の位置（1/2,000,000）

いた。また、旭川を城地北側に付け替えて天然の堀にするとともに旭川の西分流を内堀として整備し、さらに中堀を掘削して上の町・中の町・下の町を郭内に取り込んだといわれる。

慶長５（1600）年、関ヶ原の戦いにおいて宇喜多氏は敗北し、所領は没収された。換わって入封した小早川秀秋は、外堀（二十日堀）を掘削するなど城域の拡大・整備をはかったが、わずか２年で没し、小早川家は無嗣断絶となった。その後、姫路城主池田輝政の次男忠継が備前一国を知行したものの、幼少であったため異母兄の利隆が監国として岡山城に入った。忠継は慶長 19（1614）年に岡山城に入ったが、翌年、17 歳で病没した。跡を継いだ弟の忠雄は、本丸中の段の拡張、月見櫓や小納戸櫓の普請を行うと同時に、西川を掘削して城下町を整備した。忠雄時代に制作され最古の岡山城下図である『岡山古図』（池田家文庫）は、後の時期の絵図と重なる部分が多く、城下町もこの時点でほぼ完成されたようである。寛永９（1632）年に忠雄が江戸藩邸で死去すると嗣子の光仲が幼少であることを理由に、因幡・伯耆へ国替えとなり、変わって鳥取城主池田光政が岡山城に入った。

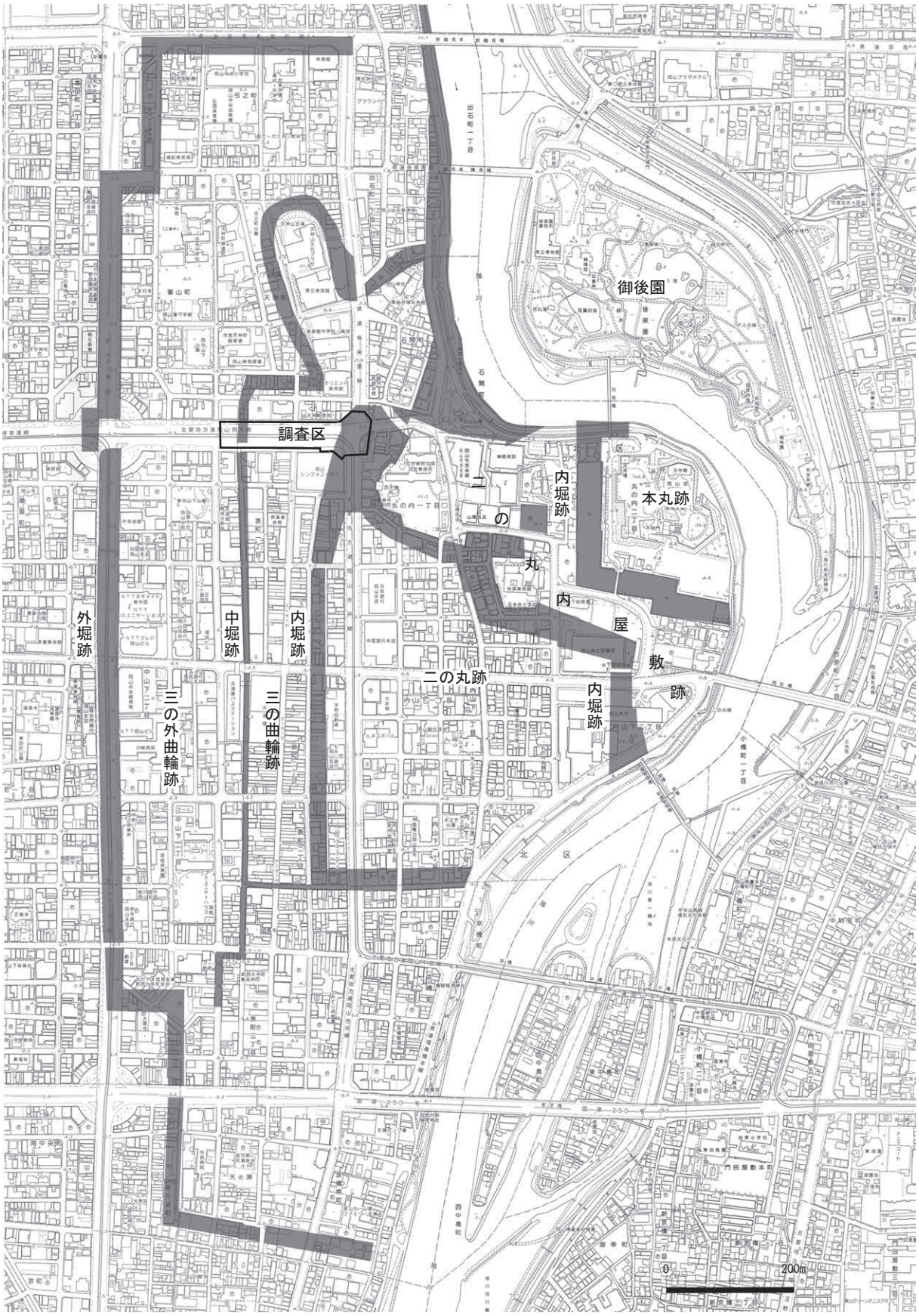
光政以降は、綱政の代に御後園（後楽園）を築く。御後園は、藩主が賓客をもてなした建物・延養亭を中心とした池泉回遊式の庭園であるが、城の防御が弱い本丸北東箇所を補う隠し曲輪的な意味を持っていたともいわれる。それ以外に岡山城では縄張りの改造や櫓の新設は基本的に行われず、明治維新を迎えている。明治２（1869）年、藩主であった池田章政は版籍奉還を行い、本丸・二の丸跡は兵部省（後の陸軍省）の所管となった。明治８（1875）年５月、城郭建築物の破却に先駆けていち早く埋め立てが行われ、内堀は細い溝となった。以降、明治 15（1882）年までには天守、月見櫓、西の丸西手櫓、石山門などの一部を除いて建物が破却された。内堀も本丸内堀を除き、明治 42（1909）年から大正４（1915）年までに順次埋め立てられて市街地化されていった。

昭和 20（1945）年６月の岡山大空襲によって天守と石山門が焼失すると、城郭建築は月見櫓と西の丸西手櫓を残すのみとなったが、戦後、本丸周辺は都市公園として本格的な整備がなされ、昭和 41（1966）年には天守を含むいくつかの建物が復元された。さらに、天守閣は令和３（2021）年６月より耐震補強も含めた「令和の大改修」が実施された。

３　城郭構造と調査位置（第 24 図）

「岡山」に立地する本丸は、旭川と内堀に囲われ、本段・中段・下段の三つの段からなる。本段には天守閣と御殿、中段にも御殿が置かれ、天守は四重六階の複合式望楼であった。内堀は本丸の外側を二重に廻り、そのうちに二の丸内郭（東南の郭）、「石山」付近に二の丸内郭（西の郭）、西の丸や二の丸（外郭）を配した。この二つの内堀の内側には、藩主の隠居屋敷や家老、石高の高い重臣の屋敷が置かれていた。本丸・二の丸には、天守・塩蔵を除き 34 の櫓が存在していた。これら内堀の外側に中堀を廻らせ、その内側に三の曲輪を置く。さらにその外側を外堀で囲い、その内に三の曲輪、その西側に三の外曲輪を配置する。三の曲輪は、ほとんど町人地で、領国経済の中心たる役割を担っていた。その外側にあたる三の外曲輪は武家地である。武家地は時期を下るにつれ番町界隈などその外部にまで拡がっていった。外堀には、伊勢宮口門・山崎町口門・大雲寺門・紺屋町門の五つが設けられ、津山往来・西国街道（山陽道）・鴨方往来・庭瀬往来が領内外各地へと通じていた。

外堀と旭川によって画される岡山城の城域は、南北 1.8㎞、東西 1.0㎞（ともに最大長）に及ぶ。さらに、外堀外にまで拡がった武家地を含んだ規模は、南北長が約 3.5㎞、西川と旭川の間は東西最大長約 1.3㎞に及んだ。



第 24 図　岡山城跡と調査位置（1/9,000）

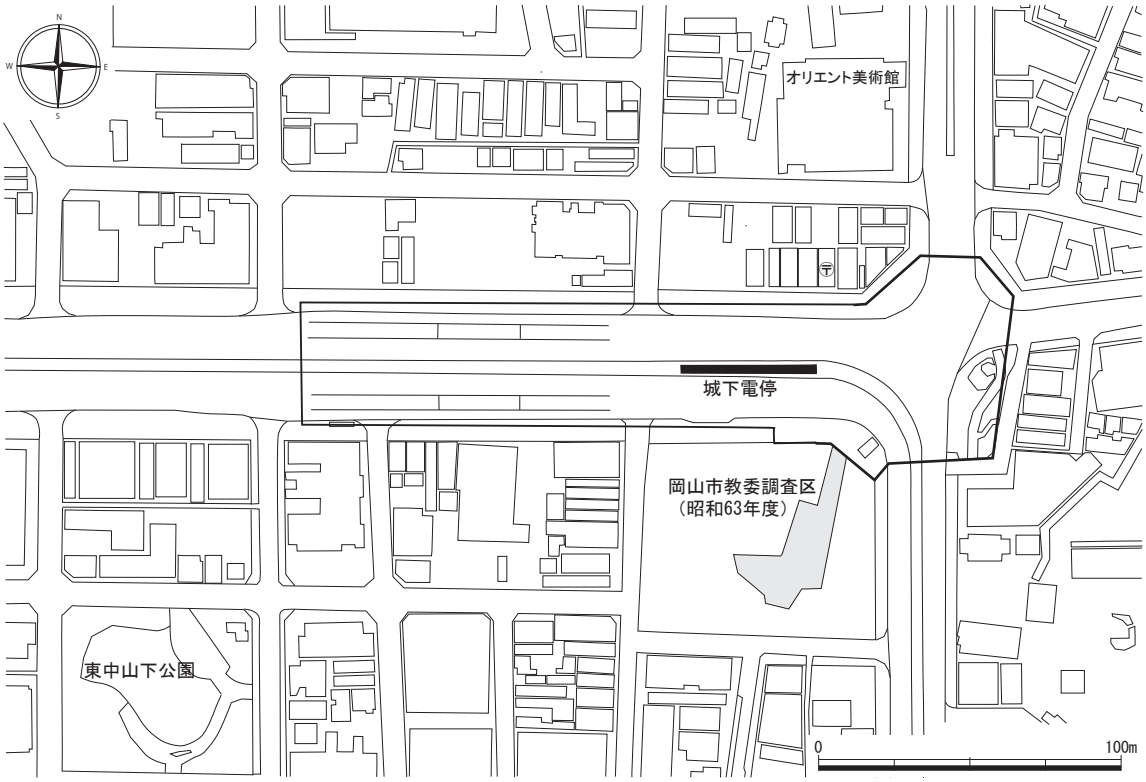
４　岡山城跡の発掘調査

岡山城跡の本格的な発掘調査は、平成元年の本発掘調査に始まる。ほぼ同時期の平成元年３月～６月にかけて、南側の商業施設開発（シンフォニービル）にともなう発掘調査が岡山市教育委員会によって実施された。さらに同年には、岡山県庁舎増築に伴う発掘調査も実施しており、これら３か所の発掘調査がその後の岡山城跡発掘調査の嚆矢となった。平成５年度には、二の丸跡に所在する中国電力内山下変電所の改築工事に際し、事業者から「埋蔵文化財所在の有無」について岡山市教育委員会に照会があった。市教委よる試掘調査の結果と工事計画を踏まえた事業者と県教委、市教委間の協議の結果、三者によって「中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会」が立ち上げられ、岡山県と岡山市の埋蔵文化財調査担当者による発掘調査を実施することとなった。

現在、外堀跡の内側は周知の埋蔵文化財包蔵地として文化財保護の対象となっている。岡山県教育委員会及び岡山市教育委員会は、二の丸跡や三の外曲輪跡部分においても、これまでに開発に伴う記録保存調査を数多く実施している。また、本丸跡部分では、史跡保存整備事業として岡山市教育委員会による発掘調査が数次にわたって行われている。

参考文献

岡山県教育委員会『二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 78　1991
岡山市教育委員会『岡山城三之曲輪跡』2002
中国電力内山下変電所建設事業埋蔵文化財調査委員会『岡山城二の丸跡』1998
岡山大学附属図書館編『絵図で歩く岡山城下町』吉備人出版　2009
岡山県教育委員会『岡山城本丸跡・二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 258　2022



第25図　調査範囲(1/2,500)

第２節　調査概要

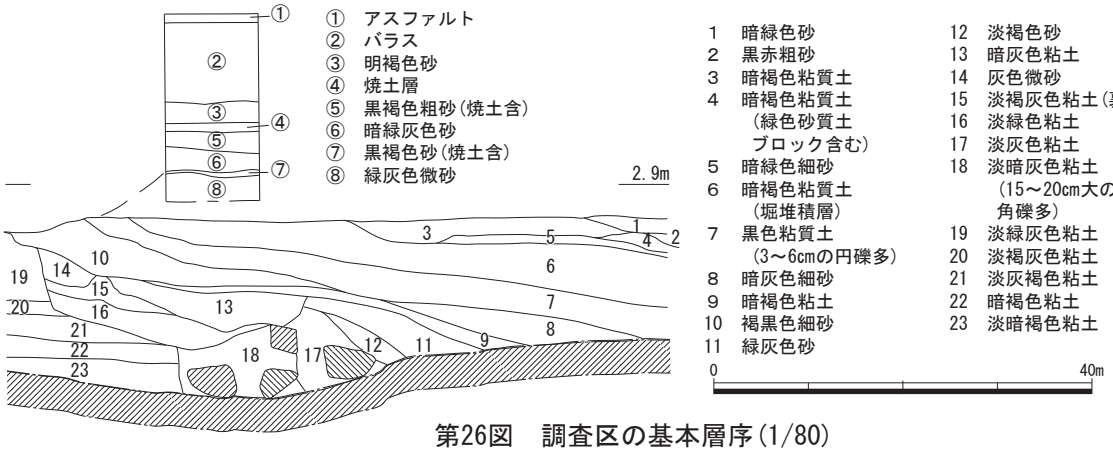
１　基本層序（第 26 図）

発掘調査は、内堀跡の石垣を追求することを主眼とした。石垣検出ラインを１～６区に分けて（第 27 図）調査を行った。第 26 図は２区北壁の土層堆積状況である。道路面のアスファルト下に造成の砂利層があり、路面下 115㎝で焼土層がみられた。これは昭和 20 年６月の岡山大空襲による戦災層と考えられる。１～５層は、近代以降で、おそらく戦前の造成土と考えられ、焼土、瓦片とともにガラス片も含む。６～ 10 層は、内堀跡埋土層である。６層では瓦や備前焼片、８層では土師質土器や肥前陶磁器片を含んでいた。７層は３～６㎝の円礫層を多く含む。市教委調査区では明治 39・40 年と考えられる堆積層があり、本調査の６～ 10 層が対応する可能性がある。これらの層下においては、基盤層 19 ～ 21 を掘り込んだ 14 ～ 16 層、内堀跡埋土 11・12・17 層を切る 13 層がある。13 層は石垣の抜き取りに伴う層、15・16 層は対応する石垣はないものの、調査時には石垣の裏込め土と判断している。11・12 層は遺物が比較的少ない。17 層は、石垣の転落とみられる石材や備前焼を含んでいる。18 層は基盤層の 22・23 層を掘り込み、15 ～ 20㎝の円礫を多く含む。石垣の裏込め土とみられる。検出レベルからみて市教委調査区の下層石垣に対応すると考えられる。15・16 層は、石垣の修築あるいは上層石垣（市教委調査区検出）に対応する可能性はある。１区北断面（第 28 図Ｃ－Ｄ断面）においても確認できる。図では下層石垣と思われる石垣の上部で堀の内側に１ｍほど飛び出した状態で石垣が図化されている。その上部石垣は裏込めの円礫層を伴っていることから、原位置を保った石とみられる。

２　内堀跡（第 27 ～ 29 図）

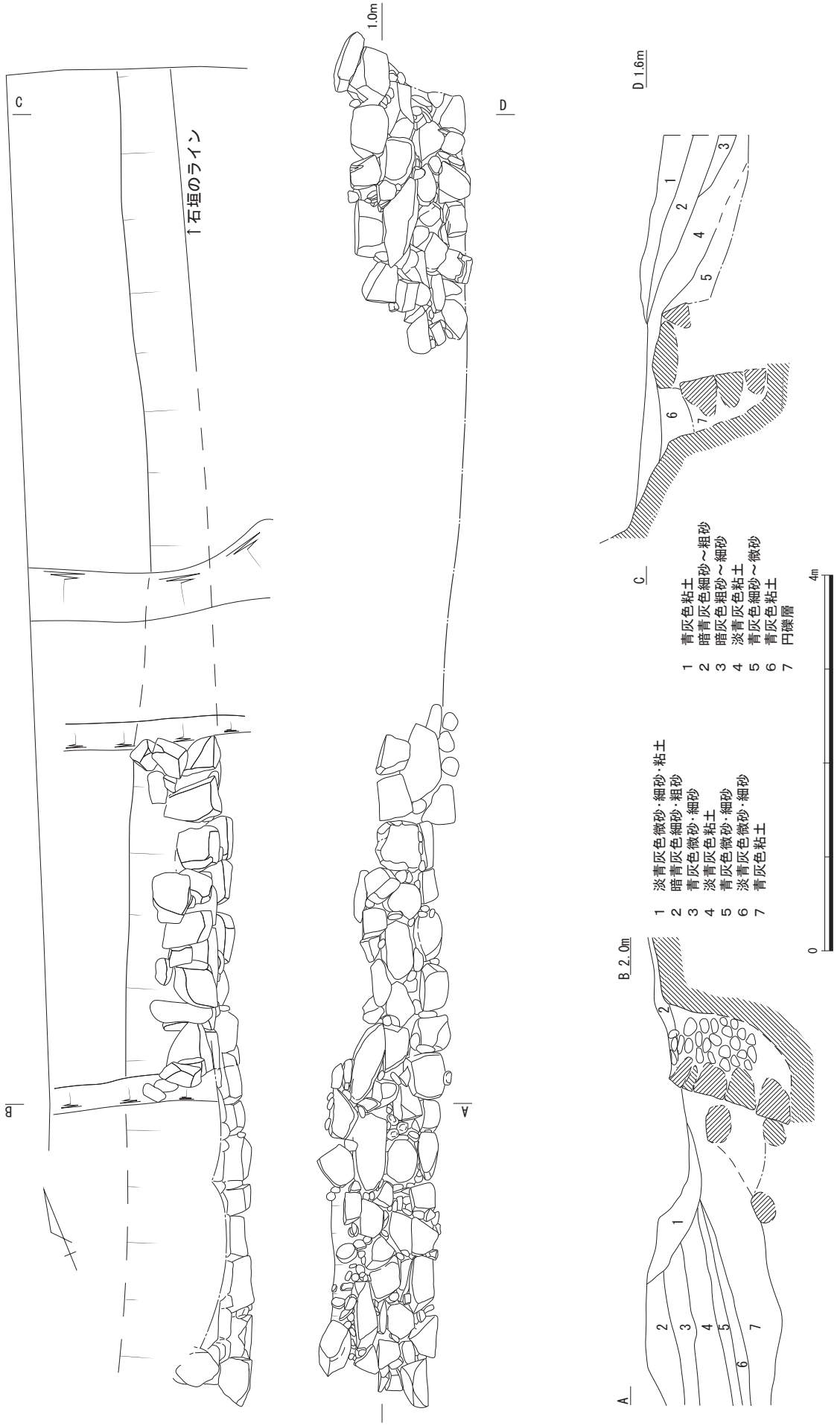
内堀跡の石垣は、全長約 30 ｍに渡って検出したが、基礎鋼材の設置により数箇所で損壊、分断されていた。高さは部分によって異なるが、石垣の上端は路面下約３ｍに位置しており、路面から基底石までは約 4.3 ｍである。石垣は、最も残存状況のよい所で高さ約 1.5 ｍ、基底部の標高は、標高 0.5 ～ 0.1 ｍで、調査範囲内では南が高く北が低い。基底石の高さは凹凸を繰り返すが、これは地山の微地形形に左右されていると考える。

石積みは３～４段分が残り、残存高は１ｍ程であった。石材の積み上げ角度は 75 ～ 85 度の急勾配で



第26図　調査区の基本層序（1/80）

第27図　遺構配置(1/1,000)



第28図　内堀跡１～３区(1/60)

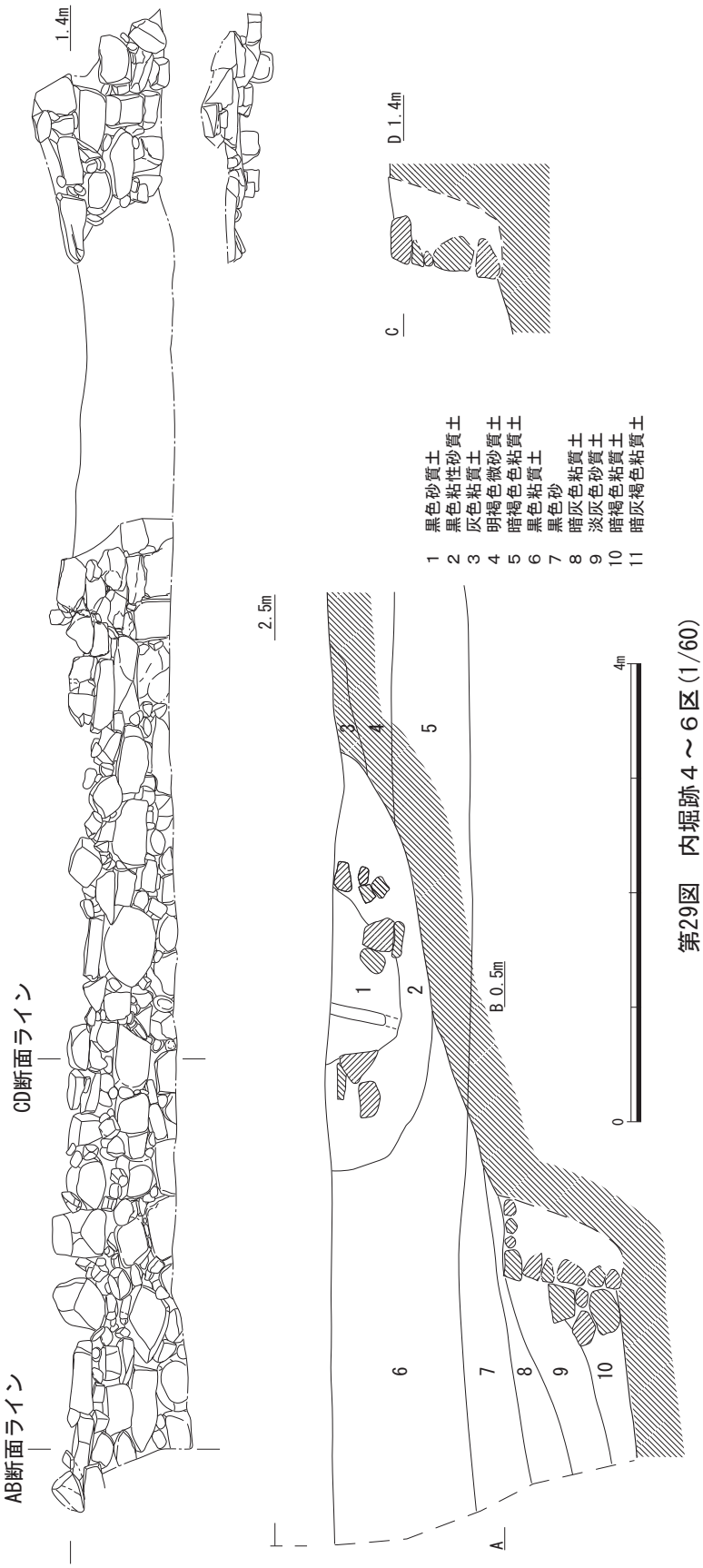
ある。石材の大きさは部分によって異なるが、長さ40㎝程度の角礫を主に用い、隙間には間詰め石を多用する。小口を石垣前面に向けており、全体的に横目地が通る。掘り方の裏込めには円礫が用いられる。また、残存石垣の前面には、堀埋没時に崩されたとみられる大量の石垣石材が堆積していた。

堀の堆積土は上層と下層に大きく二分できた。主に下層に石垣を崩した石材が入り、上層は黒色の有機質土で瓦片や陶磁器片などを大量に含む。堆積状況から、下層は明治維新以降、上層は明治時代中期以降の堀埋立て期の層と判断できる。石垣付近においては江戸時代の遺物は認められず、堀が機能していた時期には堆積土の除去がなされていた可能性が強い。石垣は、軸線、検出レベル、石積みから市教委調査区の下層石垣に対応し、時期的には江戸前期に構築されたと考えられる。堀の深さは、４m程と推測できる。

3　中堀跡（第27・30図）

旭川から水を取り込む水堀で、調査範囲内では内堀跡西岸の西方約150 m辺りを南北方向に横断する。堀の上部は地表下２mまで攪乱を受けていたものの、それ以下は遺存していた。石垣はみられず、土居をなしていた。

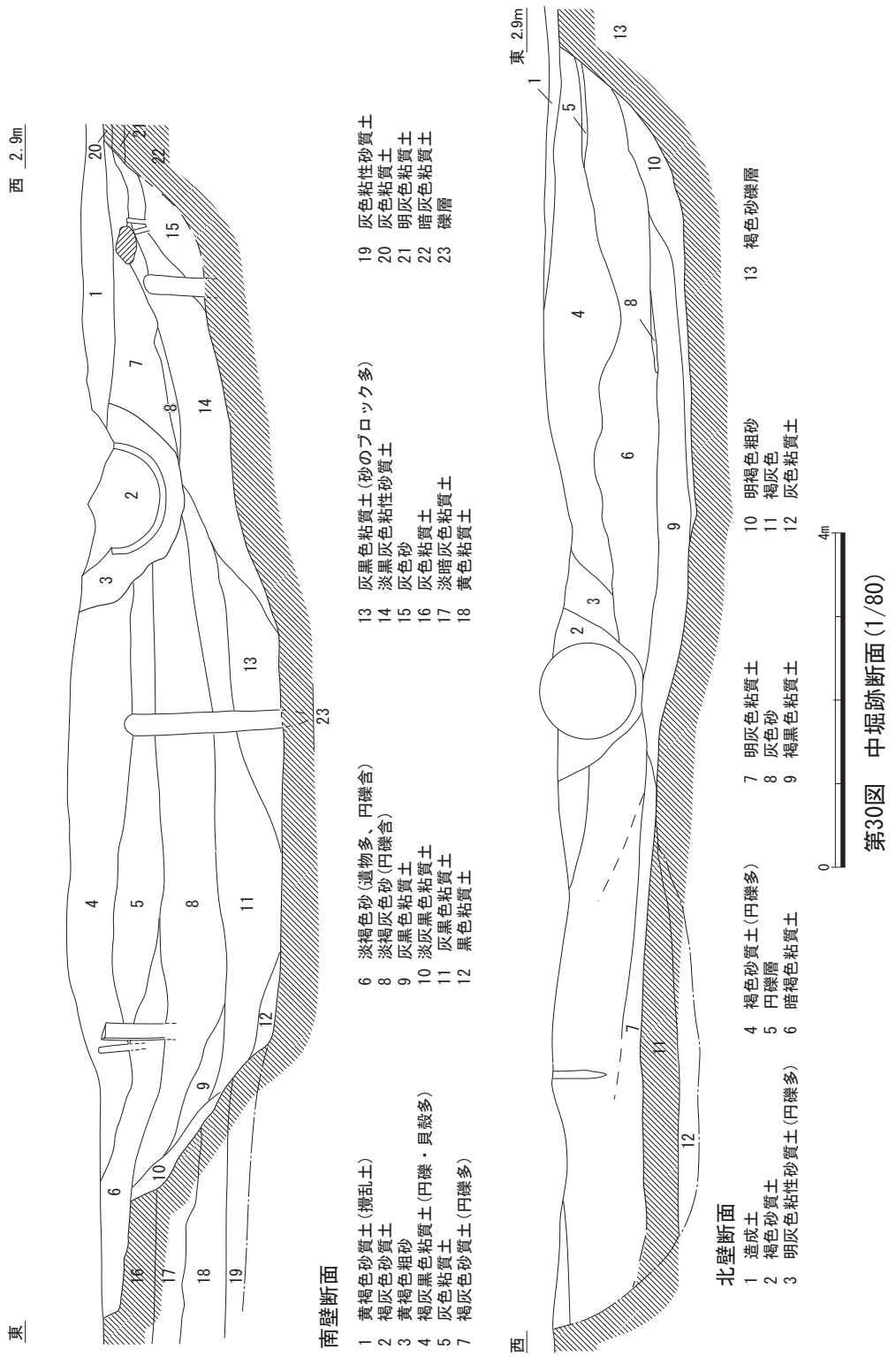
南断面では、上面幅が約12.7 m、深さは約2.6 mである。堀底の標高は、－10㎝で、底面幅が約５mを測り、断面は逆台形の箱堀であ



第29図　内堀跡４～６区（1/60）

る。この断面位置で中堀底に向かって打ち込まれた角材を確認している。角材の長さは 220㎝、材の厚みが 23 × 24㎝で、先端は角錐状に尖らせていた。この木材は、西国街道が中堀に架かる「上ノ橋」の橋脚材の可能性が高いと思われる。17 層の西側肩と 21 層の東肩を結んだラインでは、上面幅約 12.7 m、深さ約 1.8 mとなり、そのラインが中堀のおおよその水位と考えられる。

北断面は、西肩より東肩の傾斜が緩やかで、堀幅は南断面のそれより８m程広く、上面幅は約 15.2 m



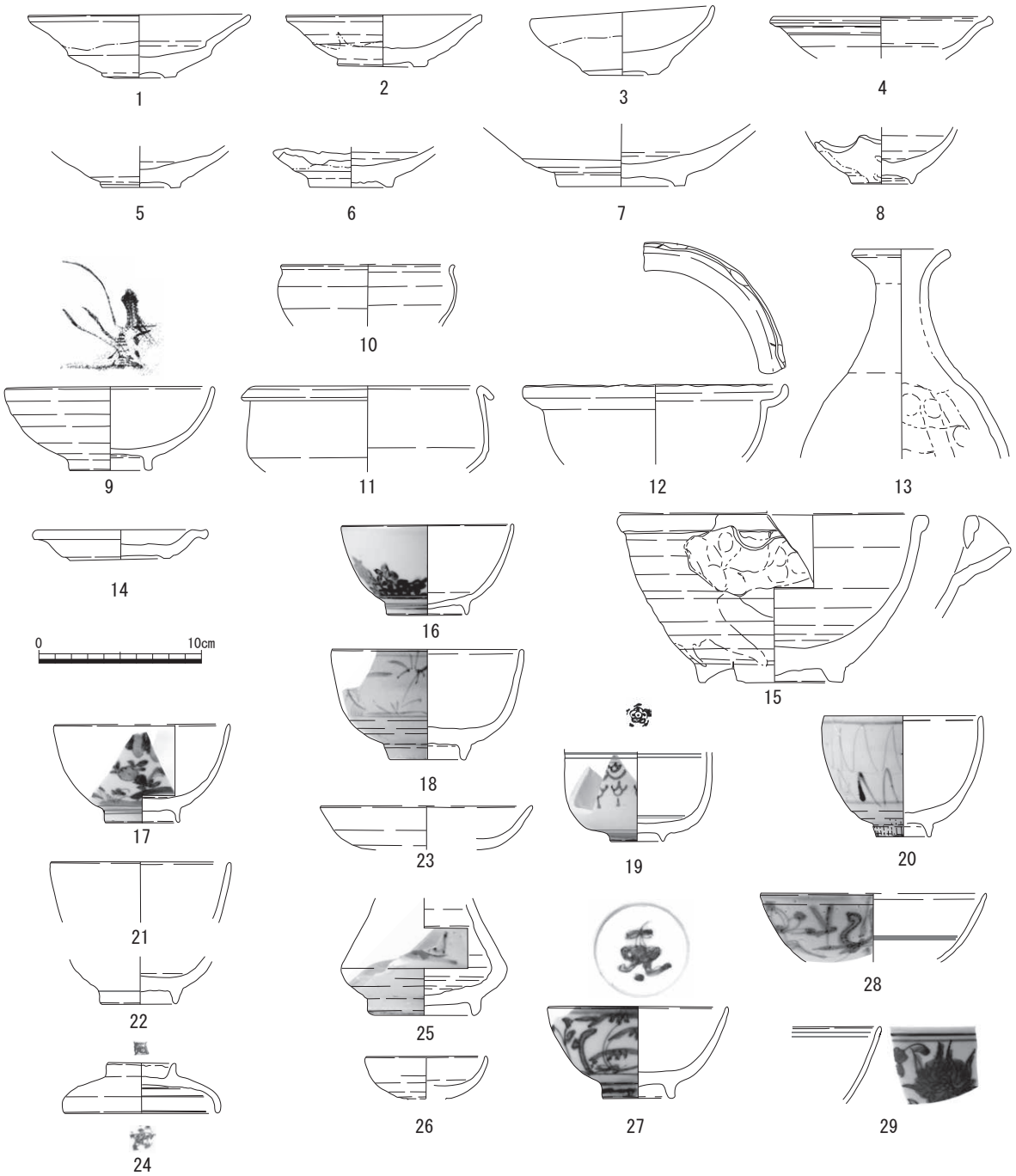
第30図　中堀跡断面（1/80）

である。深さは西半が浅く 1.3 m程、東半が約 2.2 mで、堀底は標高 0.2 mである。

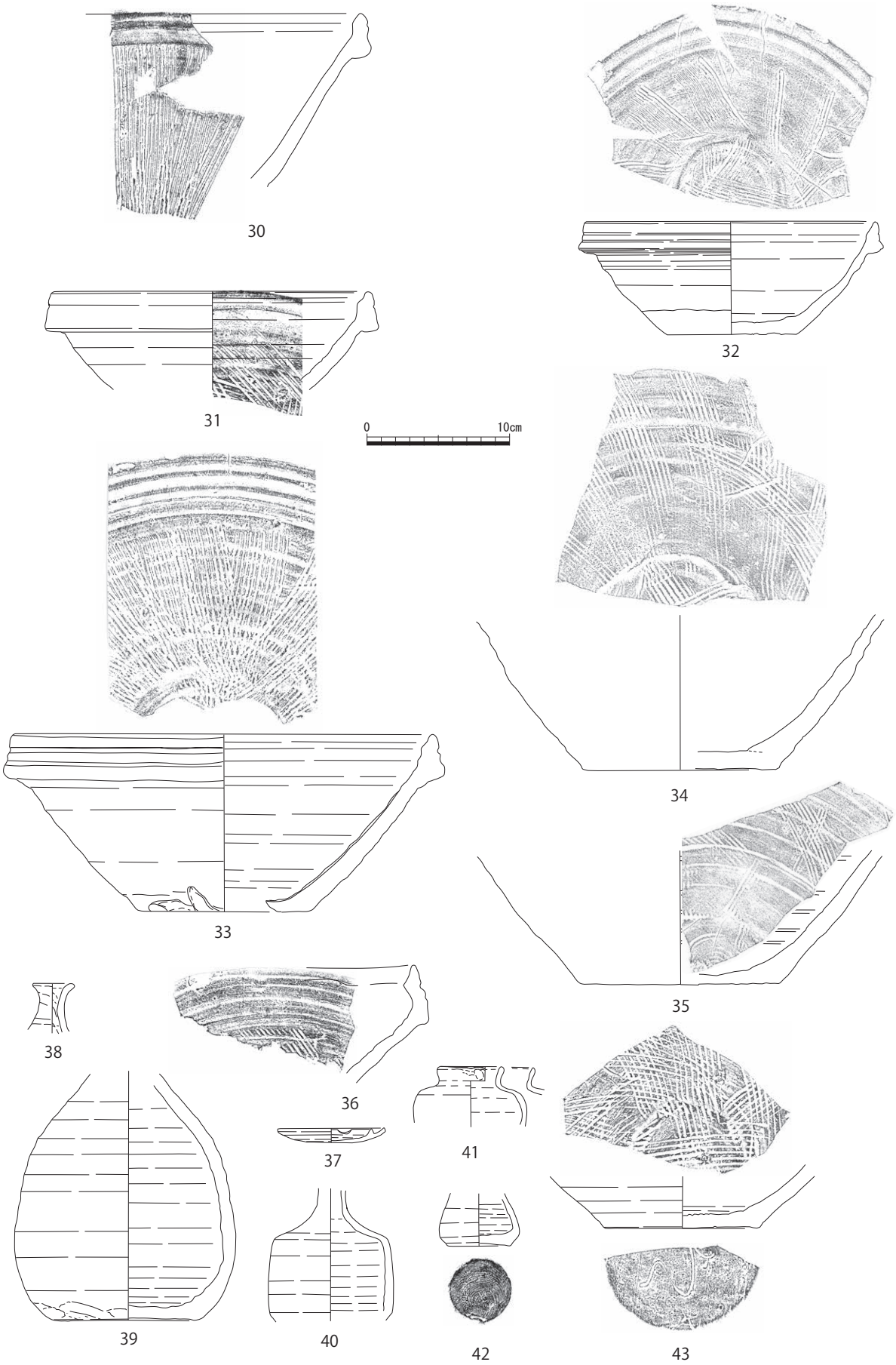
堀の堆積土は、上層と下層に分かれる。上層（４～ 10 層）は遺物が多く、４・６層は円礫と貝殻を多く含み、５層も陶磁器片を多く含む。９層は陶磁器片・骨片・木片を多く含み、下面には円礫を多く含む。下層（11 ～ 16 層）は遺物が少ない。

４　出土遺物（第 31 ～ 33 図）

現場から持ち帰った出土品のコンテナ４箱分から、肥前陶磁器（１～ 26・46）、青花(27 ～ 29)、備前焼(30 ～ 45)、美濃焼天目碗（47)、土師器（48 ～ 52)、瓦（Ｒ１～４）を図化している。これらに加えて、貝

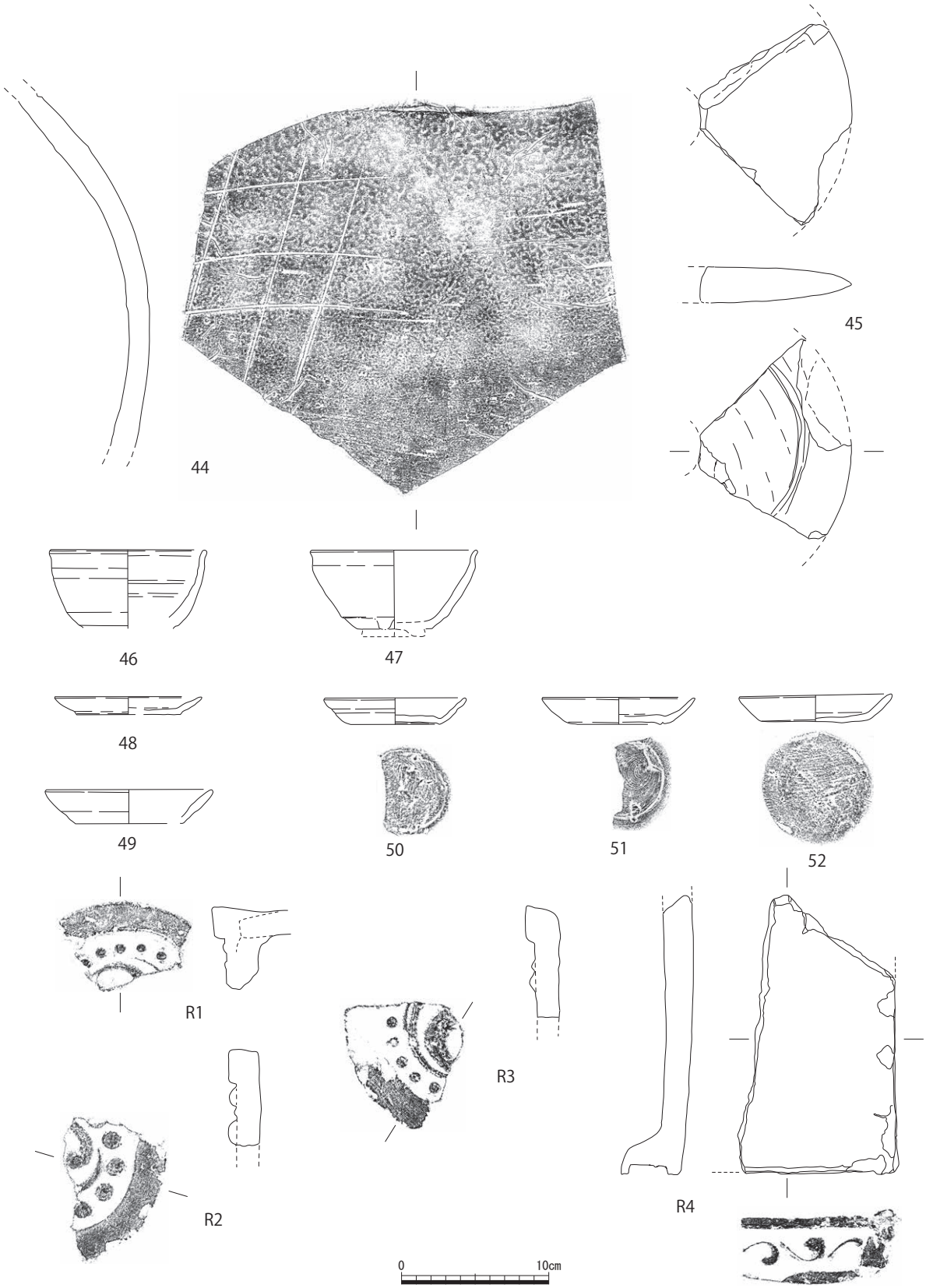


第31図　出土遺物１(1/4)



第32図　出土遺物２(1/4)

類（写真５）や獣骨・人骨（写真６）も出土している。貝類では、アカニシ２点、サザエ貝蓋、シジミ、イタヤガイ２点がみられる。獣骨では、シカ寛骨Ｌ（写真６-1:以下同)、猫大腿骨Ｒ（2)、犬脛骨Ｒ（3)、



第33図　出土遺物３(1/4)

猪上腕骨Ｒ（4）、鶏上腕骨Ｌ（5）、鹿橈骨Ｌ（6）、鹿大腿骨Ｒ（7）、鹿橈骨Ｒ（8）、人骨に成人脛骨Ｒ（9）がある。桶底板などの木製品も出土している。

陶器類のうち、１～７が肥前系陶器の灰釉皿で、７には胎土目、２・５が砂目、６にも目痕がのこる。これらの時期は、17 世紀初頭～前半である。肥前陶器碗８、徳利 13 も同時期の所産とみられる。９は京焼風肥前灰釉陶器碗である。見込みに鉄絵で山水を描かれており、時期は 17 世紀後半である。鉢 11・12 と片口鉢 15 は、18 世紀後半以降の産である。14 は美濃焼の皿で、底部の内外面に輪トチンの痕が残る。肥前系磁器類では、碗 16 ～ 22 のうち、16 の文様はコンニャク印判で 17 世紀末～ 18 世紀初頭、18・20 ～ 23 が 17 世紀前半、17 は 17 世紀中～後葉で、19 が 18 世紀代に下る。皿 23 は、17 世紀前半、蓋 24 は 17 世紀後半～ 18 世紀前半、瓶 25 は 17 世紀前半、仏飯器 26 は 18 世紀代である。中国産磁器には、碗が３点ある。27・28 が漳州窯産、29 が景徳鎮窯産である。時期は、16 世紀末から 17 世紀初頭と考えられる。

備前焼には、擂鉢 30 ～ 36、灯明皿 37、壺 40 ～ 42、徳利 38・39、甕 44 ほかがある。擂鉢 43 は底部外面を丁寧にナテて仕上げ、ヘラ描きがみられる。44 は、大甕の肩部片で縦・横三本の格子状のヘラ描きがみられる。薬研車 45 は、半径 11㎝の円盤で中心に軸孔が開く。中軸部の厚さは 2.4㎝で周縁に向けて幅が減じ、断面は三角形状をなす。同様の品が三の曲輪跡（市教委調査区）下部包含層からも出土しており、薬研用とみられる。本品は、片面に灰をかぶり、もう片面には重ね焼きの痕跡が残る。備前焼の時期は、16 世紀末から 17 世紀前半が主であるが、灯明皿 37 は 18 世紀後半～ 19 世紀である。なお、46 は肥前産、47 は美濃産の天目碗である。17 世紀初頭～前半の所産である。

土師器皿（48 ～ 52）のうち、50・51 は、ロクロナデ成形で、底部外面は回転糸切りである。51 は見込みの周縁が溝状をなし、色調が灰白色を呈す。50 は他に比べ器壁が厚い。ススが付着した灯明皿である。48・52 は手づくねで、底部に板目圧痕が残る。いずれも、口径が 9.4 ～ 11.2㎝の小形品である。

瓦（Ｒ１～４）では、Ｒ１・３が左巻巴文軒丸瓦である。Ｒ２は右巻き巴軒丸瓦で、珠文の径が大きく、個数が 12 個とみられる。Ｒ４は、中心飾り不明の３点唐草文軒平瓦である。側区幅は狭く、三点目の唐草の巻きが小さい。凹面にヘラミガキ、上角に面取りを施す。時期は、Ｒ２が 17 世紀中葉、Ｒ１・３・４は 16 世紀末に遡る。

出土地点別にみると、中堀跡からは 28・30・38・Ｒ２・３、鹿骨（写真６-６～８）、シジミ貝が出土している。外堀跡からは、Ｒ４と人骨（写真６-９：柳川交差点立会時に外堀跡底面から出土）が出土しており、それ以外の遺物はすべて内堀跡からの出土である。内堀底付近には 16 世紀末から 19 世紀代にかけての遺物が堆積していたと考えられる。

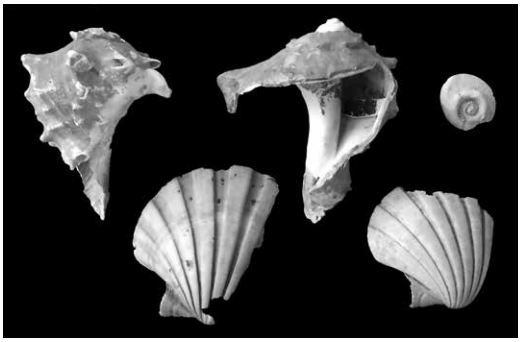


写真５　岡山城内堀跡出土貝類

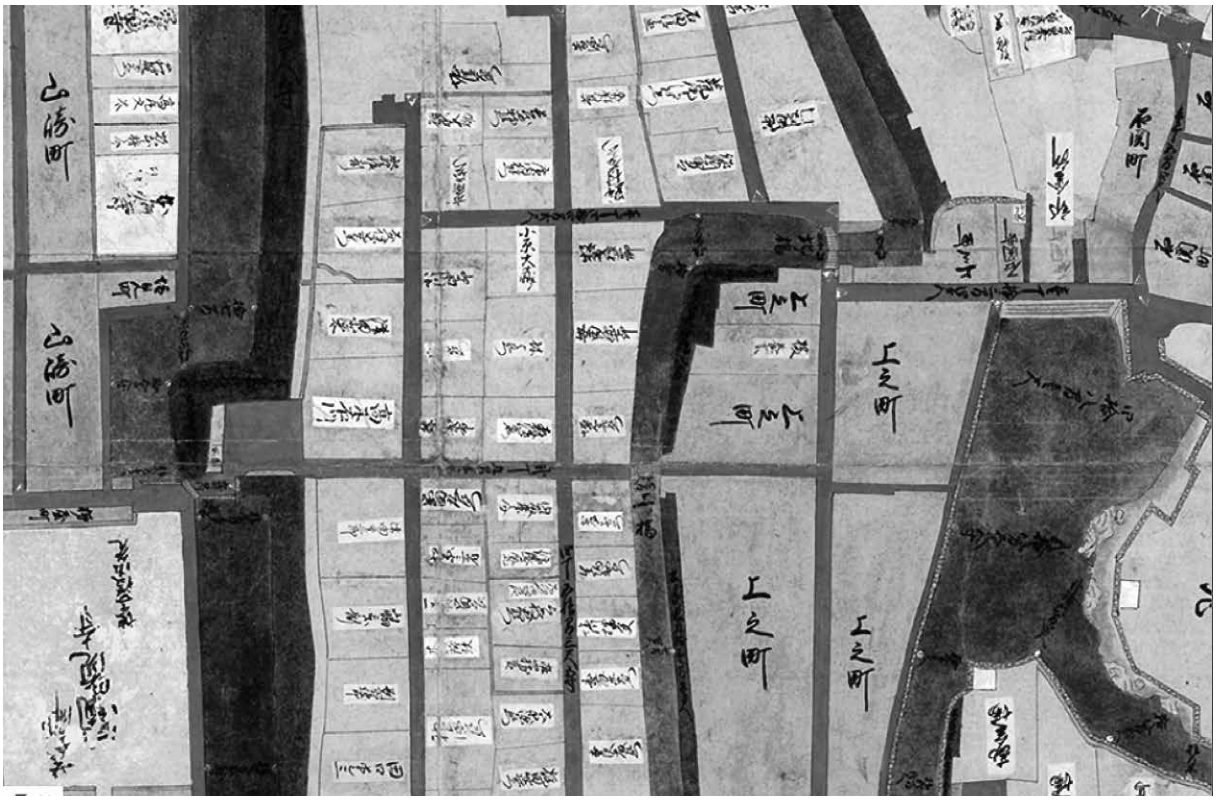
写真６　岡山城内堀跡ほか出土獣骨・人骨

第３節　小結

今回の調査成果は、埋没した内堀跡石垣を発掘調査によって初めて確認したこと、及び中堀跡の断面を確認したことにある。中堀跡については、現段階で唯一の発掘調査となっている。本調査を先駆けとして、周知の埋蔵文化財包蔵地「岡山城跡」の範囲を拡大することになり、その後の岡山城跡及びその周辺における武家屋敷跡の発掘調査へとつながるという大きな成果となった。

内堀跡の石垣は、本調査地の南に接する市教委調査区と一連のもので、裏込めに円礫を充填するが、石垣の基底部では根太など基礎地業はない。構築時期は、17 世紀前葉の可能性が高い。

調査地点における絵図が示す内堀跡の規模は、堀幅三拾九間、深さ一間（『備前国岡山城絵図』）。弐拾八間五尺五寸（『岡山地理家宅一枚図』）である。この深さ一間は水深で、西肩部の深さは現地表から堀底まで約 2.7 mであった。中堀跡は、本調査によって南北で堀の断面形状・規模が判明した。『備前国岡山城絵図』によると、堀幅七間、深さ六尺である。『岡山地理家宅一枚図』では、橋のたもとで堀幅が七間一尺である。上之橋を境に堀の北側が幅広となり、軸線がやや東に振れるが、これは本調査における北壁断面の状況と一致する。堀幅は、中堀が天神山方面に向かって東に屈曲する箇所では幅が 13 間となる。絵図によると石垣はなく、内側に土塁を設けているが、西国街道の両脇で途切れている。また、西国街道が中堀を渡る上之橋の橋脚と考えられる材を確認した。『岡山地理家宅一枚図』は、堀と路を現在の地図に重ね合わせるとかなりの部分が一致する精巧な測量図である。西国街道は、調査地点である主要地方道岡山吉井線（桃太郎大通り）では、その南側を東西に走っていたと考えられ、その場所をほぼ特定できた。



第 34 図　『備前岡山地理家宅一枚図』※岡山大学附属図書館所蔵

第４章　津山城外堀跡

第１節　遺跡を取り巻く環境

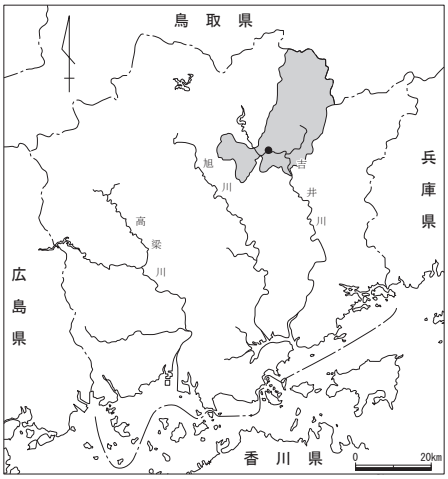
１　津山城の位置

津山城跡が所在する岡山県津山市は、県北部の中心都市であり、県内で３番目の人口 9.8 万人（令和４年４月現在）を有し、面積は 506.33㎢である。市の北部は「中国山地」で鳥取県との県境をなす標高 1,000 ～ 1,200 ｍの中国山地南面傾斜地であり、津山城跡の位置する南部は津山盆地と呼ばれる東西に約 30 km、南北に約７～ 10km の広さを持つ中国山地最大の盆地である。津山盆地の標高は概ね 100 ～ 200 ｍ程で、四方を中国山地と吉備高原に囲まれ、盆地の中央部には東西に岡山県三大河川の一つである吉井川が貫流している。

津山城跡は、城周縁部分における市街地化は著しいものの、戦災を受けなかったため町割りが旧状を留めており、石垣の残る中心部分は国指定史跡として保存されている。そして現在、津山城跡のほぼ全域 (第 36 図：吉井川と旧市街地の東を南北に流れる宮川との合流点の北西部にある標高約 140 ｍの低丘陵「鶴山」を中心に南北約 650 ｍ、東西 600 ｍほどの範囲を城域とし、北･西･南辺は外堀で、東辺を宮川で画する) が、周知の埋蔵文化財包蔵地として保護・保存の対象となっている。さらに、鶴山公園とも呼ばれ桜の名所として市民の憩いの場として知られるほか、備中櫓の復元をはじめとする史跡整備事業の進展によって城郭遺構への関心も高まりつつある。

２　津山城の歴史

関ヶ原合戦後に美作国を領した小早川家の断絶、領地没収後の慶長８（1603）年、美作国 18 万６千５百石を与えられ入封した森忠政は、築城の候補地として鶴山を選び、慶長９（1604）年には築城を開始した。城を築く小山の地名を「鶴山」から「津山」へと改め、元和２（1616）年には一応の完成を見た。元々この地は、美作国守護であった山名教清が一族の山名忠政に命じて嘉吉年間（1441 ～ 1444 年）に築城させたとされる。城の北側、三の丸に残る「薬研堀」や「厩堀」は山名氏時代の遺構ともいわれるが、山名氏の城郭遺構の実態は不明である。



第 35 図　津山城跡の位置 (1/2,000,000)

城主の森氏は忠政以降、４代 95 年存続したが元禄 10（1697）年に改易となり、翌 11 年に越前松平家の分家である松平長矩（宣冨）が 10 万石で入封し、以降９代が続いて明治維新を迎える。その後、明治４（1871）

年には廃藩置県、明治６（1873）年の廃城令を経て、明治７（1874）年には天守、屋敷、櫓、門などの建物はすべて取り壊されて石垣のみが残った。また、外周を土塁と堀が囲っていたが、明治の廃城以後、明治20（1887）年頃までには土塁を崩して堀を埋め立て、市街地に組み込まれていった。このように城跡は一度荒れ放題となるが、明治23（1890）年に本丸西北にある腰巻櫓の石垣が崩落したことをうけ、津山城跡保存の機運が高まり、明治24（1891）年には鶴山城址保存会が設立された。明治33（1900）年には、民間に払い下げられていた津山城跡の中心部分を当時の津山町が町有とし鶴山公園として再出発した。

昭和38（1963）年には本丸・二の丸・三の丸を中心としたエリアが国指定重要文化財（史跡）に指定された。その後の昭和63（1988）年には、『史跡津山城跡保存整備基本計画』が策定され、石垣修復本丸内の民家移転、トイレ水洗化、無電柱化が進められた。平成10(1998)年には『史跡津山城跡保存整備計画』が策定され、虎口通路の整備や石垣修復ほかを柱とし、発掘調査とその成果に基づく復元整備が行われている。また、平成11（1999）年には備中櫓の復元「備中櫓復元整備基本計画」が策定され、平成14（2002）年には 備中櫓復元整備工事が始まった。平成16（2004）年度末には復元建物が完成し新たな観光スポットとして注目されている。

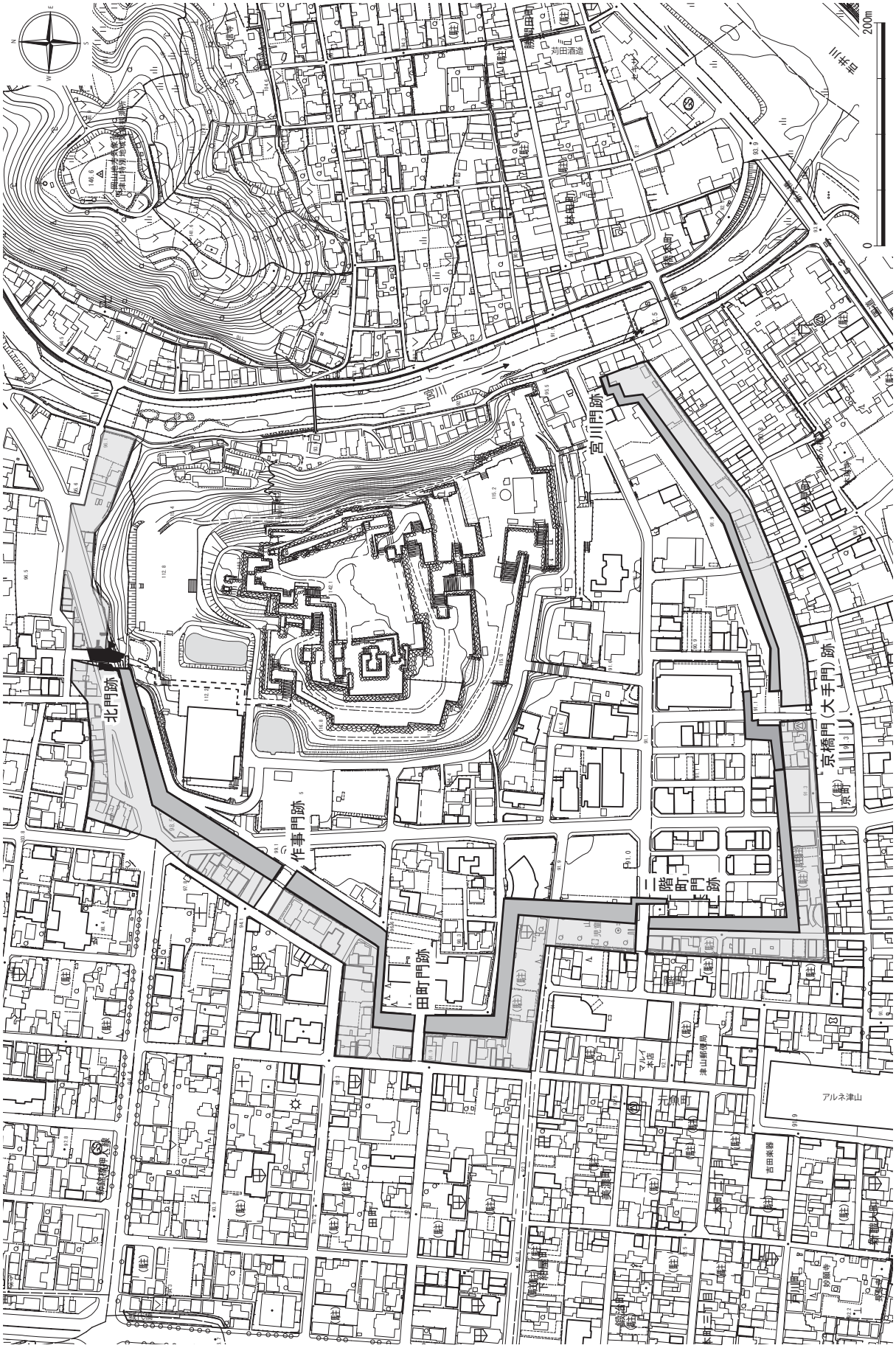
城の遺構は、史跡指定地外では、京橋門西側に一部遺存する土塁が津山市指定史跡として保存されている。また、城の周囲には武家屋敷や商家、町家が広がる。城の西側に広がる田町地区には上中級の武家屋敷が点在し、当時のままの主屋や蔵も残る。城東と城西の２地区の重要伝統的建造物群保存地区は、商家、町家、社寺町の保存・活用がはかられている。さらに、城の北１㎞には国の名勝で近世池泉廻遊式の大名庭園の衆楽園が存在している。

３　発掘調査

津山城跡の発掘調査は、史跡地外における開発事業に伴う発掘調査と史跡整備事業による確認調査とが行われている。前者の件数は少ないながらも武家屋敷地の様相の一端が明らかとなっている。後者では、環境整備事業の一環として無電柱化やトイレの改修が図られたことを受け平成元・２年度に実施した確認調査があり、二の丸御殿跡とその周辺部、本丸跡が対象としたトレンチ調査を行っている。その後の平成10年に策定された『史跡津山城跡保存整備計画』に基づく発掘調査は、21次（平成30年度）に及んでおり、その概要は『史跡津山所跡保存整備報告書』Ⅰ～Ⅶとしてまとめられている。また、令和元年以降も石垣修理工事が進んでいる。

４　城郭構造（第36図）

津山城は鶴山山頂部の本丸を中心に南側は二の丸、三の丸を高石垣によって階段状に配し、その内部は60棟ほどの櫓、土塀、門によって区画されている。そして、本丸へと至る通路は、大手、搦手とも鉤の手に折れ曲がる枡形虎口が連続するという極めて高い防御構造をなしている。本丸は、西端を高さ４ｍほどの石垣で区切って天守曲輪とし、その中心に天守台を築く。天守台は、石垣裾で一辺が約25ｍ余りで、天守は古写真や絵図から五層、地下一階、地上五階であった。天守自体の高さは22ｍ、石垣を含む高さが26ｍと壮大なもので、上層が規則的に小さくなってゆく「層塔型」と呼ばれる構造であった。本丸曲輪の東側は急な断崖をなし、崖下は城の東を南北に流れる宮川が堀の機能を果たしている。城の西側では、三の丸が幅狭の帯曲輪状をなし、その下斜面は石垣ではなく切岸で



第36図　津山城跡と調査位置（1/5,000）

ある。また、北門の東にあたる城の北東側では、石垣は存在せず切岸で防御し、外堀は空堀であった。搦手の防御は、切岸で横矢を備えるといった中世山城的な城郭構造を示す。

三の丸の外側は「山下」と呼ばれる総構えを形成し、武家屋敷であった。そして総構えの周囲を土塁と堀で固めていたが、西側の堀はさらに西へとクランクさせて、東西約 100 m、南北 100 mほどの馬出状の突出部を形成している。堀の内側には、宮川門、京橋門（大手口）、二階町門、田町門、作事門、北門（搦手口）が設けられるが、出雲街道が通る城南側の京橋門を大手、城北側の北門を搦め手とする。津山城を描く絵図をみると、このうちの京橋門、二階町門及び北門は枡形虎口をなすが、田町門や作事門は平入り虎口となっている。また、京橋門へは木橋が懸かるが、それ以外は土橋であった。絵図によると外堀は、京橋門付近で幅が 27 mほど、水深 2.4 mほどとされる。さらに、北門土橋から東側は、空堀であった。

総構えの外にも武家屋敷がひろがる。城西側は南北に流れ吉井川に合流する蘭田川までが武家屋敷と町家の混在地区であり、その外側の出雲街道沿いは寺町となっていた。

土塁については、市街地化とともに逐次削平されていったようで、現在はごく一部に残るのみである。平成６年末～７年初頃に工事に立会した記録があり、土塁本来の高さは不明であるが基底部の幅が７mであったことが確認されている。

主要参考文献

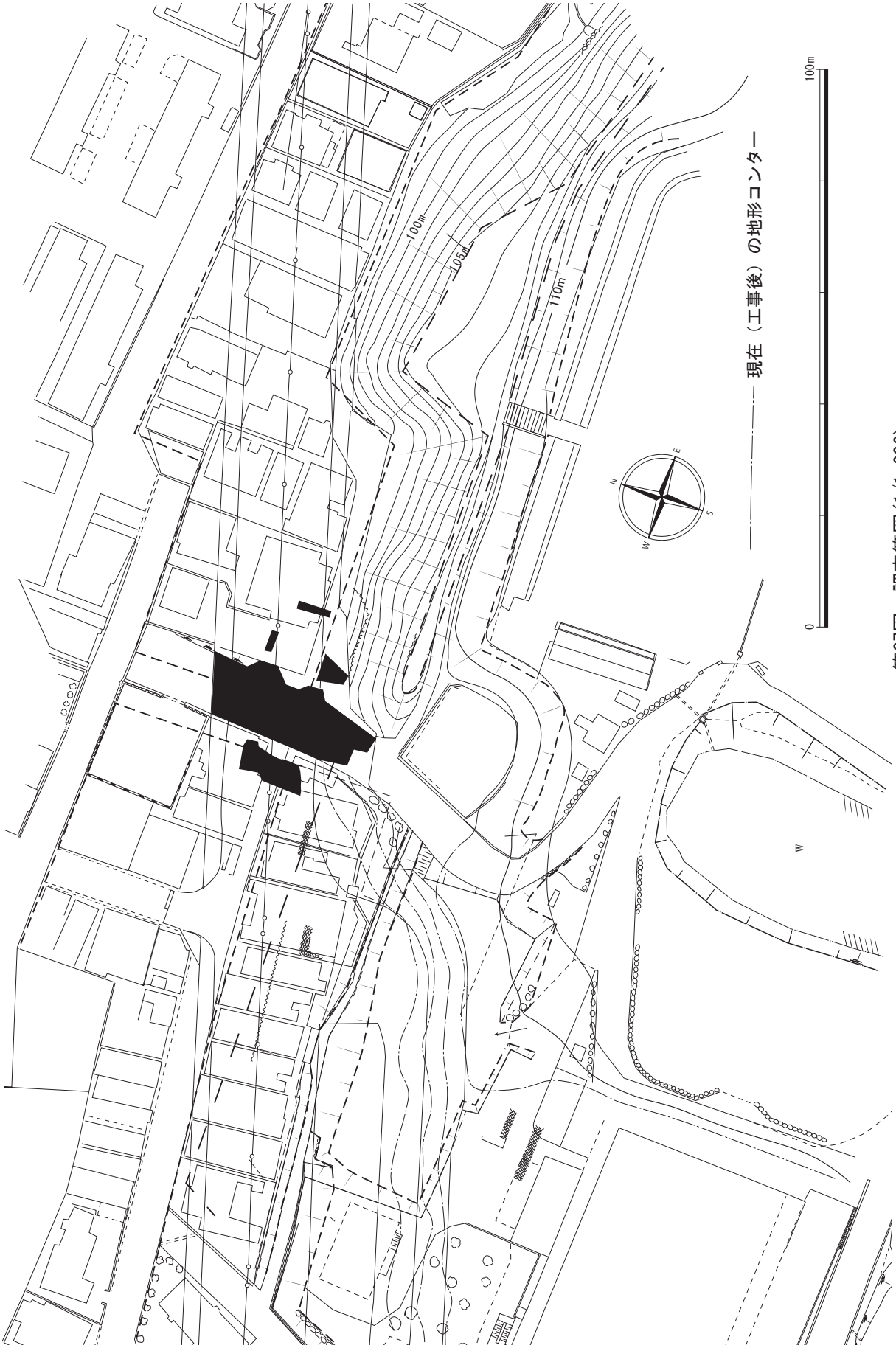
津山市教育委員会『史跡津山城跡』保存整備事業報告書Ⅰ 2007
津山市教育委員会『史跡津山城跡』保存整備事業報告書Ⅶ　津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 93 集 2016
岡山県教育委員会『岡山県中世城館跡総合調査報告書第３冊－美作編－』2020
津山市教育委員会『新修津山市史資料編（考古）』2020
津山弥生の里文化財センター『年報津山弥生の里』第３号（平成６年度）1996

第２節　調査概要

１　調査区の位置（第 36・37 図）

都市計画道路新錦橋押入線は、津山城跡の北辺を東西に横断し、外堀跡の推定ラインとほぼ重なる形で計画された。事業地内には、外堀を渡り北門に入る土橋の存在も窺われたことからその取り扱いについて事業を計画する岡山県土木部道路課との協議の結果、津山城外堀跡の全面発掘調査ではなく、推定北門付近の土橋と堀の構造を把握する部分的な調査を行うことになった。

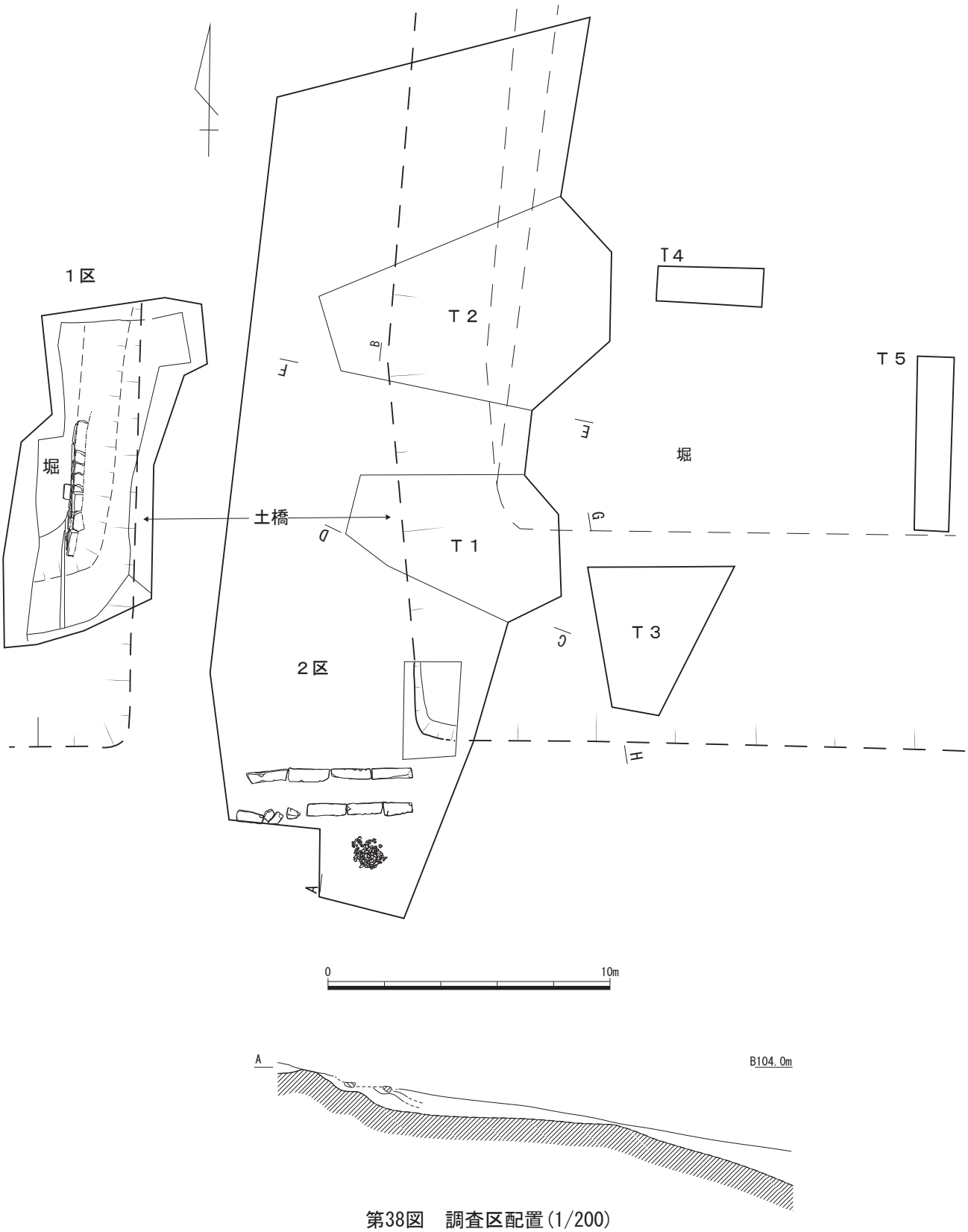
調査は、昭和 64（平成元）年度と平成２年度に実施した。昭和 64（平成元）年度の調査は、市道の西側に１か所（１区）と東側の２か所（Ｔ４・５）の計３か所のトレンチを設定し、調査を実施した。平成２年度の調査は、土橋部分を中心に行い（２区）、上面の遺構確認と断面観察（Ｔ１・２）及び堀法面の断面観察（Ｔ３）を行った。



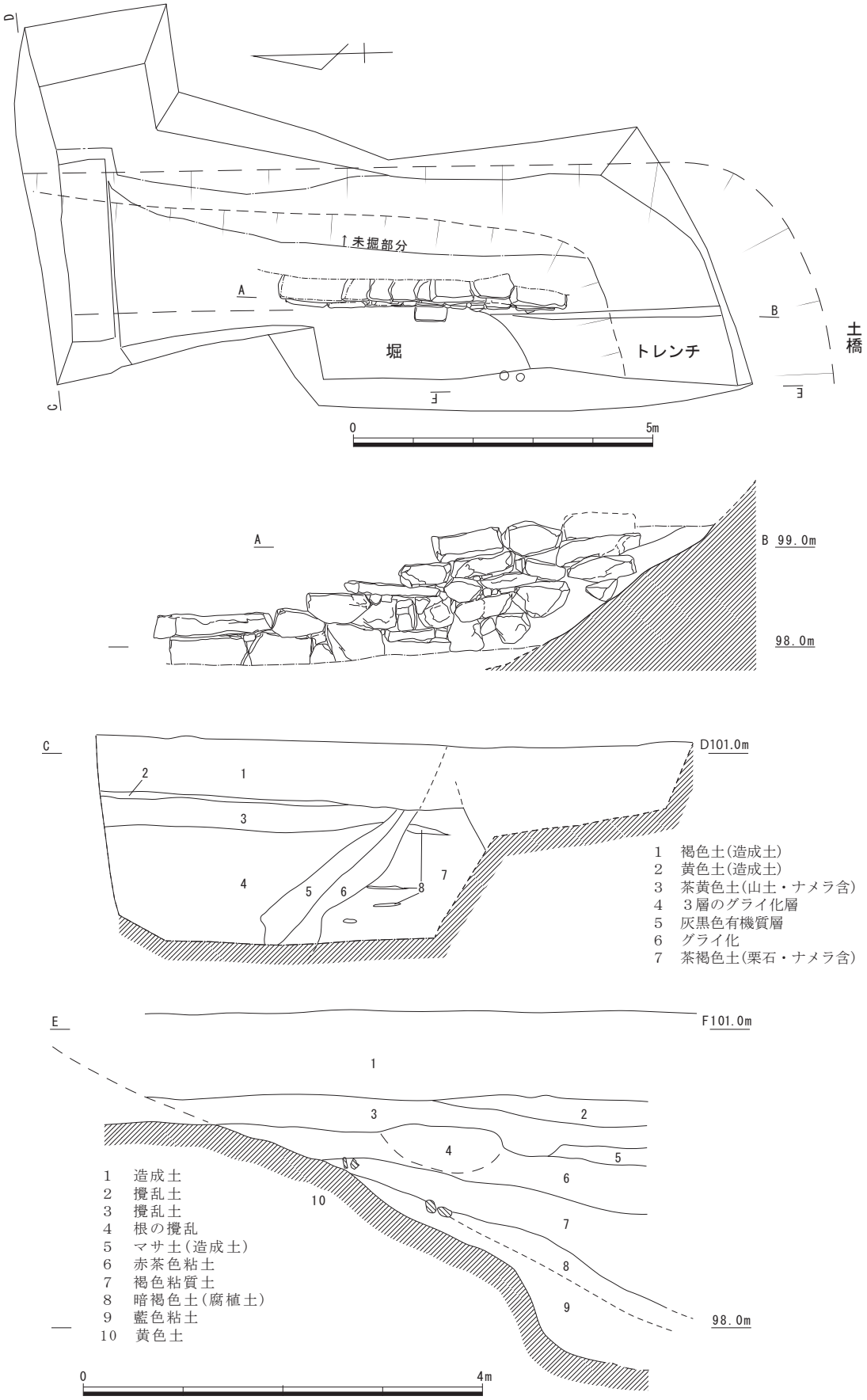
第37図　調査範囲(1/1,000)

２　１区の調査（第 38・39 図）

１区は、北門土橋を踏襲すると思われる市道（幅員 11 m）の西に沿って設定した。その結果、南



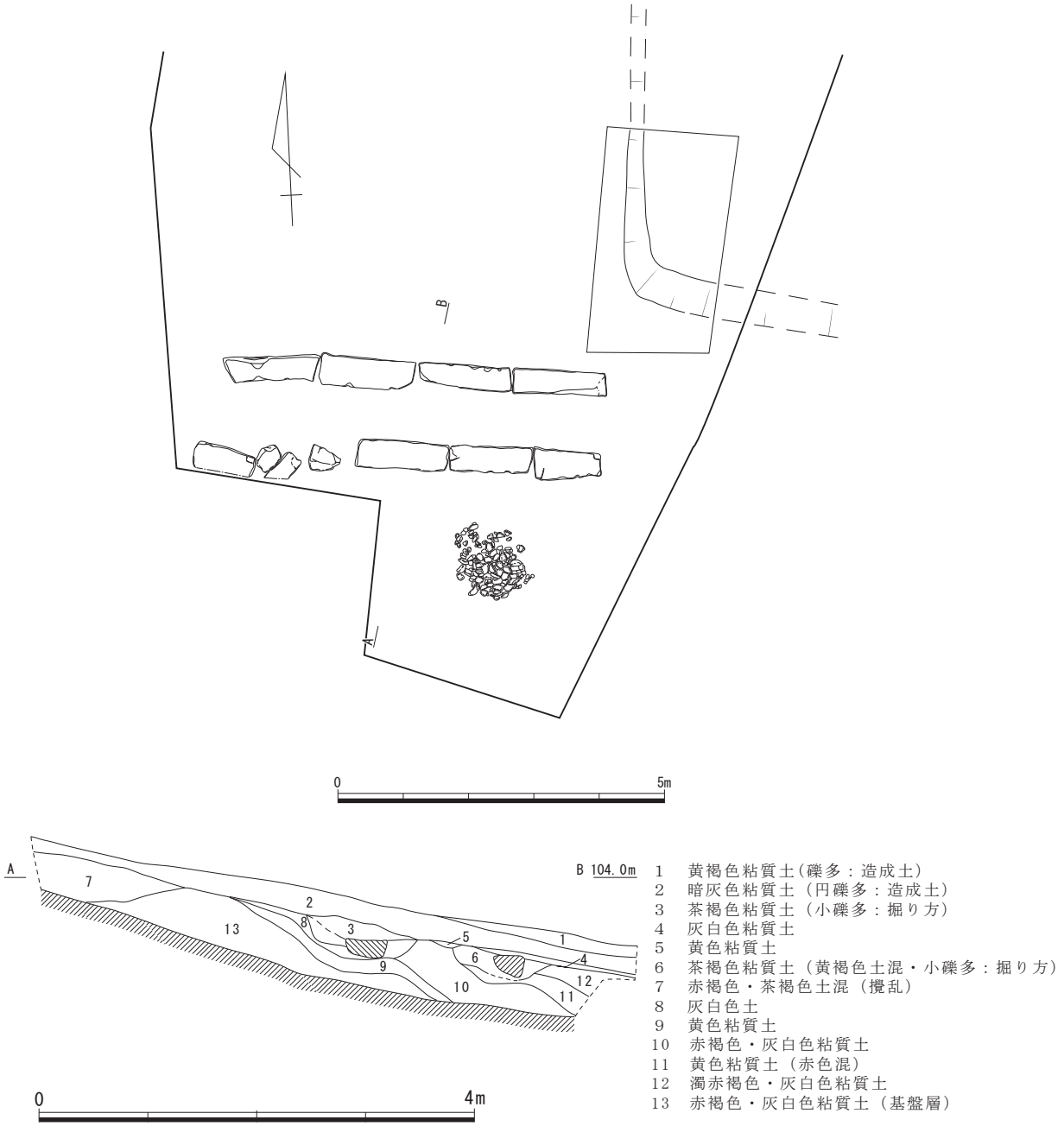
第38図　調査区配置(1/200)



第39図　1区遺構配置(1/100)、石垣立面・土層断面(1/60)

北方向の土橋と外堀の肩を検出し、土橋の基部の城内側に近い部分には長さ５ｍ、高さ約 1.2 ｍの範囲に石積が残存していることを確認した。さらに、土橋はその城内側の一部を除く大部分が盛土であること、土橋は真北を基準にしていたことなどが判明した。

平面的に掘り下げを行うと同時に外堀及び土橋に直交する２か所の断面観察を行いその結果、土橋西側裾の石積は堀内側の法面(基盤層)にもたせかけるように積み､堀底から２～５段分が残っていた。大小の角礫を横長に積み、横目地が通る。この石積は、現存する外堀石垣である京橋門外側の石垣とは積み方が異なり、かつ石材も小ぶりである。掘り方は確認できたが、裏込め栗石の存在は不明である。確認した堀底は、標高 97.7 ｍ程である。Ｅ－Ｆ断面は、土橋に平行する外堀断面で、石垣やその痕跡は確認できなかった。この部分での堀は、基盤層を掘削し、概ね傾斜角は 30 度余りである一



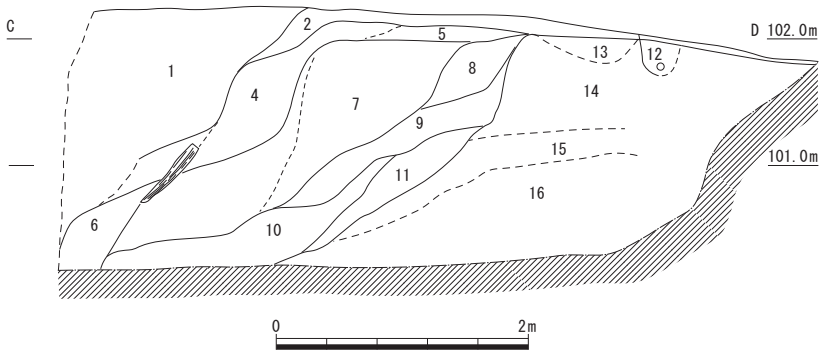
第40図　２区遺構配置(1/100)、土層断面(1/60)

方、堀底付近の傾斜角は60度近い急斜面となっている。現在の地盤から堀底までの深さは3.5ｍで、基盤層から堀底までは2.4ｍであった。Ｃ－Ｄ断面は、土橋から西側外堀にかけての断面である。土橋の西側裏面は傾斜角が60度である。

出土遺物は、僅かに丸瓦１点のみが出土している。

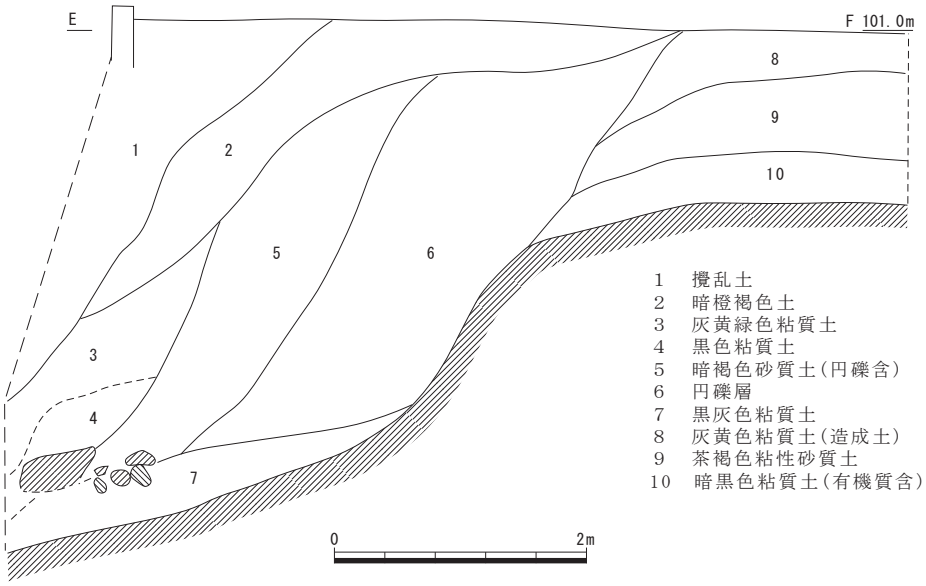
３　２区の調査（第38・40図）

１区の東に接する市道部分に設定した。北門土橋を確認し、上面を掘り下げたところ、調査区の南側で踏石様の石列を検出した。石列は上下二段で、上段（南側）と下段（北側）との高低差は14㎝余りで城内の雁木と比べ低く、両段の間隔は約１ｍであった。両段とも長さ1.3～1.5ｍ、幅0.3～0.5ｍの石材がほぼ東西方向に並べられており、下段は４石を並べその長さは６ｍであった。上段は３石



1　造成土(コンクリートやガラス含)
2　黒色角礫層(戦前の旧地表)
3　灰褐色砂質土
4　灰黄褐色砂質土
5　灰黄褐色砂質土
6　暗灰色粘質土
7　円礫層
8　黄褐色粘質砂
9　赤褐色～暗灰色粘質土
10　明灰黄橙色粘質土(灰・炭含)
11　暗灰色粘土(５～10㎝程の円礫少)
12　水道管埋土
13　赤褐色ﾅﾒﾗ層
14　灰白色～明黄褐色粘質土
15　明黄褐色粘質土
16　灰青色～灰青緑色粘質土

第41図　Ｔ１断面(1/60)



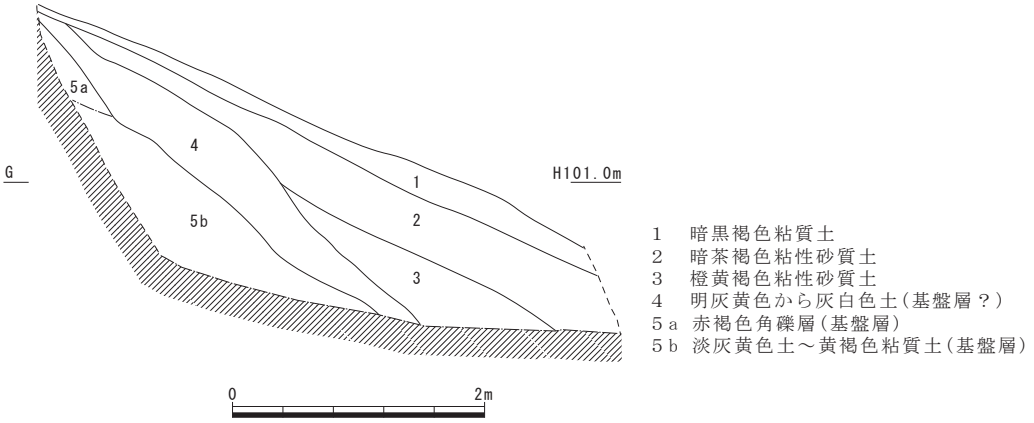
1　攪乱土
2　暗橙褐色土
3　灰黄緑色粘質土
4　黒色粘質土
5　暗褐色砂質土(円礫含)
6　円礫層
7　黒灰色粘質土
8　灰黄色粘質土(造成土)
9　茶褐色粘性砂質土
10　暗黒色粘質土(有機質含)

第42図　Ｔ２断面(1/60)

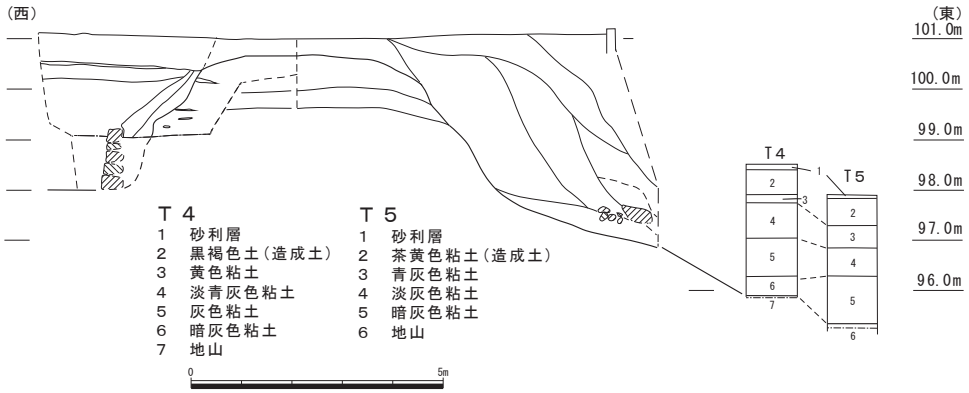
を並べ長さは４ｍであるが、これより西は軸がそろわないが不定形の石が３石並んでおり、さらにその西に長軸 50㎝ほどの石を据える。この石は高さが 15㎝と石段を構成する石より 20㎝ほど高い。この石については、やや元位置を離れた礎石の可能性も考えられる。昭和初期の写真を観察すると今回の調査区あたりに礎石や石列が存在し、その位置は本調査で検出した石列の位置と同一とみられた。なお、石列は断面観察（第 40 図Ａ－Ｂ断面）から溝状の掘り方を掘りその内に埋置されたと考える。石列上段から南に１ｍの地点で集石を検出した。集石は、掘り方はなく、検出レベルはＬ＝103.65 ｍで、上段石列よりわずかに高い。長軸 1.2 ｍ、短軸 1.1 ｍで、10 ～ 20c ｍ大の円礫で構成される。調査区断面の各層との関係は不明であるが７層掘り下げ後の基盤層上で検出したと思われる。調査時の所見によると中央がわずかにくぼむ。北門礎石の根石の可能性が考えられている。

４　トレンチ１～５（第 38・41 ～ 44 図）

Ｔ１は土橋とその東側の外堀にかけて設定したトレンチである。戦後の造成土（１層）、戦前の旧表土層（２層）が存在し、２層直下が基盤層であった。堀の底は確認できなかったが、土橋上面からの深さが 1.8 ｍ以上である。このトレンチで確認した土橋の法面角度は、下半部が約 50 度であるが、上半部は垂直に近く立ち上がる。トレンチ断面が土橋に対し斜めになっており、斜面下位は外堀法面に向かい、堀底は確認できなかった。１～７層までを近現代、８～ 11 層は近世の可能性があるが、土橋の拡幅ではなく自然の流土と考える。堀の堆積土中から丸瓦３点が出土しているものの、堀埋没の過程や時期は特定できなかった。



第43図　Ｔ３断面（1/60）



第44図　土橋・Ｔ４・５断面（1/60）

Ｔ２は、Ｔ１の北に設定し、Ｔ１と同じく土橋から東側の外堀部にかけてのトレンチである。東に接する平成２年度調査のＴ４とは、現地盤高で2.5ｍの比高差があり、Ｔ４が低い。土橋上面では基盤層上にＴ１ではみられなかった８・９層が存在する。９層からは古墳時代中期の須恵器が出土しており築城以前の旧表土層と考えられる。８層は、土橋に伴う盛土層と考えられる。土橋法面の角度は50～60度に達する。堀の深さは、９層上面を地表面と考えると3.7ｍである。

Ｔ３は、土橋の東側で外堀内側法面に設定したトレンチである。５層は基盤層、４層は基盤層ないしは内法面の化粧土と考えられており、その傾斜角度は約40度であった。堀底は確認できず、１～３層の堆積時期は不明である。遺物もみられなかった。

市道東側の外堀想定部分については、土橋東裾と切岸裾近くにＴ４・５を設定した。調査前状況は、東へと下がる地形をなしていたが、調査によって外堀の底部のレベルを確認したところ、Ｔ４・５とも堀の深さは現地盤から約２ｍであった。また、現地盤、基盤層ともＴ４よりＴ５が60㎝ほど低く、堀が東に向かって徐々に低くなること、市道西（土橋より西）の堀底と東の堀底のレベルとでは、約２ｍの差があり空堀である東側が深くなっていたことがわかった。また、堆積層はいずれも粘土であった。両トレンチとも遺物出土はみられなかった。

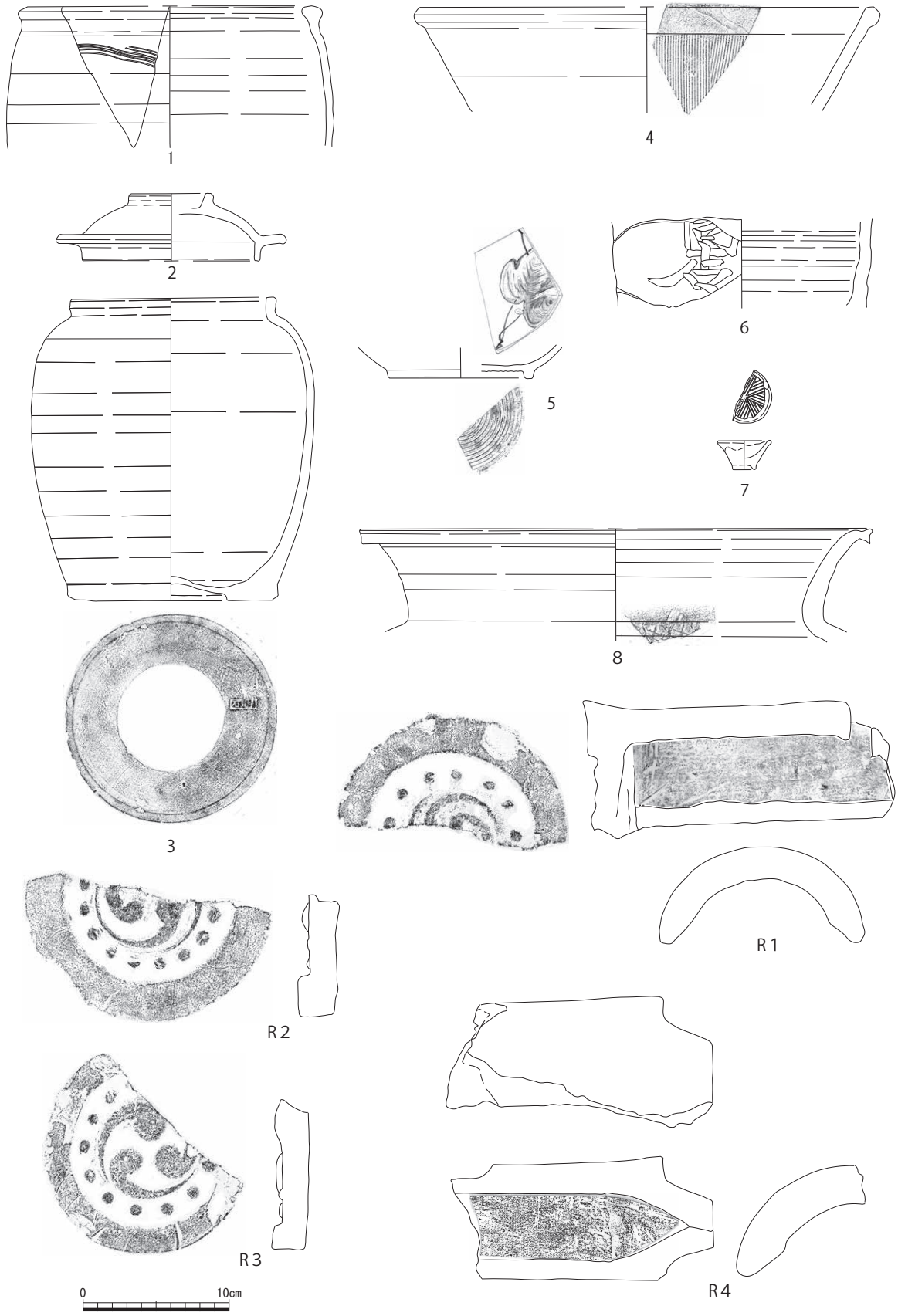
なお、土橋は本来の幅が９ｍ（５間）で（第38図）、明治期の堀の埋め立て後に市道として造成、拡幅されたようである。

５　出土遺物（第45図）

出土遺物には、陶磁器１～７、須恵器12、瓦Ｒ１～４がある。

１～４は、石見焼である。１は壺で、口縁部は内外に肥厚させた玉縁状をなす。頸部から肩部の張りは緩やかで、肩部には６条１単位の波状文が残る。体下半は、欠損する。内外面とも赤褐色の釉がかかるが、口縁端上面は無釉である。２は、壺の蓋である。輪状のつまみがつく蓋で体部と口縁部の境に幅広の鍔がつく。鈍赤褐色の釉は、外面のつまみ部から鍔部端にかけて施している。口径から、壺３とセットで使われていたと思われる。壺３は、口径が13.0㎝、器高が20.7㎝、底径は14.4㎝である。短く直立する口縁部の外面はわずかに平坦な面をなす。暗赤褐色の釉は、口縁端部上面と高台部外面を除く内外面に施す。肩は強く張り、筒状の体部をもつ。低部は削り出しの高台となす。底部外面の高台上に「石見１」の刻印がある。４は、擂鉢である。小片であるが推定口径が31.2㎝で、体内面には密で細いスリ目を放射状に付す。わずかに釉薬が残る。５は、磁器皿である。見込み部に蔦様の文様を描く。低部にはロクロから切り離した痕がのこり、高台から外底面は無釉である。６は、瓶ないし徳利の体部である。外面は灰白色、内面に黒褐色を呈し、藍色の釉薬で「商店」の文字を記す。中に酒を入れた、いわゆる通い徳利であろうか。７は、内面に放射状のスリ目を入れた陶器の小型擂鉢である。灰白色の胎土の口縁部に暗赤褐色の釉を施す。これらは、いずれも土橋上方の攪乱土中からの出土である。石見焼は鑑定の結果、１が明治時代後期、２が戦後、３は明治時代（19世紀後半～20世紀初）である。鑑定は受けていないが、小型擂鉢７も石見焼であろう。石見焼は遺跡出土としては県下初例であり、その流通経路が注目される。

８は、Ｔ２において土橋基盤層上の黒色土中から出土した。口径35㎝ほどの小型の須恵器甕で、口縁部から頸部にかけての破片である。色調は赤灰色を呈するが、焼成は良好である。胎土は、やや粗く白色砂粒を多く含む。口縁端部は下方に強くナデ、断面三角形状の突帯をつくり、口縁部の内外



第45図　出土遺物(1/4)

面はナデて仕上げる。わずかに残る体部の外面は格子目のタタキが、内面には、「キ」あるいは「十」の字状の当て具痕がみられる。この甕の時期は、津山城の時代を大きく遡り５世紀中葉から後半頃とみられる。出土した黒色土の由来は、築城以前の旧表土層と考えているが、今回の調査範囲内では古墳時代の遺構は確認できなかった。

瓦Ｒ１～４は、いずれも丸瓦で、色調は灰色である。Ｒ１は、右巻き巴の軒丸瓦で、胴部に釘穴をあける。瓦当の直径は推定で15.0㎝、珠文の数は13個とみられる。焼成は不良で調整を判別しにくいが、内面は粗いムシロ様痕が残り、その上に細板状の工具で押圧を加えた痕跡がみられる。Ｒ２は、右巻きの巴文軒丸瓦で、瓦当の径は推定で16.5㎝、珠文は16個とみられる。Ｒ３は、瓦当の直径が13.8㎝で、左巻き巴文軒丸瓦である。巴の頭は大きく、珠文は13個と思われる。Ｒ４は、凸面をヘラでナデ、凹面には布目痕とコビキＢ技法がみられる。軒丸瓦は津山城出土瓦のうちでも小型の部類であり、北門ないし周辺の櫓などに使用されていたと思われる。Ｒ１にみられる細板状の圧痕は、岡山城では６式の中段階から顕著になるとされる。つまりＲ１の時期は18世紀代に入り、Ｒ２・３はそれに後出すると考えている。

４点の瓦は、津山城に用いられたと考えられるが、その量は非常に少ない。

第３節　小結

本発掘調査では、津山城北地域から城内へと至る市道下に想定された北門土橋の検出と断面確認、及び土橋両側での外堀断面並びに切岸部断面の観察を行った。

北門土橋は、土橋を踏襲した市道の路面幅員が10ｍに対して、検出した土橋上面の幅は９ｍ（５間）であった。土橋は、直線的かつ真北を指向しつつ城外へと傾斜角約15度の下り勾配をなしていた。

土橋は、城内側では本丸から北に向かって下がる丘陵裾を削り出して成形されていたが、城外に近い土橋北側では基盤層の上に古墳時代の須恵器を含む旧表土が存在し、その上に盛土がなされていることを確認した。また、土橋を渡りきった城内側において、石列を二列及び北門の礎石とみられる石材並びに礎石の根石と考えられる集石を検出した。これらは、明治期や昭和初期の古写真及び現存する土塁との位置関係から北門に近接した石段の一部及び礎石と考えられる。北門は、津山城絵図類をみると土塁の北側に位置していることや石列の南側において検出した集石が北門東側の梁間を支える礎石の根石の可能性があることからその位置（第46図）を想定した。門の間口は土橋幅員と同様、５間である。ただし、石列や礎石とみられる石は戦後に行われた水道管敷設や市道工事によってわずかに動かされている可能性もある。

外堀は石垣を用いず土手であった。その深さは、２.0～2.6ｍほどで、堀底のレベルは、土橋西側（1区）で97.6ｍ、東側では95.9ｍ（Ｔ５）、95.3ｍ（Ｔ６）であり、西側の水堀より東側の空堀側が深いことが判明した。調査地周辺における外堀の規模は確定することができなかったが、周辺街路を参考に外堀の範囲を推定すると堀の推定幅は約25～30ｍほどであった。また、土橋西（水掘り）側下部の一部にのみ石積が遺存していた。この石積は、扁平な石を用いた小口積みで、城内の石垣とは大きく異なる。また、城下図･城絵図に描かれていないことから築造時期は明らかにはできないが、明治20年頃までに行われた外堀の埋立てが時期の下限で、水堀側土橋基部の洗掘防止のための石積と考えたい。

①は写真７，②は写真９撮影の方向
— — —　門と土塁の推定ライン

第46図　北門跡の位置(1/250)

写真７　津山城外堀跡調査前風景

写真８　津山城外堀跡調査後工事風景

写真９　津山城外堀跡調査地西の切岸断面

写真 10　津山城北東の竪堀と切岸

写真７は、北門跡（推定地）東側の土塁。この土塁は現存する。
写真８は、現在の城北公園北側の切岸部。横矢構造がよく残る。
写真９は、文化センター北入口の交差点付近を南から望む。昭和 62 年 10 月段階では、この写真右に切岸が残っていた。
写真 10 は、三枚橋西詰から粟積櫓を望む。
※　写真７～９は、津山市在住の方から御提供頂いた。

第５章　津山城搦手側城郭構造

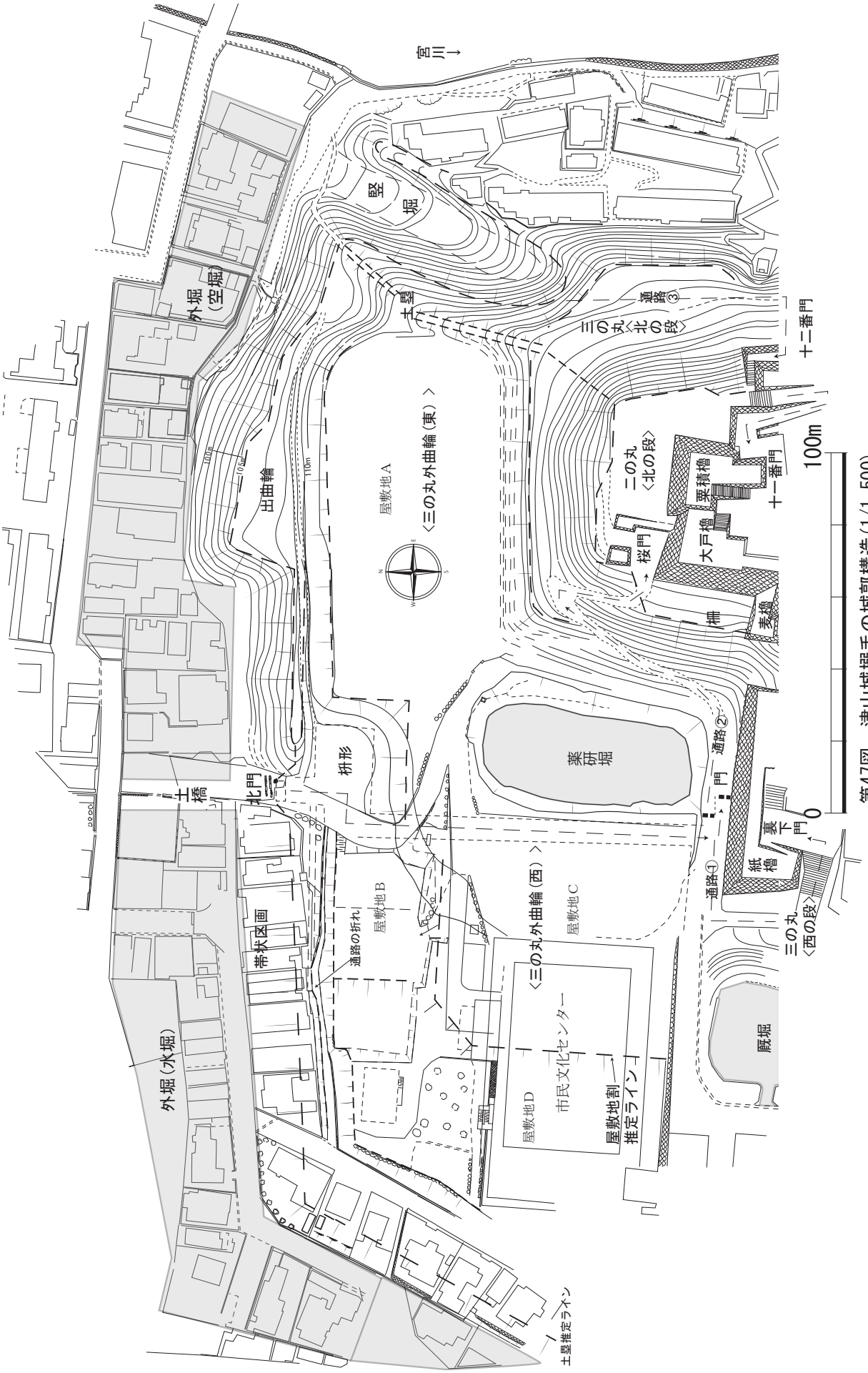
津山城は本丸を中心に二の丸・三の丸を階段状に配した輪郭式の平山城である。三の丸の外周は「山下」と呼ばれる城下町が形成され、その外側を外堀と土塁で囲う総構えをなしていた。大手に当たる城の南側は、本丸から三の丸下面まで高低差 26 m余りを石垣で覆うが、これは城下の南を東西方向に通る出雲街道やさらにその南に位置する吉井川をからみた視覚効果を狙ったものである。一方で二の丸北側下段や三の丸西側下段などは、石垣を用いず切岸にしていた。

本章では、発掘調査を実施した搦手側の城郭構造について、調査成果に加えて古写真・絵図類（註１）を参考に復元することにする。なお、本章において、三の丸とは薬研堀と厩堀の内側を指す。２つの堀の外側にあたり三の丸に接続する部分を三の丸外曲輪と呼称するが（第 47 図)、この曲輪（註２）の外側も切岸となっていた。

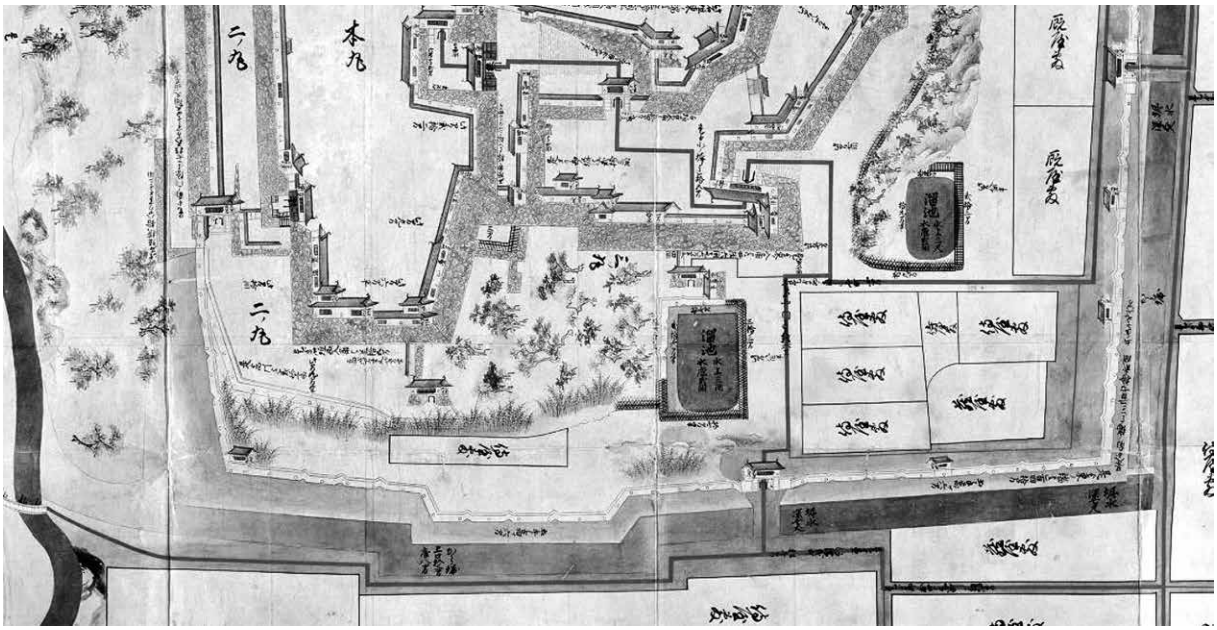
外堀・土塁　外堀は、今日わずかに街路にその痕跡をとどめるに過ぎない（註３)。土塁については、平成の初年まで残存していた外堀南西角付近で立会調査が行われているほか､北門東側（Ｐ 50 写真７）や竪堀の西側に現存（第 47 図）している。外堀と土塁位置は、現地割と立会により土塁基部の幅が約７ｍであったこと（註４）をもとに復元案（註４・５）が示されている。外堀には､南東角の宮川門、南側の大手筋の京橋門、西側の二階町門、田町門、作事門、北側の北門の六か所で城外とつながっており、京橋門以外は土橋であった。土橋と同様の機能を持つものとして、『美作国津山城絵図（以下、正保城絵図)』（註６）では、外堀の北西角に堀底を渡る土手が描かれており、土手の南側と北門土橋より東側を空堀と表記している（第 48 図)。現地形を観察すると外堀のうち北門土橋の西側は北から続く丘陵を切断して掘削されており､現地盤高が外堀を埋め立てた都市計画道路面のなかで最も高い。対して、外堀西側は谷部を掘削しており、北側堀とは堀底のレベルに高低差が生じたため水位の保持を目的に土手が設けられたと思われる。外堀西側に架かる三本の土橋も、津山城が南に向かって傾斜する段丘斜面に立地することから、水位調整に必要であったと思われる。

塀・柵　『正保城絵図』をみると、石垣や土塁上に塀、柵を建てている。このうち石垣上の塀には瓦を葺き、絵図の着色からも漆喰土塀であり、狭間の形が「○」・「□」・「△」に描かれる。一方で、外堀土塁・二の丸北の段・三の丸の塀には瓦が描かれておらず、狭間の形も「○」・「□」のみという描き分けがなされており興味深い。石垣上とは異なり土塁上は土塀ではなく板塀を立てたと考えられる（註７)。なお、三の丸西の段は狭長な帯曲輪となり、三の丸西の段はそこから厩堀までの間に柵を巡らせていた。この塀に関する描き分けは､『正保城絵図』以降の『津山絵図（個人蔵)』（註８）や『津山御城絵図（乙巳年御目付江被差出候控）』（註９）にもあてはまる。

門　『津山絵図（個人蔵)』によると、北門は櫓門で、梁間５間、桁行３間の規模であった。梁間５間は本調査で確認した土橋の幅９ｍ（５間）と一致する。外堀は北門の東側が空堀で、「カラ堀上口拾三間（約 23.4 ｍ)。堀底八間（約 14.4 ｍ)。土手の高さ六間（約 10.8 ｍ)」と注記がある。北門西の堀は水堀で､土橋西側で「一丈（約 3.03 ｍ)。土手の高さ六間（約 10.8 ｍ)､堀の西端で七尺（約 2.12 ｍ)」と記す。本調査Ｔ４における堀埋土上面の標高 97.9 ｍと北門東に残存する土塁天端の標高 108 ｍの比高差から、「堀底より６間」という記述は概ね正確といえる。また、北門を平面的に描いた絵



第47図　津山城搦手の城郭構造（1/1,500）



第 48 図　『美作国津山城絵図』にみる北門　※国立国会図書館デジタルアーカイブより

図では、南北１間分、東西３間分の礎石と考えられる「黒丸」が記されている（註 10）。

絵図に描かれる塀は、北門付近で北に折り曲げて北門の両側の塀に接続させている。門の内側は、右折れの枡形虎口状の空間がある。その空間は動線より西に広く拡張しており、一部の絵図では井戸が描かれている。この枡形部は地山を掘削して造られたと思われ、東西が 26 m程、南北は 19 m程の大きさである。東・南・北壁は石垣ではなく土壁であったが、『津山御城絵図（乙巳年御目付江被差出候控）』では、南・東・北壁上は板塀で囲われ西側は屋敷地Ｂ（第 47 図）の石垣が壁になっていた。

通路　堀外から北門に至る土橋は昇り勾配で、石段であったことが明治期の古写真で判明している（註 11）。枡形内を左に折れると上り勾配で石段となるが、京橋門や二階町門と異なり枡形の内側に一の門は置かず、石段の上は三の丸外曲輪である。本丸への通路は三通りの通路が存在する（第 47・48 図）。三の丸外曲輪西側屋敷地と薬研堀の間を通り正面にあたる紙櫓の石垣裾を「コ」の字に迂回させて裏下門の虎口へと至る通路①（第 48 図）は、裏下門の枡形西側にも厩堀を配して寄せ手側の進路を手狭にしたと思われる。この２つの堀は手薄な搦め手の防御に計画的に配置された森氏による築城時の縄張りであろう。紙櫓下を左に折れると、薬研堀側と本丸石垣側から食い違う二列の土塀とその間に門を設けた虎口（門）が存在し、その内が三の丸となる。三の丸から二の丸へは、切岸斜面を折れて、二の丸北の段北西角の桜門に至る通路②がある。元禄 10 年頃以降の絵図には、桜門からは大戸櫓の西を併行させ麦櫓へ向けて柵が描かれている。桜門は本丸石垣から土塀を北に出し、東西に２つの櫓台を置く櫓門で、外側に枡形空間を設ける。そこから本丸へは、十二番門を通り十一番門の虎口に至る。また、城の北東部分には門がないが、竪堀の底を通り三の丸の段に上がり、二の丸下の石垣沿いから十二番門を通る「Ｓ」字状の折れを経て、十一番門の枡形虎口から本丸に至る通路③が存在する。

北門から西側では、土塁と三の丸外曲輪屋敷地Ｂの石垣と土塀の間に沿い作事門の方へと抜ける通路が存在していた。この通路は古写真や地図から、昭和時代末期までは残っており、堀の北西角との中間あたりで鉤の手に折れている（第 47 図）。この通路と堀端との間には幅 18 m程の帯状区画が存在する。この帯状区画帯は、古写真や昭和 38 年撮影の写真（写真 11）をみると宅地に変貌を遂げて

いるが、外堀埋め立て面より一段高く、かつ屋敷地Ｂよりは一段低くてその間は切岸（Ｐ 50 写真９）になっていた。帯状区画帯は外堀西側も田町地区までの北半部にみられ、その東側を走る市道が土塁の内側に沿った城内通路の痕跡であろう。北門西の土塁ラインを北門の東に残る土塁線の延長線上を想定すると、土塁と堀端との間にはやや幅広の犬走りが存在したと考えられる。

三の丸外曲輪ほか　この区域の屋敷地は薬研堀を境に東西に分かれる。西側屋敷地は正保城絵図では６区画であったが、元禄10年頃以降の絵図では概ね３区画に分けて描かれている。（現地形、工事図面、絵図を当てはめて、第 48 図の屋敷地Ｂ・Ｃ・Ｄに復元）屋敷地Ｂ・Ｄ北半部は、昭和初期頃撮影の写真からも第 47 図に示すような西に向かって階段状の４区画となり、耕地に転用されていたようである。薬研堀より東は二の丸北の段、三の丸北の段が存在するが、二の丸裾には石垣はなく、切岸であった。三の丸は、二の丸の東・西・北に帯曲輪状の平坦面が廻らせるが、薬研堀から東側は傾斜地で曲輪としての造成がなされなかったようで、いくつかの絵図ではその斜面地で藪もしくは伐木された切株が描写されている。

切岸・竪堀　北門から宮川の間は、北門西側に比して遺構の残存状態が良好で、城の外郭線を空堀の肩部から比高差８ｍあまりの切岸（Ｐ 50 写真８）で備えている。この外郭線の中央辺りで北に出曲輪を突出させることで横矢構造をなし、空堀もこの外郭線に沿って直角に二回折れて宮川の手前に達する。正保の城絵図では、堀外堤上の路が宮川を渡る三枚橋が描かれているが、外堀は宮川には繋がず幅 15 ｍ程の土手を掘り残したようである。その部分には、粟積櫓の北東から下ろした竪堀が向かっている。この竪堀は、近代以降は畑地として利用されており、旧状は詳らかではないが、北端の上端幅が約 25 ｍで空堀部の幅とほぼ等しく、空堀に接続していたと考えられる（註 12）。北門から東の土塁は、出曲輪の西で北へと直角に折れ、出曲輪の外郭線に沿う部分は今も土塁が残存している。絵図によると土塁上の土塀は二の丸北の段北西角で二の丸を囲う土塀と繋がっていたようである。北門西側の切岸の裾は先の述べた通路（第 47 図）の南に想定できることから、北門の東西で曲輪の外郭

写真 11　津山城を北から望む（岡山県立記録資料館蔵：昭和 38 年撮影）

線を食い違わせていたと思われる。

おわりに

津山城は外堀の内側に土塁を巡らせ、その上は板塀を建てていた。外堀の北東部では、外堀と合流する竪堀が存在する。また、城内は本丸の南側を除くと二の丸、三の丸とも建物が建たないほど狭長な帯曲輪状をなし、外縁は切岸と板塀（柵）で防御していた。そして、天守へと至る通路は幾重にも折れ、枡形虎口を組み合わせている。このように津山城は、非常に実戦的かつ中世山城の要素を色濃く残した城郭といえるのである。

註

1　絵図・古写真とも、特に断らない限り津山市教育委員会『津山城資料編』2000、津山市教育委員会『津山城資料編Ⅱ』2001、津山市教育委員会『津山城資料編解説』2002 を参考にした。

2　正保城絵図では、侍屋敷や厩屋敷の表記がある。森家、松平家時代を通じて、藩主下屋敷や一門・重臣屋敷が置かれていたようである。屋敷地Ｃは、享保７（1722）年頃に設けられた藩主の御下屋敷があった。

3　津山市史編さん委員会『津山市史 第７巻 現代Ⅱ－大正･昭和時代－』1985 によると､明治 20 年頃には堀は埋め立てられ、荒地となっていたようである。

4　中山俊紀「津山城今昔」『年報 津山弥生の里第３号』津山弥生の里文化財センター 1996

5　津山市市史編纂委員会「津山城跡」『新修津山市史 資料編「考古」』2020

6　正保２年頃に描かれた、いわゆる正保城絵図である。『津山城資料編』（Ｐ 13）にも収載。

7　板塀であれば、発掘調査において瓦の出土量が非常に少なかったことも理解できる。

8　津山市教育委員会「津山絵図（個人蔵）」『津山城資料編』（Ｐ 18 － 19）

9　註９文献「津山御城絵図」（乙巳年御目付江被差出候控）『津山城資料編』（Ｐ 28 － 29）

10　「津山城郭之図」『津山城資料編Ⅱ』（Ｐ 34）は、18 世紀末頃の様子を描いた明治時代以降の写しとされるが、北門の表現から明治初年に行われた北門撤去後の礎石を描いたと考えられる。

11　津山市教育委員会『津山城資料編Ⅱ』（Ｐ 36 下）。石段は直角の折れではなく枡形空間から右上方に上がるようにみえる。これは註９文献絵図と合致するが、元禄 10 年頃までに改築がなされたと考える。昭和初期頃の写真には、北門辺りに２条？の石列が見える（津山市教委の御厚意により実見）。昭和初期には､石段が大方取り除かれ､発掘調査前の状況に近かったと思われる。

12　註８・９の絵図のほか、竪堀を外堀に接続させて描く絵図は多い。

参考文献

津山市教育委員会『史跡津山城跡』保存整備事業報告書Ⅰ 2007
津山市教育委員会『史跡津山城跡』保存整備事業報告書Ⅱ 津山市埋蔵文化財発掘調査報告書 86 集 2016
行田裕美「津山城今昔⑧～堀と北門～」『年報 津山弥生の里 第 11 号』津山弥生の里文化財センター 2004
乾　貴子「津山城三の丸「下御屋敷」について」『年報 津山弥生の里 第 26 号』津山弥生の里文化財センター 2019
津山市『津山城百聞録』2009

遺物一覧表

・計測値の（　）は、残存 1/8 以下の破片で、推定値を示す。

・色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』及び水田泰弘監修『色の手帳』小学館を使用した。

矢知遺跡

土器類

掲載番号	地区名	掲載遺構名	出土場所・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調		残存状況	備考
						口径	底径	器高	内面	外面		
1	2 区	竪穴 1	p168	弥生土器	高杯		11.5		橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	脚部 1/7	
2	1 区	1 区柱穴	p6	土師器	皿	7.5	6.0	1.3	鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	口縁部 3/4	
3	1 区	1 区柱穴	p6	土師器	皿	7.3	6.1	1.4	鈍黄橙色 7.5YR6/4	鈍黄橙色 7.5YR6/4	口縁部 5/4	
4	1 区	1 区柱穴	p6	土師器	皿	8.3	6.0	1.1	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	口縁部 1/8	
5	1 区	1 区柱穴	p6	土師器	皿	7.6	6.0	1.3	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	1/4	
6	1 区	1 区柱穴	p6	土師器	皿	7.6	6.0	1.3	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/5	
7	1 区	1 区柱穴	p27	土師器	皿	7.3	5.8	1.6	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	完形品	
8	1 区	1 区柱穴	p27	土師器	皿	7.3	6.0	1.3	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	完形品	
9	1 区	1 区柱穴	p27	土師器	皿	7.8	6.3	1.4	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	口縁部 4/5	
10	1 区	1 区柱穴	p27	土師器	皿	7.7	5.8	1.3	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	完形品	
11	1 区	1 区柱穴	p27	土師器	皿	7.3	5.9	1.3	明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/6	口縁部 1/3	
12	1 区	1 区柱穴	p43	土師器	皿	7.0	5.4	0.9	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	1/6	
13	1 区	1 区柱穴	p32	土師器	皿	8.0	6.3	1.0	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/4	
14	1 区	1 区柱穴	p34	土師器	皿		6.0		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	底部 1/3 強	
15	1 区	1 区柱穴	p18	土師器	杯		(7.2)		橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	小破片	
16	1 区	1 区柱穴	p8	土師器	杯		(8.0)		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	底部 1/6	
17	1 区	1 区柱穴	p34	土師器	杯		6.0		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	底部 1/3 強	
18	1 区	1 区柱穴	p6	土師器	杯		6.0	(0.7)	灰黄褐色 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2	底部 1/6	
19	1 区	1 区柱穴	p18	土師器	杯				鈍黄橙色 10YR7/4	鈍黄橙色 10YR7/4	小破片	
20	1 区	1 区柱穴	p6	土師器	杯	12.9	8.7		浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	1/4	
21	1 区	1 区柱穴	p6	土師器	杯		9.0		浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	底部 1/4	
22	1 区	1 区柱穴	p43	土師器	杯	9.8	5.5	5.1	鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	1/5	
23	1 区	1 区柱穴	p16	土師器	椀		高台 4.4		浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	高台 1/4	
24	1 区	1 区柱穴	p27	瓦質土器	鍋	(32.0)			鈍黄橙色 10YR6/3	鈍黄橙色 10YR6/3	小破片	
25	1 区	1 区柱穴	p8	須恵器	皿		5.0		灰色 N6/	灰色 N6/	底部 1/4	
26	1 区	1 区柱穴	p5	須恵器	皿		6.0		灰色 N4/	灰色 N5/	底部 1/4	
27	2 区	2 区柱穴	p103	土師器	皿	6.5	5.7	1.1	鈍褐色 7.5YR5/3	鈍褐色 7.5YR5/3	2/3	
28	2 区	2 区柱穴	p116	土師器	皿	7.9	5.8	1.4	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	完形品	
29	2 区	2 区柱穴	p141	土師器	皿	7.4	5.8	1.9	鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	1/2	
30	2 区	2 区柱穴	p34	土師器	皿	8.0	6.0	1.3	灰色 5Y5/1	橙色 5YR6/6	1/3	
31	2 区	2 区柱穴	p94	土師器	皿	8.0	6.2	1.3	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	口縁部 1/3	
32	2 区	2 区柱穴	p34	土師器	皿	7.9	6.0	1.4	鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	1/4	
33	2 区	2 区柱穴	p13	土師器	皿	11.6	7.6	2.8	鈍褐色 7.5YR6/3	鈍褐色 7.5YR6/3	底部 1/3	
34	2 区	2 区柱穴	p4	土師器	皿	(11.9)			鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	1/10	
35	2 区	2 区柱穴	p18	土師器	椀	9.8			鈍黄橙色 10YR7/4	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部 1/5	
36	2 区	2 区柱穴	p156	土師器	椀	9.9			鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	1/5	
37	2 区	2 区柱穴	p27	土師器	椀		高台 6.0		鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	高台 1/6	
38	2 区	2 区柱穴	p48	瓦質土器	鍋				灰色 5Y5/1	灰色 5Y5/1	小破片	
39	2 区	2 区柱穴	p17	土師器	鍋	(24.4)			鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	小破片	
40	2 区	2 区柱穴	p4	土師器	鍋	32.6	胴部 29.8		橙色 7.5YR7/6	鈍橙色 7.5YR6/4	口縁部 1/7	
41	2 区	2 区柱穴	p23	須恵器	皿		6.0		灰色 N5/	灰色 N5/	底部 1/6	
42	2 区	2 区柱穴	p38	須恵器	皿		6.0		灰色 N6/	灰色 N6/	底部 1/6	
43	2 区	2 区柱穴	p113	須恵器	皿	8.8	6.6	2.1	灰色 N5/	灰色 N5/	1/6	
44	2 区	2 区柱穴	p113	須恵器	皿	(7.7)	(5.8)	1.1	暗灰黄色 2.5Y5/2	暗灰黄色 2.5Y5/2	口縁部 1/7	
45	2 区	2 区柱穴	p94	東播系	鉢？				灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
46	2 区	2 区柱穴	p88	瀬戸美濃	椀				素地：亜麻色 10YR8/2	釉薬：浅黄色 5Y7/4	口縁部破片	
47	2 区	2 区柱穴	p22	瀬戸美濃	四耳壺				素地：灰白色 2.5Y7/1	釉薬：オリーブ黄色 7.5Y6/3	把手 1/2 残	
48	2 区	2 区柱穴	p7	備前系	擂鉢				灰色 5Y6/1	灰色 5Y6/1	破片	
49	2 区	2 区柱穴	p4	備前系	擂鉢		10.0		灰白色 N7/	灰白色 N7/	底部 1/8	
50	1 区	土坑 3	土坑 5	土師器	皿	7.9	6.8	1.4	鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	口縁部 3/4	
51	1 区	土坑 4	土坑 1	白磁	端反皿	(12.0)			胡粉色 2.5Y9.2/0.5	象牙色 2.5Y8.5/1.5	口縁部 1/8	
52	1 区	土坑 5 ？	土坑墓？	土師器	杯				橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	底部 1/6	
53	1 区	土坑 5 ？	土坑墓？	土師器	椀				灰黄色 2.5Y6/2	灰黄色 2.5Y6/2	小破片	
54	1 区	土坑 5 ？	土坑墓？	土師器	椀		高台 5.0		灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	高台 1/7	
55	1 区	土坑 5 ？	土坑墓？	土師器	皿	13.3	9.8		鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	小破片	
56	1 区	土坑 5	土坑墓 -1	土師器	皿	7.4	5.8	1.3	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	完形品	
57	1 区	土坑 5	土坑墓 -1	土師器	皿	7.4	5.9	1.1	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	ほぼ完形	
58	1 区	土坑 5	土坑墓 -1	土師器	皿	8.0	6.4	1.3	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	口縁部 1/4	
59	1 区	土坑 5	土坑墓 -1	土師器	鍋	29.8			鈍黄橙色 10YR7/4	鈍橙色 7.5YR6/4	口縁部 1/7	
60	1 区	土坑 5	土坑墓 -1	須恵器	擂鉢	28.8			灰色 N5/	灰色 N5/	口縁部 1/8	
61	1 区	土坑 5	土坑墓 -1	須恵器	擂鉢	33.6			灰色 N6/	灰色 N5/	小破片	
62	1 区	土坑 7	土坑 4	土師器	鍋	33.4			鈍赤褐色 5YR5/3	橙色 2.5YR6/8	口縁部 1/3	
63	1 区	土坑 7	土坑 4	土師器	鍋	29.6			橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	口縁部 1/3	
64	1 区	溝 1	溝 1	土師器	皿		7.0		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	底部 1/3	
65	1 区	溝 1	溝 1	土師器	皿		8.8		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	底部 1/5	
66	1 区	溝 1	溝 1	土師器	皿	12.4	7.7	3.1	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/3	
67	1 区	溝 1	溝 1	土師器	皿	12.8	8.9	2.8	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	1/4	
68	1 区	溝 1	溝 1	土師器	皿	7.6	6.0	1.3	鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	底部 1/5	
69	1 区	溝 1	溝 1	土師器	椀				灰白色 2.5Y7/1	灰白色 2.5Y7/1	小破片	
70	1 区	溝 1	溝 1	土師器	椀	11.8			鈍褐色 7.5YR6/3	鈍褐色 7.5YR6/3	1/5	
71	1 区	溝 1	溝 1	土師器	椀	11.2			鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/6	
72	1 区	溝 1	溝 1	土師器	椀		高台 5.4		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	高台 1/4	

掲載番号	地区名	掲載遺構名	出土場所・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調		残存状況	備考
						口径	底径	器高	内面	外面		
73	1 区	溝 1	溝 1	須恵器	擂鉢		14.0		灰色 N6/	灰色 N6/	底部 1/5	
74	2 区	2 区溝	西端溝	土師器	皿		5.6		橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	底部 1/2	
75	2 区	2 区溝	西端溝	須恵器	皿		5.0		灰色 N6/	灰色 N6/	底部 1/4	
76	2 区	2 区溝	西端溝	備前	椀	(10.4)			鈍赤褐色 2.5YR5/4	鈍赤褐色 2.5YR5/4	口縁部 1/9	15C 後半
77	2 区	2 区溝	西端溝	須恵器	椀		高台 5.9		灰色 N5/	灰色 N5/	高台 1/5	
78	2 区	2 区溝	西端溝	備前	壺		5.8		灰色 N5/	灰色 N5/	底部 1/6	15C ～ 16C
79	2 区	2 区溝	西端溝	備前	小壺？		(4.4)		赤褐色 10R5/4	鈍赤褐色 7.5R4/3	腰部 1/4	16C 末～ 17C 初
80	2 区	2 区溝	西端溝	肥前陶器	碗	(7.9)			素地：浅黄橙色 10YR8/4	釉薬：透明	口縁部 1/4	京焼系
81	2 区	2 区溝	西端溝	勝間田	甕				灰色 N5/	灰色 N5/	小破片	
82	2 区	2 区溝	近世溝？	備前	水差？		15.0		灰褐色 7.5YR6/2	灰赤色 2.5YR4/2	底部 1/8	16C 末～ 17C 初
83	2 区	2 区溝	近世溝？	備前	壺		10.0		灰色 N5/	灰色 N6/	1/6	17C ？江戸
84	2 区	2 区溝	近世溝？	備前	擂鉢	(27.8)			橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	小破片	15C
85	2 区	2 区溝	近世溝？	備前	擂鉢	(31.0)			黄灰色 2.5Y5/1	黄灰色 2.5Y5/1	小破片	14C 後半～ 15C 初
86	2 区	2 区溝	近世溝？	備前	擂鉢		(11.0)		鈍黄橙色 10YR7/4	鈍黄橙色 10YR7/4	底部 1/2	
87	2 区	2 区溝	近世溝？	備前	擂鉢	31.4			赤色 10R5/6	鈍赤褐色 2.5YR5/3	小破片	15C 末から 16C 初
88	2 区	2 区溝	近世溝？	須恵器	鉢		(20.8)		灰色 7.5Y6/1	灰色 N7/	小破片	内面ツルツル
89	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	7.6	6.0	1.3	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/3	
90	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	7.4	5.4	1.0	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/4	
91	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	7.6	5.5	1.6	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	完形品	糸切り底
92	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	6.6	5.6	1.3	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	1/2	
93	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	8.4	6.9	1.2	鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	1/3	
94	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	7.9	6.2	1.3	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/7	
95	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	8.4	7.0	1.4	鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	1/5	
96	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	8.8	7.0	1.4	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	1/8	
97	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	7.8	6.1	1.1	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	1/4	
98	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	8.1	6.0	1.1	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	1/6	
99	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	皿	12.5	9.0		鈍黄橙色 10YR6/3	鈍黄橙色 10YR6/3	底部 1/6	
100	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	杯		8.0		橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	底部 1/4	
101	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	杯		7.4		鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	底部 1/5	
102	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	椀	10.9			浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	1/4	
103	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	椀		高台 6.0		灰白色 2.5YR8/1	灰白色 2.5YR8/1	高台 1/2	
104	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	椀		高台 5.3		灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	高台のみ	
105	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	焙烙	(39.6)			浅黄色 2.5Y7/3	黒褐色 10YR3/1	小破片	格子叩き
106	1 区	1 区包含層上層	包上層	瓦質土器	鍋	29.7			灰白色 N7/	黄灰色 2.5Y6/1	小破片	
107	1 区	1 区包含層上層	包上層	瓦質土器	羽釜	(30.8)			灰色 5Y5/1	灰色 5Y5/1	小破片	
108	1 区	1 区包含層上層	包上層	瓦質土器	鍋				灰白色 2.5Y7/1	灰白色 2.5Y7/1	小破片	
109	1 区	1 区包含層上層	包上層	瓦器	椀	15.5			灰色 N5/	灰色 N5/	口縁部 1/8	
110	1 区	1 区包含層上層	包上層	青白磁	合子	(8.2)		(1.5)	生成色 10YR9/1	秘色 2B8.5/2	口縁部 1/9	
111	1 区	1 区包含層上層	包上層	青白磁	合子			(1.5)	生成色 10YR9/1	秘色 2B8.5/2	口縁部破片	
112	1 区	1 区包含層上層	包上層	須恵器	鉢				灰白色 2.5Y7/1	灰白色 2.5Y7/1	口縁部破片	
113	1 区	1 区包含層上層	包上層	東播系	鉢				灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
114	1 区	1 区包含層上層	包上層	東播系	鉢				灰白色 2.5Y7/1	灰白色 2.5Y7/1	小破片	捏ね鉢？
115	1 区	1 区包含層上層	包上層	須恵器	椀				灰色 N6/	灰色 N6/	底部 1/3	糸切り底
116	1 区	1 区包含層上層	包上層	須恵器	鉢		12.0		鈍黄橙色 10YR7/2	灰白色 2.5Y8/1	底部 1/6	
117	1 区	1 区包含層上層	包上層	備前	甕				灰褐色 7.5YR6/2	灰褐色 7.5YR4/2	小破片	
118	1 区	1 区包含層上層	包上層	備前系	擂鉢				灰色 N6/	灰色 N6/	口縁部破片	口縁部歪み
119	1 区	1 区包含層上層	包上層	陶器？	壺	13.2			鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	小破片	
120	1 区	1 区包含層上層	包上層	須恵器	杯身				灰色 N5/	灰色 N5/	小破片	
121	1 区	1 区包含層上層	包上層	土師器	甕	14.8			鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	口縁部 1/6	
122	1 区	1 区包含層上層	包上層	弥生土器	壺	(11.1)			鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	口縁部 1/8	
123	1 区	1 区包含層上層	包上層	弥生土器	甕				鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	小破片	
124	1 区	1 区包含層上層	包上層	弥生土器	甕				鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	小破片	
125	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿	7.1	5.1	1.2	鈍橙色 7.5YR7/4	橙色 5YR7/6	1/4	糸切り底
126	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿	7.8	6.3	1.1	鈍黄橙色 10YR7/4	鈍黄橙色 10YR7/4	2/3	
127	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿	7.2	6.0	1.3	鈍黄橙色 10YR7/4	鈍黄橙色 10YR7/4	口縁部 1/8	糸切り底
128	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿	7.5	6.0	1.0	鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	1/3	
129	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿	8.7	6.2	1.8	鈍褐色 7.5YR6/3	鈍褐色 7.5YR6/3	口縁部 1/4	
130	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿		6.0		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/4	
131	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿	8.1	6.8	1.0	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	1/5	
132	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿	12.9	9.0	2.6	鈍橙色 7.5YR7/3	鈍橙色 7.5YR7/3	口縁部 1/6	
133	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	皿	11.8	8.0		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/10	
134	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	碗	13.9	6.0	4.5	灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	4/5	
135	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	椀		高台 4.0		浅黄橙色 7.5YR8/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/5	
136	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	椀		高台 5.0		灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y8/1	高台 1/4	
137	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	椀		高台 4.2		浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	高台のみ	
138	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	托	(8.8)		2.7	鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	1/5	
139	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	托	7.2	5.8		鈍橙色 7.5YR6/4	鈍橙色 7.5YR6/4	1/6	
140	1 区	1 区包含層下層	包下層	瓦質土器	鍋				褐灰色 10YR5/1	褐灰色 10YR5/1	小破片	
141	1 区	1 区包含層下層	包下層	瓦質土器	鍋				灰色 N4/	灰色 N4/	小破片	
142	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	鍋				橙色 7.5YR7/6	鈍橙色 7.5YR6/4	小破片	
143	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	鍋				橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	小破片	
144	1 区	1 区包含層下層	包下層	須恵器	椀	14.8			灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
145	1 区	1 区包含層下層	包下層	須恵器	椀		6.8		灰色 N6/	灰色 N6/	底部 1/4	
146	1 区	1 区包含層下層	包下層	須恵器	皿	(13.6)	(13.0)		灰白色 5Y8/1	灰白色 5Y8/1	1/15	
147	1 区	1 区包含層下層	包下層	須恵器	杯		高台 6.4		灰色 N5/	灰色 N5/	高台 1/8	
148	1 区	1 区包含層下層	包下層	須恵器	椀				黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y6/1	口縁部破片	重焼き痕
149	1 区	1 区包含層下層	包下層	須恵器	鉢				灰色 N6/	灰色 N6/	口縁部破片	
150	1 区	1 区包含層下層	包下層	青磁	碗		4.8		生成色 10YR9/1	深川鼠色 10GY7/1.5	底部 1/4	
151	1 区	1 区包含層下層	包下層	白磁	碗				胡粉色 2.5Y9.2/0.5	砂色 2.5Y7.5/2	口縁部破片	
152	1 区	1 区包含層下層	包下層	瀬戸	袋物？				生成色 10YR9/1	鶯茶色 8.5Y5.5/3	肩部？片	
153	1 区	1 区包含層下層	包下層	青白磁	合子				生成色 10YR9/1	秘色 2B8.5/2	破片	
154	1 区	1 区包含層下層	包下層	土師器	甕	15.4			明褐色 7.5YR5/6	明褐色 7.5YR5/6	小破片	
155	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	壺				橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	小破片	
156	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	壺				橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	小破片	
157	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	甕				橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	小破片	

掲載番号	地区名	掲載遺構名	出土場所・土層名	種別	器種	計測値（cm）			色調		残存状況	備考
						口径	底径	器高	内面	外面		
158	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	甕				橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	小破片	
159	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	甕	(9.5)			鈍褐色 7.5YR5/4	鈍黒褐色 10YR3/1	1/10	
160	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	底部		7.0		赤褐色 5YR4/6	赤褐色 5YR4/6	底部 1/6	
161	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	底部				浅黄橙色 10YR8/3	橙色 5YR6/6	底部 3/4	
162	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	高杯		10.6		鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR6/4	脚部 1/9	
163	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	高杯		10.7		明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/6	脚部 1/10	
164	1 区	1 区包含層下層	包下層	弥生土器	高杯				明褐色 7.5YR5/6	明褐色 7.5YR5/6	小破片	
165	1 区	1 区包含層他	包含層	土師器	皿	7.8	6.3	1.3	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/4	
166	1 区	1 区包含層他	中世包	土師器	皿	9.0	7.3	1.5	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	口縁部 1/6	
167	1 区	1 区包含層他	排土中	土師器	皿	7.0	5.5	1.4	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	口縁部 4/5	
168	1 区	1 区包含層他	排土中	土師器	椀		高台 5.0		浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	高台 1/5	
169	1 区	1 区包含層他	排土中	土師器	椀		高台 5.4		浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	高台 1/4	
170	1 区	1 区包含層他	東端部	土師器	椀		高台 5.1		灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	底部 1/2	
171	1 区	1 区包含層他	東端部	瓦器	椀		高台 4.8		灰色 N4/	灰色 N4/	高台 1/8	
172	1 区	1 区包含層他	包含層	瓦器	椀				灰色 N5/	灰色 N5/	体部 1/6	
173	1 区	1 区包含層他	排土中	土師器	鍋				灰色 N5/	鈍黄褐色 10YR5/3	小破片	
174	1 区	1 区包含層他	排土中	瓦質土器	羽釜				灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y7/1	小破片	
175	1 区	1 区包含層他	包含層	須恵器	椀	15.8			灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y8/1	小破片	
176	1 区	1 区包含層他	排土中	須恵器	椀	(17.0)			灰白色 N7/	灰白色 N7/	小破片	
177	1 区	1 区包含層他	排土中	須恵器	椀		6.0		灰色 N6/	灰色 N6/	底部 1/8	
178	1 区	1 区包含層他	p6	備前系	擂鉢				灰色 N5/	灰色 N5/	小破片	
179	1 区	1 区包含層他	排土中	須恵器	鉢				灰白色 2.5Y7/1	灰白色 2.5Y7/1	小破片	
180	1 区	1 区包含層他	包含層	須恵器	鉢				灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
181	1 区	1 区包含層他	包含層	東播系	鉢				灰白色 5Y8/1	灰白色 5Y8/1	小破片	
182	1 区	1 区包含層他	包含層	東播系	鉢				黄灰色 2.5Y6/1	灰色 N5/	口縁部破片	条線が残る
183	1 区	1 区包含層他	排土中	東播系	捏鉢				灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
184	1 区	1 区包含層他	排土中	備前	擂鉢				灰赤色 2.5YR4/2	灰赤色 2.5YR4/2	小破片	南北朝～室町
185	1 区	1 区包含層他	排土中	備前系	擂鉢				灰色 N5/	灰色 N5/	小破片	15C
186	1 区	1 区包含層他	包含層	備前	甕	(24.8)			灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y7/1	小破片	鎌倉
187	1 区	1 区包含層他	排土中	青花	碗				胡粉色 2.5Y9.2/0.5	秘色 2B8.5/2	口縁部破片	
188	1 区	1 区包含層他	包下層	青磁	皿		(2.2)		砂色 2.5Y7.5/2	灰汁色 2.5Y6/2	底部 1/7	
189	1 区	1 区包含層他	東端部	製塩土器					灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	小破片	
190	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	皿	9.9	7.0	1.5	鈍橙色 7/5YR7/4	鈍橙色 7/5YR7/4	1/2	
191	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	皿	9.4	6.8	1.6	鈍黄橙色 10YR7/3	鈍黄橙色 10YR7/3	口縁部 1/4	
192	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	皿	9.2	7.0	1.3	鈍橙色 7.5YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/6	
193	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	皿	7.6	5.6	1.3	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	1/3	
194	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	皿	6.8	5.4	1.0	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	1/3	
195	1 区	2 区包含層	土坑 1	土師器	皿	8.2	6.8	1.4	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	口縁部 4/5	
196	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	杯				浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	底部 1/5	
197	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	杯		8.0		橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	底部 1/6	
198	2 区	2 区包含層	A	土師器	椀				浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	高台のみ	
199	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	椀				灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	小破片	
200	2 区	2 区包含層	包含層	土師器	鍋				灰白色 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	小破片	
201	2 区	2 区包含層	包含層	瓦質土器	羽釜				鈍黄橙色 10YR7/3	灰黄褐色 10YR5/2	小破片	
202	2 区	2 区包含層	中世包	瓦質土器	羽釜	(27.3)			灰白色 2.5Y7/1	黄灰色 2.5Y6/1	小破片	
203	2 区	2 区包含層	中世包	瓦質土器	羽釜	(22.4)			灰色 N4/	灰色 N4/	小破片	
204	2 区	2 区包含層	包含層	瓦質土器	羽釜	(23.7)			黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y5/1	小破片	
205	2 区	2 区包含層	包含層	瓦質土器	羽釜	(29.3)			灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
206	2 区	2 区包含層	包含層	須恵器	椀		7.0		灰白色 10YR8/1	灰白色 10YR8/1	杯部 1/6	
207	2 区	2 区包含層	包含層	須恵器	椀				灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
208	2 区	2 区包含層	包含層	須恵器	椀				灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
209	2 区	2 区包含層	包含層	須恵器	皿	6.8	4.0	1.3	灰色 5Y6/1	灰色 5Y6/1	1/3	
210	2 区	2 区包含層	包含層	青磁	碗				素地：灰色 5Y6/1	釉薬：灰オリーブ色 7.5Y5/2	口縁部破片	連弁文
211	2 区	2 区包含層	包含層	白磁	皿				素地：灰白色 5Y8/1	釉薬：灰白色 2.5GY8/1	口縁部破片	口禿げ
212	2 区	2 区包含層	包含層	青白磁	合子		4.2		素地：胡粉色 2.5Y9.2/0.5	釉薬：灰白色 2.5GY8/1	底部 1/7 程	
213	2 区	2 区包含層	包含層	瀬戸	碗				素地：鈍橙色 7.5YR7/3	釉薬：灰白色 7.5Y7/2	口縁部破片	
214	2 区	2 区包含層	排土	瀬戸	皿	10.6	6.4	2.1	素地：浅黄橙色 10YR8/4	釉薬：オリーブ黄色 7.5Y6/3	口縁部 1/4	
215	2 区	2 区包含層	包含層	瀬戸	鉢				素地：鈍橙色 7.5YR6/4	釉薬：オリーブ黄色 5Y6/4	胴部片	
216	2 区	2 区包含層	包含層	備前系	擂鉢				灰黄褐色 10YR4/2	灰色 N5/	口縁部破片	鎌倉末～南北朝
217	2 区	2 区包含層	包含層	備前系	擂鉢				灰色 N6/	灰色 N6/	小破片	
218	2 区	2 区包含層	中世包	備前	擂鉢	(31.0)			灰赤色 10R5/2	灰赤色 10R5/2	小破片	15C 末から 16C 初
219	2 区	2 区包含層	中世包	備前	擂鉢	(30.8)			鈍赤褐色 2.5YR5/3	鈍赤褐色 2.5YR5/3	小破片	慶長
220	2 区	2 区包含層	中世包	備前	擂鉢	(36.6)			鈍橙色 5YR6/4	鈍橙色 5YR6/4	小破片	塗土・火襷。17C 前半
221	2 区	2 区包含層	中世包	備前	水屋甕	(35.4)			灰赤色 2.5YR4/2	灰赤色 2.5YR4/2	小破片	

石器

掲載番号	出土遺構名	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	P150	石鏃	31.02	13.96	4.90	1.37	サヌカイト	完形品に近い	摩滅している

土製品

実測番号	遺構名	器種	計測値（mm）				重量（g）	色調	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径				
C1	包含層下層	土錘	(32.5)	12.5		3.99 ～ 4.14	4.07	にぶい黄橙 10YR7/3	約 1/2 程	少し黒斑あり
C2	包含層下層	土錘	(33.2)	10.1		4.24 ～ 5.64	2.57	にぶい黄橙 10YR7/3	約 1/2 程	黒斑あり
C3	包含層上面	土錘	46.6	14.0		3.80 ～ 4.22	7.01	橙 5YR7/6	少し欠損がみられるが完形品	黒斑あり

岡山城内堀跡

掲載番号	種別	器種	計測値（cm）			色調		状態	時期	備考
			口径	底径	器高	内面	外面			
1	肥前陶器	皿	13.5	(4.7)	3.9	露胎：鈍赤褐色 5YR5/4	灰白色 5Y7/2	1/2	17 世紀初頭	
2	肥前陶器	皿	12.0	5.6	3.2	灰色 5Y5/1	灰色 5Y5/1	完形	17 世紀第Ⅱ四半期	砂目痕
3	肥前陶器	皿	11.2	4.3	4.0	暗褐色 10YR3/3	鈍黄橙色 10YR6/4	ほぼ完形	16 世紀末～ 17 世紀初頭	
4	肥前陶器	折縁皿	13.2			釉薬：利休茶 5.5Y5.5/2.5、胎土：薄鈍色Ｎ 7		1/5	17 世紀前半	
5	肥前陶器	皿		(4.9)		灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y7/2	1/2	17 世紀前半	砂目痕
6	肥前陶器	皿		5.1		橙色 2.5YR6/6	灰黄褐色 10YR6/2	高台完	17 世紀初	
7	肥前陶器	皿		7.8		灰白色 2.5Y7/1	灰オリーブ色 5Y6/2	高台完	17 世紀初頭	胎土目、畳付に離れ砂
8	肥前陶器	碗		3.6		黄灰色 2.5Y6/1	灰オリーブ色 7.5Y6/2	高台完	17 世紀初	
9	肥前陶器	碗	12.7	5.1	5.15	素地：パールホワイト色 5Y9/0.5、釉薬：鈍葵色 2.5Y6/4、文様：黄褐色 2.5Y6/4		1/2	17 世紀後半	京焼風
10	肥前陶器	碗	(10.5)			素地：灰白色 2.5Y7/1、釉薬：灰オリーブ色 2.5Y7/2		1/6	17 世紀前半	
11	陶器	鉢	13.8			褐灰色 5YR6/1	灰オリーブ色 5Y5/2	1/2	18 世紀後半～	
12	肥前陶器	鉢	15.9			素地：灰褐色 7.5Y6/2、釉薬：鈍黄色 2.5Y6/3		1/4	18 世紀後半～	
13	肥前陶器	徳利	5.8			釉薬：黄枯茶 7YR4/3、胎土：渋紙色 2.5YR4/4.5		口縁 1/5	18 世紀後半 -19 世紀初	
14	美濃焼	皿	10.4	(6.1)	1.8	灰白色 5Y8/1	灰白色 5Y7/1	1/2	16 世紀末	
15	肥前陶器	片口鉢	18.7	8.8	10.3	褐灰色 5YR5/0	褐灰色 5YR5/0	1/5	18 世紀後半～	
16	肥前磁器	碗	10.4	高台 4.8	5.6	素地：胡粉色 2.5Y9.2/0.5、釉薬：透明、文様：藍色 2PB3/5		1/2	17 世紀末～ 18 世紀初	コンニャク印判
17	肥前磁器	碗	(10.7)	4.4	6.1	素地：胡粉色 2.5Y9.2/0.5、釉薬：透明、文様：濃藍色 2RB2/3.5		口縁小片	17 世紀中～後葉	高台釉ハギ？
18	肥前磁器	碗	(11.7)	4.6	6.8	素地：灰白色Ｎ 8.5、釉薬：オイスターホワイト色 5GY8.5/0.3		1/2	17 世紀前半	
19	肥前磁器	碗		3.2		灰白色 5Y8/1	オリーブ灰色 10Y5/2	1/6	18 世紀	
20	肥前磁器	碗	9.7	(3.4)	7.4	素地：白色Ｎ 9.5、釉薬：スノーホワイトＮ 9.4、文様：薄藍色 9B6.5/3		1/2	17 世紀第Ⅱ四半期	
21	肥前磁器	碗	11.0			素地：胡粉色 2.5Y9.2/0.5、釉薬：秋色 2B8.5/2		1/4	17 世紀第Ⅱ四半期	
22	肥前磁器	碗		4.5		素地：灰白色 10YR8/2、釉薬：灰白色Ｎ 8/、文様：オリーブ灰色 2.5GY6/1		高台完	17 世紀前半	
23	肥前磁器	皿	(13.0)			素地：灰白色Ｎ 8.5、釉薬：深川鼠色 10GY7/1.5		1/9	17 世紀前半	
24	肥前磁器	蓋	9.35	4.1	3.1	素地：灰白色Ｎ /8、文様：藍色 2PB3/5、釉薬：透明		口 1/3	17 世紀後半～ 18 世紀初	
25	肥前磁器	瓶		6.1		素地：白色Ｎ 9.5、釉薬：スノーホワイトＮ 9.5、文様：藍色 2PB3/5		1/2	17 世紀前半	
26	肥前磁器	仏飯器	7.4			素地 : 灰白色Ｎ 8/0　釉薬 : 灰白色 10 Ｙ 8/1		1/2	18 世紀	
27	青花	碗	11.0	5.0	5.6	釉薬：秋色 2B8.5/2、胎土：白色Ｎ 9.5		口縁 1/4	17 世紀初	漳州窯
28	青花	碗	(13.9)			素地：白色Ｎ 9.5、釉薬：スノーホワイトＮ 9.5、文様：薄藍色 2.5PB6.5/5.5		1/7	17 世紀初頭	漳州窯
29	青花	碗				素地：胡粉色 2.5Y9.2/0.5、釉薬：透明、文様：濃藍色 2RB2/3.5		小片	16 世紀末	景徳鎮
30	備前焼	擂鉢				灰赤色 2.5YR4/2	灰赤色 2.5YR4/2	小片	17 世紀第 4 四半期～ 18 世紀前半	
31	備前焼	擂鉢	22.2			鈍褐色 7.5YR6/3	鈍褐色 7.5YR6/3	1/4	17 世紀初頭	
32	備前焼	擂鉢	20.3	9.0	8.0	褐灰色 5YR4/1	明褐灰色 7.5YR7/1	1/2 残	17 世紀第Ⅱ四半期	
33	備前焼	擂鉢	29.2	11.7	12.5	赤褐色 10R4/4	赤褐色 10R4/4	1/2	17 世紀第Ⅱ四半期	
34	備前焼	擂鉢		13.5		灰褐色 5YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	底部 1/3	17 世紀第Ⅱ四半期	
35	備前焼	擂鉢		(14.0)		暗赤褐色 2.5YR5/6	暗赤褐色 2.5YR5/6	底部 1/5	17 世紀第Ⅱ四半期	
36	備前焼	擂鉢				鈍赤褐色 2.5YR4/4	鈍赤褐色 2.5YR4/4	1/8	16 世紀末	
37	備前焼	灯明皿	7.4		1.0	暗褐色 7.5YR3/4	暗褐色 7.5YR3/4	完形	18 世紀後半～ 19 世紀	
38	備前焼	徳利	2.7			灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	口縁完	16 世紀末～ 17 世紀初	
39	備前焼	徳利		10.3		灰褐色 5YR5/2	灰褐色 5YR5/2	胴～底部 1/2	17 世紀	
40	備前焼	徳利				鈍赤褐色 5YR5/4	褐灰色 7.5YR5/2	1/4	17 世紀第Ⅱ四半期	
41	備前焼	壺	4.3			赤錆色 9R	焦茶色 5YR3/2	口縁完	慶長年間	
42	備前焼	壺		4.4		赤褐色 10R4/4	赤褐色 10R4/4	底部完	17 世紀第Ⅱ四半期	
43	備前焼	擂鉢		11.0		鈍褐色 7.5YR5/3	灰黄褐色 10YR4/3	1/2	17 世紀第Ⅱ四半期	外底面ヘラガキ
44	備前焼	甕				灰オリーブ色 7.5Y5/2	鈍赤褐色 7.5Y3/2	胴部片	16 世紀末～ 17 世紀初	ヘラ記号
45	備前焼	陶板？	径 11.0	厚 2.4		灰色 N6/	黄灰色 2.5Y4/1	1/4	16 世紀末～	薬研？
46	肥前陶器	碗	10.5			焦茶色 5YR3/2	土器色 2YR5.5/6	1/4	17 世紀前半	
47	美濃焼	天目椀	11.2	(5.1)	(5.3)	鈍赤褐色 5YR4/4	浅黄橙色 10YR8/3	1/8 残	17 世紀初頭	
48	土師器	皿	10.0	7.0	1.8	鈍黄橙色 10YR7/4	鈍橙色 7.5YR7/4	1/4		
49	土師器	皿	11.2	(7.4)	(2.3)	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	1/4		口縁部すす付着
50	土師器	皿	9.4	(6.2)	1.8	鈍黄橙色 10YR7/2	鈍黄橙色 10YR7/2	3/5		
51	土師器	皿	10.4	6.3	1.8	灰白色 2.5Y8/1	灰白色 2.5Y8/1	1/4		糸切り底
52	土師器	皿	10.5	7.2	2.0	浅黄橙色 10YR8/4	浅黄橙色 10YR8/4	完形		
R 1	瓦	軒丸瓦	① (12.0)	② 2.0	③ 0.81	灰色 N4/	灰色 N4/	1/5	岡山城２式	
R 2	瓦	軒丸瓦	① (15.0)	② 2.1	③ 1.14 ～ 1.28	灰色 N4/	灰色 N4/	1/4	17 世紀中	連珠径 12.8 ～ 14.4㎜
R 3	瓦	軒丸瓦	① (15.9)	② 2.2	③ 0.81	灰色 N4/	灰色 N4/	1/5	16 世紀末	
R 4	瓦	軒平瓦	① 3.9	② 2.6	③ 1.9	灰色 N4/	灰白色 N8/	1/2	16 世紀末	3 転唐草紋

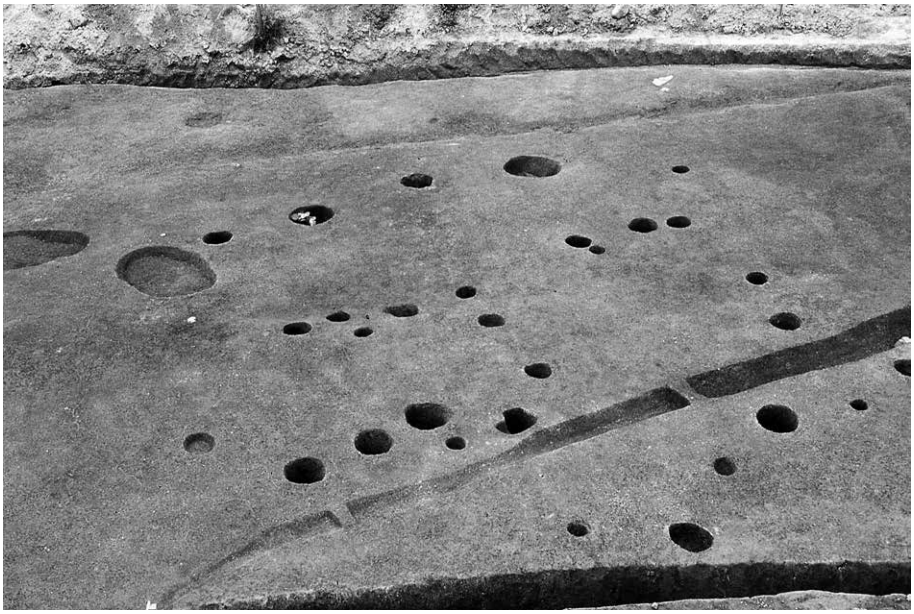
軒平瓦：①瓦当高②文様区高③側区高　軒丸瓦：①外径②周縁径③巴径

津山城外堀跡

掲載番号	種別	器種	計測値（㎝）			色調		残存状況	備考
			口径	底径	器高	内面	外面		
1	陶器	壺	(19.4)			素地：鈍橙色 7.5YR6/4 釉薬：赤褐色 2.5YR2/1	素地：鈍橙色 7.5YR6/4 釉薬：赤褐色 2.5YR2/1	口縁～胴部 1/12 程	岩見焼
2	陶磁器	蓋	(12.0)		4.60	鈍黄橙色 10YR7/3	鈍赤褐色 5YR4/4	天井約 1/3 残	岩見焼
3	陶器	壺	13.0	14.4	20.70	明黄褐色 10YR6/6	5YR3/2	完形品	岩見焼
4	陶器製	擂鉢	(31.2)			鈍赤褐色 5YR5/3	鈍赤褐色 5YR5/3	口縁部 1/20 以下	岩見焼
5	陶磁器					明緑灰色 5GY7/3	釉薬：明緑灰色 10GY8/1 露胎：灰白色 5Y8/1	高台径約 1/4 残	
6	陶磁器	瓶				黒褐色 7.5YR2/2	灰白色 2.5GY8/1	胴部の破片	通い徳利
7	陶器	擂鉢	3.6		2.00	素地：灰白色 5Y7/1 釉薬：暗赤褐色 5YR3/4	素地：灰白色 5Y7/1 釉薬：暗赤褐色 5YR3/4	口縁～高台 1/2	
8	須恵器	甕	(35.0)			灰色 N4/	赤灰色 2.5YR4/1	口縁部約 1/8 残	特殊当具痕
R 1	瓦	軒丸瓦	16.5	2.79	7.35	灰色 N4/	灰色 N4/	瓦頭面 1/2	1 区出土
R 2	瓦	軒丸瓦	15.0	2.15 ～ 2.35	6.00	灰色 N4/	灰色 N4/	瓦頭面のみ 1/2	
R 3	瓦	軒丸瓦	13.8	1.65 ～ 1.75	6.90	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	瓦頭のみ残存 3/4	
R 4	瓦	丸瓦	7.6	2.6		暗灰黄色 2.5YR5/2	灰色 7.5Y4/1		

瓦：①高②厚　軒丸瓦：①外径②周縁径③巴径

矢知遺跡



１　１区全景（南から）

２　土坑１（南から）

３　P27（南から）

図版２

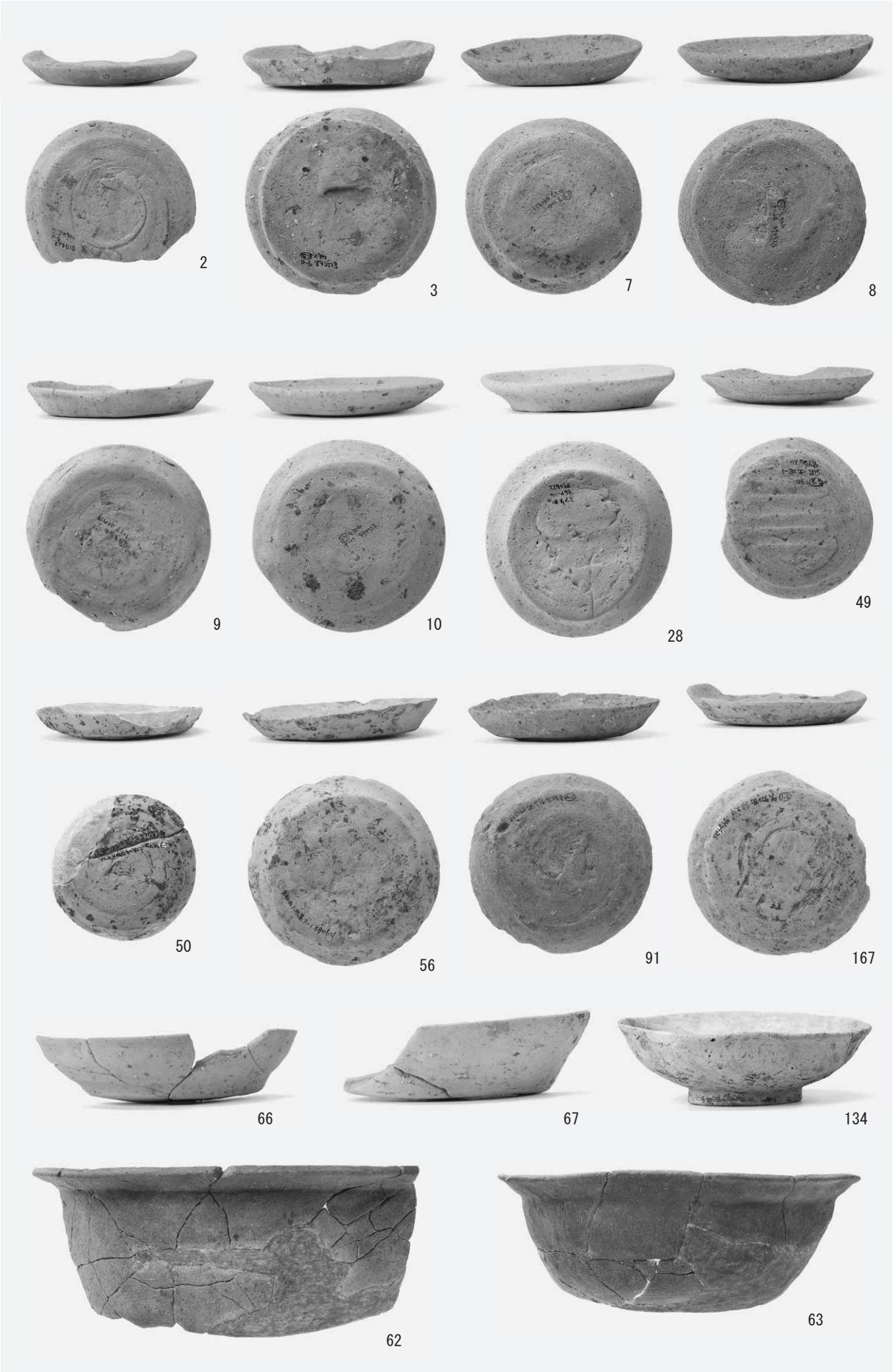
矢知遺跡

１　１・２区間土層断面（西から）

２　２区柱穴群（南から）

３　竪穴１（南西から）

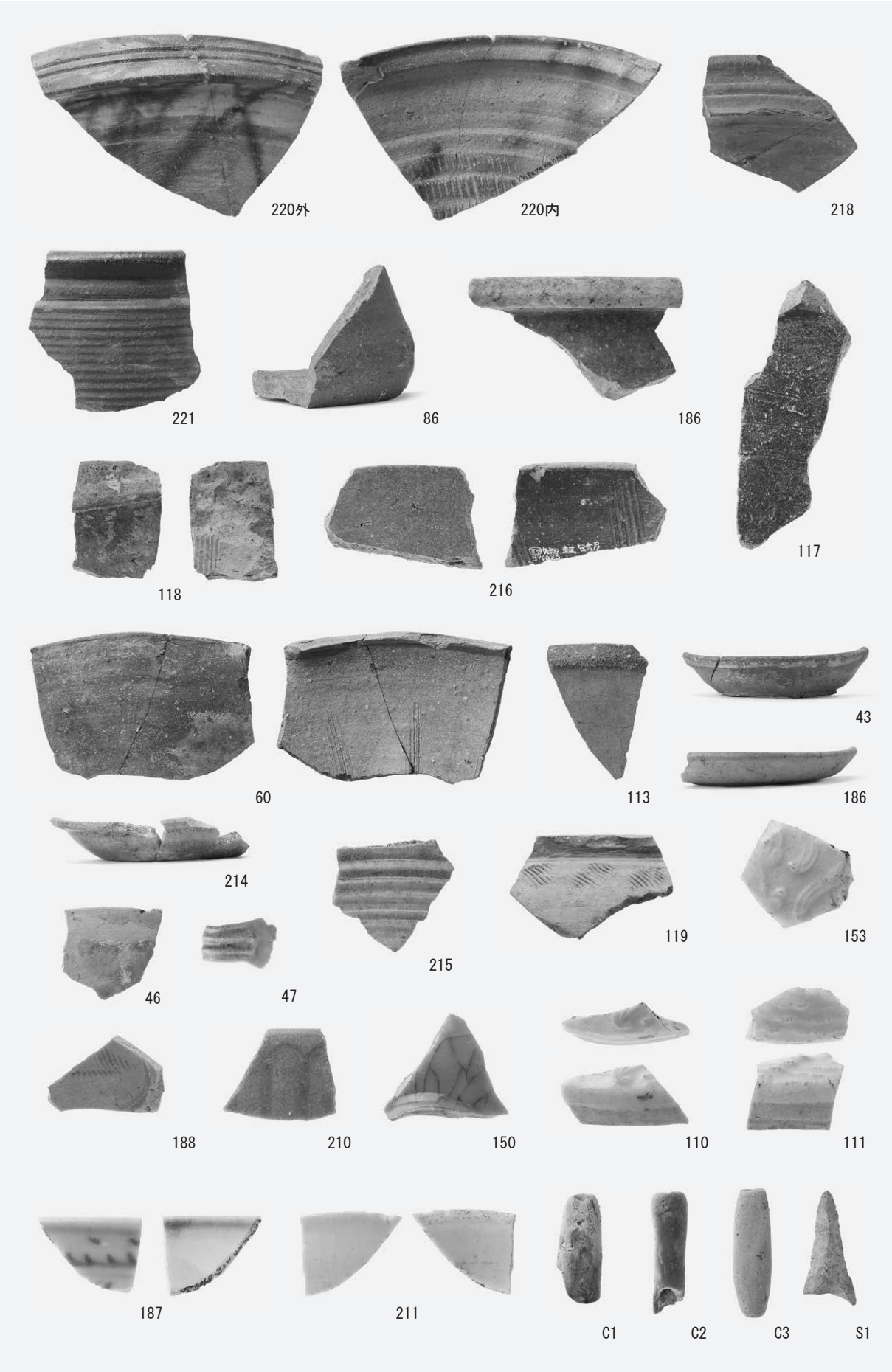
矢知遺跡



出土遺物１

図版４

矢知遺跡



出土遺物２

岡山城内堀跡ほか

出土遺物３

図版６

津山城外堀跡

１　１区石積（西から）

２　２区石段（北西から）

津山城外堀跡

１　２区全景（南から）

２　Ｔ１断面（北から）

３　Ｔ２断面（北から）

津山城外堀跡

出土遺物４

報告書抄録

ふ り が な	やちいせき　おかやまじょううちぼりあと　つやまじょうそとぼりあと
書　　名	矢知遺跡　岡山城内堀跡ほか　津山城外堀跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	265
編著者名	弘田 和司
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所　在　地	〒701−0136 岡山県岡山市北区西花尻 1325−3　TEL 086−293−3211　FAX 086−293−0142 URL　https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/
発行機関	岡山県教育委員会
所　在　地	〒700−8570 岡山県岡山市北区内山下 2−4−6　TEL086−224−2111
発行年月日	2023 年 3 月 17 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やちいせき 矢知遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやましきたく 岡山市北区 みつやち 御津矢知	33101	333010133	34° 49′ 49″	133° 58′ 31″	19890425 ～ 19890627	600㎡	記録保存調査
おかやまじょううちぼりあと 岡山城内堀跡 ほか	おかやまけん 岡山県 おかやましきたく 岡山市北区 おもてちょうちょうめ 表町1丁目ほか	33101	332012292	34° 39′ 56″	133° 55′ 48″	19890208 ～ 19890221	250㎡	記録保存調査
つやまじょうそとぼりあと 津山城外堀跡	おかやまけん 岡山県 つやまし 津山市 きたまち 北町131ほか	33203	332030654	35° 3′ 53″	134° 0′ 17″	19900123 ～ 19900131	450㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
やちいせき 矢知遺跡	集落	鎌倉～江戸時代	竪穴、掘立柱建物、土坑、柱穴、溝	弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器	
おかやまじょううちぼりあと 岡山城内堀跡 ほか	城館	江戸時代	石垣、堀跡	土師器、陶磁器、瓦	
つやまじょうそとぼりあと 津山城外堀跡	城館	江戸時代	土橋、堀跡	須恵器、陶磁器、瓦	

要　　約

矢知遺跡は、鎌倉時代から江戸時代の集落遺跡である。柱穴群を囲む溝の存在及び出土遺物に青白磁合子や瀬戸四耳壺等があることから、在地小領主層の館の可能性がある。なお、弥生時代の竪穴遺構も 1 基存在する。

岡山城内堀跡の調査地は、二の丸跡の西方に位置し、内堀外（三の曲輪跡）側の石垣を長さ約 30 mにわたり検出した。また、中堀跡は調査区の北断面で幅約 20 m、南断面で約 13 m、深さ約 4 mで、石垣は存在せず素掘りであった。

津山城外堀跡では、門の礎石及び根石と考えられる集石と石段 2 段を検出し、北門の位置の推定及び土橋の規模が判明した。土橋は幅 9 mで、北門から約 15° の傾斜を持って外堀外に続いていた。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 265

矢　知　遺　跡
岡山城内堀跡ほか
津 山 城 外 堀 跡

令和５年３月17日　印刷
令和５年３月17日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325−３

発行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下２−４−６

印刷　株式会社 中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏390